大乘華嚴部

（×印は缺本）

兜沙經	一卷	後漢	支婁迦讖譯
菩薩本業經	一卷	吳	支謙譯
如來興顯經	四卷	西晉	法護譯
度世品經	六卷	同	人譯
菩薩十住行道品	一卷	同	人譯
漸備一切智德經	五卷	同	人譯
等目菩薩所問三昧經	三卷	同	人譯
×諸菩薩求佛本業經	一卷	同	聶道眞譯
×十住經	十二卷	同	人譯
×菩薩十法住經	一卷	同	人譯

大乘方等部

×十地斷結經	八卷	後漢	竺法蘭譯
無量清淨平等覺經	四卷	同	支婁迦讖譯
阿閦佛國經	二卷	同	人譯
×佛遺日摩尼寶經	一卷	同	人譯

×大方等大集經	二十七卷	後漢	支婁迦讖譯
般舟三昧經	三卷	同	人譯
內藏百法經	一卷	同	人譯
般舟三昧經	一卷	同	人譯
文殊師利問菩薩署經	一卷	同	人譯
伅眞陀羅所問如來三昧經	三卷	同	人譯
×首楞嚴經	二卷	同	人譯
成具光明定意經	一卷	同	支曜譯
阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經	二卷	吳	支謙譯
維摩詰經	二卷	同	人譯
慧印三昧經	一卷	同	人譯
入吉祥神咒經	一卷	同	人譯
×菩薩生地經	一卷	同	人譯
月明菩薩經	一卷	同	人譯
×須賴經	一卷	同	人譯
×菩薩修行經	一卷	同	人譯

第四節　大月支の佛典に就て

第二章　大月支國の佛教

×方等首楞嚴經　二卷　吳　支謙譯
×十二門大方等經　一卷　同　人譯
普門品經　一卷　西晉　法護譯
文殊師利佛土嚴淨經　二卷　同　人譯
胞胎經　一卷　同　人譯
郁迦羅越問菩薩行經　一卷　同　人譯
幻士仁賢經　一卷　同　人譯
須摩提菩薩經　一卷　同　人譯
離垢施女經　一卷　同　人譯
阿闍世王女阿術達菩薩經　一卷　同　人譯
如幻三昧經　二卷　同　人譯
太子刷護經　一卷　同　人譯
慧上菩薩問大善權經　二卷　同　人譯
彌勒菩薩所問本願經　一卷　同　人譯
阿差末菩薩經　七卷　同　人譯
大哀經　八卷　同　人譯
寶女所問經　四卷　同　人譯

無言童子經　二卷　西晉　法護譯
×密迹金剛力士經　七卷　同　人譯
×菩薩說夢經　二卷　同　人譯
×寶髻菩薩所問經　二卷　同　人譯
等集衆德三昧經　三卷　同　人譯
大方等頂王經　一卷　同　人譯
阿惟越致遮經　三卷　同　人譯
佛昇忉利天爲母說法經　三卷　同　人譯
普曜經　八卷　同　人譯
持人菩薩經　四卷　同　人譯
文殊師利現寶藏經　二卷　同　人譯
文殊師利普超三昧經　三卷　同　人譯
大淨法門經　一卷　同　人譯
無希望經　一卷　同　人譯
持心梵天所問經　四卷　同　人譯
彌勒下生經　一卷　同　人譯
順權方便經　二卷　同　人譯

第四節　大月支の佛典に就て

第二章　大月支國の佛教

太子慕魄經　一卷　西晉法護譯
月光童子經　一卷　同
佛說申日經　一卷　同
乳光佛經　一卷　同
無垢賢女經　一卷　同
佛說決定總持經　一卷　同
寶諸方等學經　一卷　同
無極寶三昧經　二卷　同
如來獨證自誓三昧經　一卷　同
龍施菩薩本起經　一卷　同
八陽神咒經　一卷　同
盂蘭盆經　一卷　同
梵志女首意經　一卷　同
寶網經　一卷　同
菩薩行五十緣身經　一卷　同
四不可得經　一卷　同
須賴天子經　四卷　同

諸佛要集經　二卷　同
賢劫經　八卷　西晉法護譯
弘道廣顯三昧經　四卷　同
海龍王經　四卷　同
四輩經　一卷　同
當來變經　一卷　同
過去佛分衛經　一卷　同
心明經　一卷　同
滅十方冥經　一卷　同
鹿母經　一卷　同
電逝經　一卷　同
德光太子經　一卷　同
無垢施菩薩分別應辯經　一卷　同
文殊師利般涅槃經　一卷　同
×大方廣菩薩十地經　一卷　同
×菩薩所行四法經　一卷　同
×菩薩道行六法經　一卷　同

第四節　大月支の佛典に就て

×文殊師利與離垢女論議極似維摩經　一卷　西晉　聶道眞譯
×觀世音受記經　一卷　同　人譯
×菩薩宿命經　一卷　同　人譯
×菩薩求五眼法經　一卷　同　人譯
×寂音菩薩願經　一卷　同　人譯
逝童子經　一卷　同　支法度譯
×文殊師利現寶藏經　二卷　同　人譯
×阿闍佛國經　二卷　東晉　支道根譯
×如幻三昧經　二卷　同　支施濟譯
×上金光首經　一卷　同　人譯
×首楞嚴經　二卷　同　人譯
須賴經　一卷　同　人譯
大乘入楞伽經　一卷　同　實叉難陀共譯
首行般若波羅蜜經　十卷　後漢　支婁迦讖譯
大明度無極經　六卷　吳　支謙譯
×仁王般若經　一卷　西晉　法護譯

大乘法華部

×法華三昧經　六卷　吳　支彊梁接譯
正法華經　十卷　西晉　支法度譯
×方等法華經　五卷　東晉　支道根譯

大乘涅槃部

×梵般泥洹經　二卷　後漢　支婁迦讖譯
方等般泥洹經　二卷　西晉　法護譯
般泥洹後流布經　一卷　同　人譯

小乘經部

×法海藏經　一卷　後漢　竺法蘭譯
阿那律八念經　一卷　同　支曜譯
×賴吒和羅經　一卷　同　支曜譯
馬有三相經　一卷　同　人譯

第二章　大月支國の佛教

馬有八臨譬人經　一卷　後漢　支曜譯
×小本地經　一卷　同　人譯
梵志阿颰經　一卷　同　人譯
梵網六十二見經　一卷　吳　支謙譯
七知經　一卷　同　人譯
釋摩男本經　一卷　同　人譯
諸法本經　一卷　同　人譯
梵摩喻經　一卷　同　人譯
齋經　一卷　同　人譯
須摩提女經　一卷　同　人譯
不自守意經　一卷　同　人譯
鄯兜試目連經　一卷　同　人譯
賴吒和羅經　一卷　同　人譯
五母子經　一卷　同　人譯
太子瑞應本起經　二卷　同　人譯
滓沙王五願經　一卷　同　人譯
佛說鞞足經　二卷　同　人譯

四願經　一卷　同　人譯
猘狗經　一卷　同　人譯
里氏梵志經　一卷　同　人譯
七女經　一卷　同　人譯
八師經　一卷　同　人譯
龍王兄弟經　一卷　同　人譯
長者音悅經　一卷　同　人譯
未生寃經　一卷　同　人譯
阿難四事經　一卷　同　人譯
孫多耶致經　一卷　同　人譯
須摩提長者經　一卷　同　人譯
×修行方便經　二卷　同　人譯
×人民求願經　一卷　同　人譯
×優多羅母經　一卷　同　人譯
×寃化作比丘經　一卷　同　人譯
×五陰事經　一卷　同　人譯
×禪祕要經　四卷　同　人譯

第四節　大月支の佛典に就て

×大般泥洹經	二卷	吳	支謙譯
（餘他の缺本省略）			
離睡經	一卷	西晉	法護譯
樂想經	一卷	同	同人譯
受歲經	一卷	同	同人譯
尊上經	一卷	同	同人譯
意經	一卷	同	同人譯
應法經	一卷	同	同人譯
力士移山經	一卷	同	同人譯
四未曾有法經	一卷	同	同人譯
舍頭諫太子二十八宿經	一卷	同	同人譯
聖法印經	一卷	同	同人譯
生經	五卷	同	同人譯
瑠璃王經	一卷	同	同人譯
分別經	一卷	同	同人譯
所欲致患經	一卷	同	同人譯
身觀經	一卷	同	同人譯

五百弟子自說本起經	一卷	西晉	法護譯
大迦葉本經	一卷	同	同人譯
四身侵經	一卷	同	同人譯
×越難經	一卷	同	同人譯
×異毋菩薩本起經	一卷	同	聶承遠譯
×十善十惡經	一卷	同	聶道眞譯
×善生子經	一卷	同	同人譯
中阿含經	五十九卷	同	同人譯
增一阿含經	五十卷	同	同人譯
		符秦	曇摩難提譯
		同	同人譯

大乘律部

佛說文殊悔過經	一卷	西晉	法護譯
三曼陀跋陀羅菩薩經	一卷	同	聶道眞譯
菩薩受齋經	一卷	同	同人譯
×菩薩懺悔法	一卷	同	同人譯
×菩薩戒羯受壇文	一卷	同	同人譯
×菩薩雜行法？	一卷	同	同人譯

第四節　大月支の佛典に就て

小乘律部

×戒消災經	一卷	吳	支謙譯
×曾祇尼羯磨及び戒本	不明	東晉	僧建譯

大乘論部

大丈夫論	二卷	北涼	道泰譯
入大乘論	二卷	同	同人譯

小乘論部

×三法度論	二卷	符秦	曇摩難提譯
×阿毘達磨毘婆娑論	百卷	宋	浮陀跋摩譯

雜部

×四十二章經	一卷	後漢	攝摩騰譯？
×佛本行經	五卷	同	竺法蘭譯
×佛本生經	一卷	同	同人譯
×阿育王息壞目因緣經	一卷	同	支婁迦讖譯
×法句經	二卷	吳	謙譯

×四十二章經	一卷	吳	謙譯
阿育王息壞目因緣經	一卷	苻秦	曇摩難提譯

秘密部

華積陀羅尼神呪經	一卷	吳	支謙譯
持句神呪經	一卷	同	同人譯
×摩訶般若波羅密呪經	一卷	同	同人譯
無垢淨光大陀羅尼法	一卷	唐	彌陀山譯

この分類表に由つて觀ると、大月支國には大乘教の經典としては華嚴・方等・般若・法華・涅槃の五大部に屬するもの悉く備はり、小乘教の經典としては『中阿含』『增一阿含』の完全なものを始めとして、四阿含の一部その他多種多樣の小經が行はれ、少數ではあるが、大小兩乘教の律・論並に秘部經典なども存在してゐたのである。さりながら、大月支國に行はれてゐた佛典は以上列擧したものゝ外にも、尙多くあつたことを思はねばならぬ。實際、この國に存在してゐた佛典で支那へ輸入されなかつたものが、可なり多くあつたに違ひない。現に此國から支那へ薩婆多部の

vāstivādin) の律は一部も傳はらなかつたけれども、緒論に於て紹介したやうに庫車附近から大月氏の國語卽ち覩貨羅語で書かれた薩婆多部の波羅提木叉(Prātimokṣa)の斷片――羅什譯出の『十誦比丘戒本』に相當するもの――が發掘せられた。さすれば、大月支國にはこの『十誦比丘戒本』が其の國語にまで翻譯せられて行はれてゐたことを知り得るのである。が併し、此の國に於て最も盛んに流布してゐた佛典は多く支那へ齎されたことであらうから、上に分類表示した支那譯佛典に依つて、如何なる佛敎が大月支國に行はれてゐたかを大體推察することが出來る。

大月支國には小乘敎も相當に行はれてゐたことは明かであるが、寧ろ大乘敎の方が優勢であつたかのやうに見受られる。而して其の大乘敎に屬する經典中最大多數を占めてをるものは、寶積部大集部に屬するものを始めとして、多く方等部のものであつて、華嚴、般若、法華、涅槃諸部に屬する大乘經典が比較的小數であつた所から考察すると、此の國の大乘敎は方等部の思想が中心となつてゐて、未だ充分圓熟の域には達せなかつたらしい。けれ共、方等部の經典に次いでは、華嚴部のものが可なり多くあり、而も華嚴思想に立脚してゐた堅意(Sthiramati)の述作に係る『入

大乘論』――本論の議論空品には『華嚴經』十地品に基いて菩薩修行の階程が說いてある――が行はれてゐたのであるから、『華嚴經』の思想も研究せられてゐたに違いない。要するに、大月支國はその領域が頗る廣大であつたから、所有方面の佛敎が行はれてゐたのであるが、就中方等部の經典が最も廣く最も盛んに行はれたやうである。安息や康居やの地方も亦之と同じ系統の佛敎を受容したのであるが、之等三國は皆西曆第三世紀までには國勢衰退、若しくは國家滅亡の非運に遇ひ、從つて之等諸國の佛敎は異敎徒の蹂躪する所となつて、充分の發達は遂げ得なかつたけれども、此の系統の佛敎は夙に葱嶺以東に傳へられて、支那土爾其斯坦地方に於て美花を開き、更に支那本土に於て好菓を結んだのである。之等三國民の內、バルチア人及びソグディアナ人はイラン民衆であるが、之等二民族と共に最も早く最も繁く東方へ佛敎を傳へたものは非イラン種――印度ゲルマン種若しくは土耳古種――たる大月支民族であつた。固より、大月支民族が天山よりバクトリアに侵入して、此地のイラン人に接し其の文化に觸れて、彼等の言語風習の上に大影響を受けたことは明かであるけれども、彼等民衆が一度佛敎を信奉するや、之が傳播に力を

盡したことはイラン民衆に優るとも劣ることはなかつたのである。然るに、ペリヨー氏は『何等の創意なく何等の獨得の特色だになき土耳古種族を仲介として、支那と印度とは相接觸したるにもあらずして、實にイラン語族の民衆が中央亞細亞に於て屢々活動して、此の兩國の媒介をなせしものたることを今後の學界に於て認容せざるべからず、』と論じて、『藝文』第三年第八號三七頁)佛教東傳の仲介的地位を專らイラン語族の民衆に歸して、その他の土耳其種族若しくは印度アーリヤ(arya)種族の功績を毫しも認められないのは實に偏見であると言はねばならぬ。

之に關聯して一言すべきことは、大月支民族が其の國語に譯された佛典を持つてゐたことである。先きに紹介した覩貨羅語の婆羅提木叉もその一つであるが、獨逸の中亞探檢隊の發見した『彌勒下生經』(Maitrāya vyākaraṇa)の如きは、西紀一九〇七年ミューラー氏の報告に依ると、其の跋に印度語から覩貨羅語に譯し、覩貨羅語から更に土耳古語に譯したものであることが記されてをるといふことである。(F. W. K. Müller, Beitrag zur genaueren Bestimmung der unbekannten Sprachen Mittelasiens.)。この事は既に羽田學士が『藝文』第二年第四號に於て『漢譯の佛典に就て』と題して、經

錄の記事と中央探檢の結果とに基いて、詳論せられた所であつて、學士は漢譯の佛典中には印度以外の言葉卽ちトカラ語ソグト語などから譯されたものが多少あり得るだらうといふことを提示せられた。最初此の論文に接した時には、なほ多少の疑問を挿んでゐたのであつたが、其の後泰西に於ける東洋學者の報告に依つて益々この事實が確められ、今日では之を是認せなければならないやうになつた。ペリヨー氏の如きも、般若(Prajña)三藏が波斯僧景淨(Adam)の助力を得て譯出した『大乘理趣六波羅蜜多經』はソグド語で書かれたものであつたらうと言つてをられる(『藝文』第三年第八號二一頁)。但し法顯や玄奘の傳ふる所に依ると、當時に於ける西域地方の僧侶は皆天竺法に則り、その言語を解しその文字を書いたといふことであるから、彼等が支那に齎した經典は大抵梵語で書かれたものであつたことは明かであり、且又支那人が仲介者の手を經ずして直接印度と交通するやうになつて以來、梵語經典を尊信して胡語經典を信用せない風を生じたから、漢譯經典の中には梵語以外の言葉から重譯せられたものは極めて少いであらうと思はれる。固より、多少はあつたらうが、隋唐以後は斯る經典は皆排斥を受けたやうであ

る。かの般若・景淨共譯の『大乘理趣六波羅蜜多經』七卷は當時の德宗皇帝に依つて理味詞疎といふ非難を受けて、斥けられたのである。而して德宗は從來中華は梵本に因つて法を被つたのであるといふ趣旨から、更に梵本に依つて此の經を翻譯すべきことを命ぜられた。そこで般若は光宅寺沙門利言等の助力を藉りて、再びこの經の梵本を譯して、十卷本を出した（『續開元釋敎錄』卷上）。現存せる『六波羅蜜多經』は梵本より譯した十卷本であつて、胡本譯の七卷本は夙に散逸してしまつたのである。尙又宋の太宗の時、適西域から『大乘祝藏經』を献じた所が、法天といふ者が詔を受けて之れを鑑定して、『此經是于闐書體、非是梵文、況其中無請問人及聽法衆、前後六十五處、文義不正。』と奏上したものであるから、帝は法天を召見して、『使邪僞得行、非所以崇佛敎也、宜焚棄此本、以絕後惑。』との勅諭を下されたといふことである（『補續高僧傳』卷二）。さすれば、唐宋時代に於ては梵語以外の西域の文字で書かれた胡語經典の信用が如何に薄く、之に反して梵語經典の信用が如何に厚かつたかゝ判る。實際、隋唐以後の支那人は梵文で書かれたものでなくては、眞の佛典でないやうに思つてゐたらしい。從つて、隋唐以後の漢譯佛典中

には胡本から譯されたものは殆んどなかつたといつても可からう。假令二三はあつても、それは七卷本の『大乘理趣六波羅蜜多經』のやうに、敎界から驅逐せられて、忽ち散逸に歸してしまつたのである。而して隋唐以前のものゝ中にも胡本から譯されたものは極めて少數であつたに違ひない。

漢譯佛典中には、胡本から譯されたものが少數であつたとしても、胡語に譯されてゐた佛典が少數であつたと思ふてはならぬ。中亞探撿の結果に依ると、特に覩貨羅語で書かれた各種の佛典が可なり多くあつたやうである。然らば、月氏は何時頃から佛典翻譯の事業に着手したかといふに、之は未だ確答する時期に達してゐないのである。羽田學士は迦膩色迦王から二代目若しくは三代目のヴースデヴ王の貨幣には一種のブラーフミー文字でその名が記されてをるといふ事實と、中亞發見のトカラ語經典が所謂slanting blāhmīで記されてあるといふ事實とを照合して、この王の時代にこの字を用ゐて經を譯したのであらうかと想像せられたが（『藝文』第二年第四號五〇頁）、只これだけの考證では未だ確實と見ることは出來ぬ。而もヴースデヴ時代は余の考覈に依ると、大月支佛敎の一時衰運に陷つた時であ

るから、此の王の時代に初めて譯經事業が行はれたとは思はれない。寧ろそれより以後の佛教興隆時代に求めては如何であらうか。詮ずる所、此の問題の解決は今後の研究に俟たねばならぬ。但しこの觀貨羅語の經典が大月支國滅亡以前に成立してゐたものであるといふことは信じてよからうと思ふ。さすれば、三十六種の外國語に通じてゐたと傳へられてをる月氏菩薩法護の譯出した『稱勒下生經』の原本は、或は觀貨羅語のものであつたかも知れない。何となれば、この經が觀貨羅語に譯されてゐたことは明かであるからである。

第三章　安息國及び康居國の佛教

第一節　安息國の佛教

西紀前二四八年若しくは同二五〇年にシリア國王アンチオコス二世の時、バクトリアの鎮將ディオドトス(Diodotos)一世叛いて獨立し、今のアムー河の兩岸を占領して大夏國を建てた頃、スキーテン(Skythen)族の一派ダーヘ(Dahae)部の酋長なるアルサケス(Arsakes)といふもの亦波斯の北方に崛起してパルチア(Parthia)に據り、支那に所謂安息國を建てたのである。支那に於て、このパルチア王國を安息と稱するのは其の國王が代々アルサケス(或はアルシャカ Arshaka)といふ名を襲ふたから此の王名を音譯して以て國號としたのである。

パルチア人は固今の土耳古人と同じ風俗を有する粗野勇敢な騎馬種族であつて、裏海(Caspian Sea)東南の比較的荒蕪の地に住してゐたのである。而して此の民族はバクトリア人のやうに希臘文化に同化せず、ペルシア王及びマケドニア王に羈事してゐた時でも、尙遊牧的習俗を變へなかつたのである。アルサケス一世の時には安息國はなほ僅かにアトレク(Atrek)河の上源地に據つてゐたのに過ぎな

かつたのであつて、而も東方には新興の大夏國を控へ、西方はシリア王國とその境を接してゐたからパシチア人は獨立後數年間は實に窮境に在つたことは想像するに餘りある。

西紀前二四七年にアルサケス二世卽ちチリダテス(Tiridates)王の卽位した時には、尙發展するに至らなかつたが、西紀前二三七年にシリア國王セレウコス二世が大夏と同盟して安息を攻め來るや、王はスキーテン族の一部なるアスパシアケー(Aspasiacae)といふ部落に投じ、その助力に依つて、シリアの軍に克ち、此に於て安息國は實際上獨立を示し、その基礎を固むるに至つたのである。其の後三世を經て、ミトラダテス(Mithradates)大王(西紀前一七四——一三六年)に至つて、國勢頓に興隆した。卽ち大夏が印度の經營に忙はしくて、本國の防備薄きに乘じて、其の一部を占領し、更に鋒を西に轉じてシリア國の內亂に乘じて、メディア(Media)スシアナ(Susiana)波斯バビロニア(Babilonia)を蠶食し、東はヒンヅゥクーシュより西はユーフレイチーズ(Euphrates)河に至る大版圖を形成するに至つた。スミス氏の說によれば安息は此の時ヒンヅゥクーシュを越ゑて印度河以東に及んだといふことである(V. Smith; Early

Hist. of Ind. 2nd ed. P. 212.)。此の大王の死後、其の子フラーテス(Phraates)二世(Arsakes VII.)立ち、シリアと戰ふて勝利を得たが、塞種の侵寇を受けて之と戰ふて陣歿し、西紀前一二七年其の叔父アルタバヌス(Artlabanus)二世代り立つたが、又塞種と戰ふて毒矢に中つて傷死し、西紀前一二四年其の子ミトラダテス二世位に卽くや、塞種を擊破して、東北境を平定したが、其の後アルメニア王チグラネス(Tigranes)と戰ふて西境の地を失ふた。けれども、王は南方にその勢力を擴張し、インド・パルチア王ヴォノーニース(Vonōnēs)及び其の親族の領してゐたアラコシア(Arachosia)並にシースターン(Sistān)を直轄し、パンジャープにも其の主權を確立したらしくあり、且又タキシラ(Taxila)に於けるインド・パルチア王アゼス(Azes)一世をも服屬せしめてゐたのである。

安息國が支那に知られたのは此の時分からであつて、漢の武帝の時大月氏に使して元朔三年(西紀前一二六年)に歸つた張騫に依つて初めて此の國の事情が傳へられたのである。『史記』大宛傳には次のやうに記してある。

安息國在大月氏西可數千里、其俗土著耕田、田稻麥蒲陶酒、城邑如大宛、其屬小大

數百城。地方數千里。最爲大國。臨嬀水。有市民商賈。用車及船。行旁國或數千里。以銀爲錢。錢如其王面。王死輒更錢。効王面焉。畫革旁以爲書記。

茲に嬀水といふのは言ふまでもなく烏滸河のことであるから、張騫の西域に使した頃、安息は西域諸國中の最大强國であつて、その領城の東はアムー河に及んでゐたのである。而して當時バルチア人は已に遊牧的生活を脱して土著の民となり、城廓に據つて耕作に從事し、希臘の文化を受容してゐたことを知り得るのである。安息國と支那とが公然交通を開いたのは、安息國に於てはミトラダテス二世の時であつて、漢に於ては武帝の時である。『史記』大宛傳には此の時の狀況を次のやうに叙してある。

初漢使至安息。安息王令將二萬騎迎於東界。東界去王都數千里。行比至過數十城。人民相屬甚多。漢使還而後發使隨漢使來觀漢廣大。以大鳥卵及黎軒善眩人獻于漢。

此の最後に『黎軒善眩人獻于漢』とあるが、黎軒はレケム(Rekem)であつて、シリア地方を指し、善眩は唐の顏師古の注に『今呑刀吐火殖瓜種樹屠人截馬之術皆是。』とあ

るから、現今の奇術師のことであらう。爾來二百年間ほどは支那安息間の交通は絶ねてゐたが、後漢章帝章和元年(西紀八七年)及びその翌年に安息國から支那に使を遣して師子及び符拔を献じた。符拔とは形麟に似て角を有せないものである。其の後永元十三年(西紀一〇一年)に安息王滿屈が復師子及び條支の大鳥を献じた。時に其の大鳥を安息雀と稱したといふことである。

元來、安息國は前に引用した『史記』大宛傳に記してあつたやうに、行商の盛んな國であつて、東西貿易の中心となつてゐたのである。夙に印度及び此の國を經て、遙かに歐洲へ輸入せられてゐた支那產の絹布繒綵は、特に西羅馬人の珍重する所となり、黃金と重量を同じくして貿易するに至つたが、羅馬は支那と使聘を通せむと欲しても、其の東境常に安息との交渉絶ねず、安息も其の中間に在りて東貨貿易の利を壟斷して、故らに遮りて達するを得ざらしめた。現に彼の班超が西域を平定して其の都護となり、更に西方に漢の威勢を擴張せむと欲して、永元九年(西紀九七年)甘英を遣はして安息を經て大秦(Syria)に使せしむるや、甘英は安息の西境條支に達して波斯灣頭に至つたが、安息の船人が甘英に『海水廣大であつて、往來す

る者善風に逢へば三月にして乃ち渡ることを得るが若し遲風に遇はゞ二歲を費さなければならぬ、故に海に入る人は皆三年の糧食を準備して行き、而も海中にて土地を思ひ、戀慕して數々死亡する者がある。」と告げたから、彼遂に渡らずして還つたと傳へられてゐる。斯くて安息國は東西貿易の中心となつてゐたから、從て思想交換の要衝となり、又此の民族は四方に行商したから、自ら思想交換の媒介者となつたのである。最初支那へ佛教を傳へた西域諸國の譯經僧の中で、安息國から來つたものが少くなかつたのも主として之に基いたのであらう。

今經錄や僧傳を探つて見ると、安息國よりは先づ後漢桓帝の建和二年(西紀一四八年)に洛陽に來つた安世高を始めとして、靈帝光和四年(西紀一八一年)に洛陽に於て佛經を譯出した安玄、魏の正元元年(西紀二五四年)に洛陽白馬寺に於て律を譯出した曇無諦(Dharmasatya?)等が來て居る。抑、後漢の明帝の代大月氏國から佛僧が支那に來つてから以後、殆んど八十年間は西域と支那との交通が頗る頻繁であつたにも拘らず、西域から一人として佛教を齎したものがなかつたのに、却て兩者の政治的交通が絶ねてしまつてから、斯く安息國等より佛僧が支那に來つたといふの

は大に注意せねばならぬ現象である。凡そ宗教の傳道師が本國を離れて外國に赴くには種々の原因もあらうが、先づ異教徒の壓迫を受けた場合か、又統治者より迫害せられた場合か、或は又外國より招聘せられた場合か、左もなくば其の國の宗教熱が熾んであつて、勢他國に向つて其の教を宣布せむとするに至る場合かでなければならぬ。然らば、今安息國より斯く引き續いて支那に佛僧が來つたのは、その孰れの場合に相當するであらうか。西暦第三世紀頃よりはシリアに薩珊朝が興つてツァラッシュトラ教を恢復して、外教を壓迫したから、西暦第三世紀以後に安息國から支那に來た佛僧は或は第一の場合に相當するかも知れないが、安世高や安玄のやうに第二世紀に來つた者は斯る事情の下に本國を去つたものでない。又安世高の如きは其の傳に依ると、安息國王正后の太子であつたが、父王薨じて將に王位を嗣がむとするに當つて、乃ち深く苦空を惟ひ、名器を厭離して、王位を叔父に讓りて出家修道し、諸國を遍歷して弘化を以てその務めとなしたといふのであるから、當時安息國の王家は佛教的感化に浴してゐたに違ひない。さすれば、固より第二の場合にも當らない。尙又支那より安息國に向つて弘教僧の派遣を依賴

したやうなことは何處の記錄にも見當らないから第三の場合でもない。然れば、どうしても第四の場合でなければならぬ。卽ち當時安息國に於ては佛敎が非常に盛んに行はれて、傳道熱が燃ゑ上つてゐたと解釋するの外はない。

然らば、安息國へは何處から佛敎が傳はつたのであらうかといふに、之は直接バクトリア地方より傳はつたのであらうと思ふ。この事に就ては屢々前述した所であるが、安息國は夙に佛敎の布かれてゐた大夏國に接して、絕ゑず政治上の交涉があり、且又商業國であつた兩國の間には貿易上の交通が頻繁であつたから、大夏の佛敎が此の國へ流入するのは自然の潮勢である。而して西紀前第一世紀の中頃以後此の國にまで其の勢力を及ぼした大月氏國に熱心な佛敎信者の王が出たのであるから、此の國が其の影響を蒙つたことは推察するに餘りある。

扨、安息國に於て佛敎が隆盛を極めて居た時分には、如何なる部類に屬する佛敎が行はれてゐたのであらうか。之を知るには此の國から支那へ將來された佛典を撿査するに若くはない。先づ最初に來つた安世高の譯出した經典に就て述べ

やう。

安世高の譯出した經典の數に就ては諸傳一致を缺いてゐて、『出三藏記集』では三十四部凡四十卷と記し、『歷代三寶記』では一百七十六部合一百九十七卷といひ、『開元釋敎錄』では九十五部百十五卷(內五十四部五十九卷現存、四十一部五十六卷缺本)と傳へてある。『開元釋敎錄』に於ては、彼の傳を叙した後『其釋道安錄、僧祐出三藏記、慧皎高僧傳等止云高譯三十九部、費長房錄便載一百七十六部、今以房錄所載多是別生、從大部出、未可以爲翻譯正數、今隨次刪之。』と記して、八十五部八十五卷を除きて曰ふ、『長房等錄皆云、安高所出、今按隋開皇仁壽二本衆經錄及新括、出別生抄經等、此等並從諸經別生、或非安高所出、不合足爲翻譯之數、今爲實錄、故總刪之。』と。故に『開元釋敎錄』の所傳が最も正確のやうであるから、之に從ふことゝした。先づ大乘部に屬するものを擧ぐれば『大乘方等要慧經』(『寶積』彌勒同入法會と同本)一卷、『寶積三昧文殊問法身經』、『遺日寶積三昧文殊師利菩薩問法身經』、『寶積』入法界體性經と同本)一卷、『無量壽經』、『寶稊』無量壽會と同本)二卷、『如幻三昧經』、『寶積』善住竟會等と同本)二卷、『藥王藥上菩薩觀經』一卷、『佛印三昧經』一卷、『月燈三昧經』一卷、

『大道地經』一卷、『太子慕魂經』一卷、『四不可得經』一卷、『八大人覺經』一卷、『大安般守意經』一卷がある。而して最後のものは最も流行したと見にて、道安は之に注及び序を制し、康僧會及び謝敷の如きも亦之が序を作つた(『出三藏記集』第六所收)。而して此の經は藏經中には小乘經部に編入せられてあるが、此の經文の一部には明かに大乘空觀の思想を含んでをるから、寧ろ大乘經部中に分類すべきものである。此の經の外に禪に關するものとしては、『五門禪法經』一卷、『禪定方便次第法經』一卷、『禪經』二卷、『禪行三十七品經』一卷、『禪行法想經』一卷等があるが、最後の二經を除いては皆缺本として傳へられて居るから、その內容を知ることは出來ぬ。而して其の現存して居るものも頗る短篇であつて、別に大乘的思想として認むべき點は存して居ない。

更に小乘部に屬するものを見ると、主として四阿含中の一部の異譯である。先づ『長阿含』に屬するものとしては、第九卷の異譯たる『長阿含十報法經』、『多增道章經』、『十報經』一卷、第十卷の異譯たる『人本欲生經』一卷、第十一卷の異譯たる『尸迦羅越六向拜經』一卷、其の他『道意發行經』二卷、『十二門經』二卷(或一卷)、『小十二門經』二

卷、『七法經』(阿毗曇七法行經)一卷、『義決律經』(義決律法行經)一卷があり、『中阿含』に屬するものとしては、第二卷の異譯たる『一切流攝守因經』一卷、第七卷の異譯たる『四諦經』一卷、第十卷の異譯たる『本相倚致經』一卷、第二十一卷の異譯たる『是法非法願』一卷、第二十七卷の異譯たる『漏分布經』一卷、第六十卷の異譯たる『婆羅門子命終愛念不離經』一卷及び『十支居士八城人經』一卷、其の他『普法義經』、『普義經』、『具法行經』一卷、『父母恩難報經』一卷があり、『增一阿含』に屬するものとしては、第二十三卷の異譯たる『婆羅門避死經』一卷、第四十九卷の異譯たる『阿那邠邸化七子經』一卷、その他『阿難同學經』一卷、『四十四篇經』、『雜經』三卷、『百六十品經』、『增一阿含百六十章經』一卷があり、『雜阿含』に屬するものとしては、第二卷の異譯たる『七處三觀經』、『首末總三十經』一卷(或二卷)、第十卷の異譯たる『五陰譬喩經』一卷、第十五卷の異譯たる『轉法輪經』一卷、第二十八卷の異譯たる『八正道經』一卷がある。之等の外に、彼は『內藏經』、『圓藏百品』一卷、『修行道地經』、『順道行經』七卷(或六卷)、『思惟要略經』一卷、『法句經』四卷、『小般泥洹經』、『泥洹經諸比丘經』、『泥洹後變記經』、『泥洹後比丘世變經』、『佛般泥洹後比丘世變經』一卷、『空淨天感應三昧經』、『空淨三昧經』一卷、『分別善惡所起經』

一卷、『出家功德因緣經』一卷、『摩鄧戈經』一卷、『堅意經』一卷、『罵意經』一卷、『處々經』一卷、『陰持入經』二卷等を譯出した。而して最後のものには道安が序を制して居る。『出三藏記集』第六所收。道安は復『長阿含』第十卷の異譯たる『人本欲生經』にも序を作つて居る。現行藏經を見ると、安世高の譯として『犍陀國王經』、『阿含正行經』、『十八泥犂經』、『罪業應報敎化地獄經』、『法受塵經』、『長者子懊惱三處經』各一卷が存在して居る。之等の經名は古い經錄には載つてゐないが、之等は恐く以上揭げたものゝ中、其の內容は同一であつて其の名を異にしたのに過ぎないであらう。

古來、支那佛敎に於ける最初の傳道者として有名な摩騰、法蘭の譯經に就ては、前述したやうに、隨分疑はしい點があるが、假令幾分の事實を含むものとしても、彼等の譯出した數部の經典は支那佛敎を開拓する上に於て、さほど重きをなしてゐないのである。其の後八十年を經て、安世高は初めて寶積部に屬する大乘經典や阿含部に屬する小乘經典を多數譯出し、而も道安の如きは其の經を或は註し或は之に序を作り、又康僧會や謝敷等も序を制して居る所から見ると、支那佛敎を發展せしむる上に安世高所譯の經典が與つて力あり、支那佛敎の基礎をなして居ること

は爭はれない事實である。從つて、彼は眞の意味に於ける支那佛敎の最初の開拓者とも謂つ可きである。故に嚴佛調はその制作に係る『沙彌十慧章句序』に『有菩薩者、出自安息、安世高、韜弘稽古、靡經不綜、愍俗童蒙、示以橋梁、於是漢邦敷宣佛法、凡厥所出數百萬言、或以口解、或以文傳』と記して、安世高の功業を讃歎して居る。

次に優婆塞安玄は光和四年（西紀一八一年）に沙門嚴佛調（『歷代三寶記』には彼を以て淸信士として居るが、之は誤りである）と共に『寶積』郁伽長者會と同本たる『法鏡經』二卷（或一卷）を譯し、康僧會は之に註を作つて居る。安玄は此の外『阿含口解十二因緣經』（『斷十二因緣經』）『阿含口解』一卷を譯出したが、共に現存して居る。

沙門嚴佛調は臨淮郡（今の安徽省泗州府盱治縣）の人であつたけれども、彼は常に安玄に接してゐたから、彼の譯出した所の經典はおそらく安玄から授けられたものであらう。而して彼の譯出した經典の種類も安世高や安玄の譯した所のものと殆んど同じ部類に屬して居る。卽ち方等部に屬する『菩薩內習六波羅蜜經』、『內六波羅蜜經』、一卷と、『大般若』那伽室利分と同本たる『輭首菩薩無上淸淨分衞經』、『決了諸法如幻三昧經』二卷（或一卷）及び『古維摩詰經』二卷とである。『歷代三寶記』に於ては、之等

の外に『迦葉阿難經』を以て、彼の譯する所であるとしてあるが、『開元釋敎錄』の所說に從ふと、之は諸經の抄であつて、正譯と見ることは出來ないといふことである。

更に魏の正元元年(西紀二五四年)に洛陽に來り、白馬寺に於て『曇無德羯磨』一卷を譯出した曇無諦は安息國人であつて、律に通じた沙門であつた。

最後に安息國から支那に來つた沙門安法欽は西晉武帝の大康二年(西紀二八一年)から惠帝の光熙元年(西紀三〇六年)までの間に五部の經典を譯出した。『道神足無極變化經』(『合道神足經』)四卷(三卷)『文殊師利現寶藏經』(『示現寶藏經』)二卷(三卷)『阿育王傳』(『大阿育王經』)七卷(五卷)『阿闍世王經』二卷『阿難目法經』一卷、卽ち是れである。

以上の外、魏の世に支那に來つた沙門安法賢は、經錄では或は西域人といひ、或は外國沙門と記してあるが、安といふ姓を冠して居るから、多分安息國に關係のある人であらう。彼は『華嚴』入法界品の少分たる『羅摩迦經』三卷及び『大般涅槃經』二卷を譯出して居るが、何れも缺本となつて居る。併し、今之等の經典を以て直接安息國から渡來したものであると斷言するのは少しく早計であるかも知れないが、全

く根據のないことではない。

之を要するに、當時安息國に行はれた佛敎は固より大小兩乘敎が混淆してゐたことは言ふまでもないが、其の大乘敎は主として方等部に屬するものであつて、又華嚴部のものも少しく行はれてゐたらしいから、安息國の佛敎は大月子のそれと同一系統に屬するものであることは明かである。而して此の國には大月支國の佛典中には見當らなかつた曇無德部(Dharmaguptas法藏部)の律卽ち『四分律』の行はれてゐたことを知り得るのである。

抑安息國は前漢時代に於ては國勢最も伸張してゐたが、西曆第三世紀に至つては、その威勢全く地に墜ち、全國の土地は幾多の諸侯伯に分割せられて相攻伐せる時に當り、薩珊朝の祖アルダシール(Ardashir)の爲に西紀二二四年若しくは二二七年最後の安息國王たるアルタバヌスは破られて、安息國は茲に滅亡するに至つたのである。併し、支那の正史に依ると安息國は三國時代に於ても尙獨立を保つてゐたやうである。

大宛安息條支烏弋烏弋一名排持此四國次在西本國也無增損前世以爲條支在大秦西今其實在東前世又謬以爲驪靬於安息今更役屬之號爲安息西界……大秦國一號犂軒在安息條支西大海西從安息界安谷城乘船直截海西。（『魏志』卷三十）

又『魏書』西域傳には『安息國在葱嶺西都蔚搜城北與康居西與波斯相接至大月氏西北去代二萬一千五百里周天和二年其王遣使朝獻』と記してある。周の天和二年は西紀五六八年に相當するから、當時なほアルサケス王朝がその命脈を繋いでゐたらしい。併しこの外同書には『穆國都烏滸水之西亦安息之故地』と記し、又『烏般國都烏滸水西舊安息之地』と錄してあるから、バルチア人は薩珊朝興起後は其の勢力に壓迫せられて、アムー河以東の地に逸れ、河西の領地は悉く之を失ふたのであるらしい。而して『周書』卷五十異域傳嚈噠の條に『其人兇悍能戰鬪于闐安息等大小二十餘國皆役屬之』と載せてある所から觀ると、嚈噠族興起の時代卽ち西曆第五世紀に於ても安息國はなほ一國の形態を保つて、嚈噠に役屬してゐたことは明かである。然らば薩珊朝興起後に於ける安息國の根據地は何處であつたかといふに、『隋書』卷八十三西域傳に『安國漢時安息國也王姓昭武與康國王同族字

設力登妻康國王女也都在那密水南』と記し、『唐書』卷二百二十一下西域傳に『安者一曰布豁又曰捕喝』と錄してあつて、那密水はツァルアフシャン(Zar Afshan)河のことであつて、布豁若しくは捕喝はボカーラ(Bokhāra)のことであるから、バルチア人は西紀二二四年若しくは二二七年以後はアムー河以東の地に移り、ツァルアフシャン河の南ボカーラを中心として國を建て、六朝時代の間は辛うじてその命脈を保ち、隋代に至つて全く滅亡に歸したらしい。白鳥博士は漢時代の安息國と南北朝時代のそれとは全くその方位を異にせし事實に基いて、梁代以後に出來た僧傳に記されてゐる安息國人の本國は漢代の安息ではなくて、南北朝及び隋唐時代の安息であつたかも知れないと言つてをられるが（『東洋學報』三四八——九頁）、固より西曆第三世紀の中頃以後支那に來つた曇無諦安法賢安法欽の本國は南北朝時代の安息であつたらうけれども、西紀第二世紀の中期から後期にかけて支那に來つた安世高及び安玄の本國は漢代の安息卽ち『後漢書』に所謂和櫝城——多分今のアスラーバード(Asterābād)であらう——を中心とせる東部波斯であつたらうと思はれる。玄弈時代に於ても、なほ波斯には彼の所謂提那跋(Dinabha?)外道卽ちツァラッシュトラ

教の勢力内に小乘有部の佛教が行はれてゐたのであつて、數百の僧徒が居たばかりでなく、佛鉢が此の王宮に在つたとさへ傳へられてをるのであるから、昔時に於ける此の地方の佛教の盛況は想像するに餘りある。だから、漢代支那に遊化した安世高や安玄の如きは此の地方の人であると觀て毫しも差支はない。

然らば、烏滸水以東の地に移つたバルチア人の間には何時頃まで佛教が行はれてゐたかといふに、之は確かに知ることは出來ないが、西暦第五世紀の末期に近い頃までは安息國に於てなほ佛教が行はれてゐたといふことだけは推定し得られる。何となれば、支那に於て三論宗を大成した吉藏卽ち有名な嘉祥大師は梁の武帝大清三年(西紀五四九年)に金陵(南京)に於て生れたのであるが、彼の先祖は安息國人であつて彼の祖父の時にその本國安息から仇を避けて支那に來つたのであつて、彼の先祖は代々佛教信者であり、而も彼の父は出家して道諒と名け、食を乞ひ法を聽くを以て常業としてゐたといふのであるから『續高僧傳』卷十一吉藏傳、吉藏の祖父が本國に居た時代、おそらく西暦第五世の末期頃にはなほ安息國に佛教を奉ずるものがあつたことは明かである。

第二節　康居國の佛教

康居國も亦初期の支那佛教の本源地として、佛教史上有名な國である。張騫が大月氏に使した時大宛國からこの國に來り、この國人が彼を導いて大月氏國に到らしめたのである。當時康居國は如何なる地域を占めてゐたかといふに、『史記』大宛傳には康居は大宛の西北二千里に在ると記してある。然らば、康居の位置の標準となる大宛國は何處の地であつたかといふに、『魏書』の西域傳には破落那を以て故の大宛國であると記してある。この破落那がフェルガナ(Ferghana)の對音であることは學界の定說であつて之を疑ふものはない。而して『漢書』の西域傳には大宛國王は貴山城を治むとあるが、『史記』の大宛傳に大宛は其の俗土着にして田を耕すと記してあるから、『史記』時代に於ても此の國王は貴山城を治めてゐたに違ひないから、この城の地位が明瞭になれば、康居の位置を確定することは容易である。けれ共、この城の所在地に就ては學者の意見區々として一定してゐない。リヒトホーフェン氏はこの城を以てアラビア記者の所謂 Usrshna、唐代の記錄

に所謂窣堵利瑟那に相當せしめ、今のウラチューベ (Ura Tube) ならむと言はれたが (Richthofen; China, I, P. 451.)、其後最も有力な說として、ラクーペリー (Lacouperie) 及びブレッチナイデル (Bretschneider) 兩氏のカーサーン (Kāsān) 說と、三宅博士のコーゼンド (Khodjend) 說との二種の異論が行はれてゐたのである。ところが、一昨年白鳥博士は『史記』の大宛傳に於ける大宛城と河水との關係を示せる記事に基ゐて、貴山城がカーサーンであらねばならないことを考證せられた(『東洋學報』第一卷三一三—四頁)。この考證に對しては恐らく異議を挿み得る者はなからう。若し果して貴山城が今のナマンガン (Namangan) 附近のカーサーンであるとすれば、此の地から北方若しくは西北方二千里距つてをる地方に康居國が位してをつたといふのであるから、此の國は當時藥殺水 (Jaxartes) 卽ちシル河 (Syr Daria) の北部及び西比剌亞の吉利吉思 (Kirghiz) 曠野の地を占めてゐたやうである。康居民族の根據地がキルギズ曠野に在つたと見ることは東西學者の一致してをる所である。

更に『史記』の傳ふる所に依ると、康居は行國であつて月氏と大にその俗を同じうしてゐたといふことであるから、康居民族も亦月氏民族と同じく游牧人種であ

つたことは明かである。而して白鳥博士の說に從ふと、康居國民は大月氏民族と同じく土耳古種であるとのことである。尙又白鳥博士の說に依ると、康居といふ名稱は西曆第八世紀の頃にアラル (Aral) 海の沿岸及びシル河の下流域に住してゐたカンガル (Kangar)——Cagatai 語にては勇健の義——といふ種族の名を寫したものとも見ゐ、或は西曆第十三世紀の初めにウラル (Ural) 河より以東イシク・クル (Issik-kul) 湖の間に亘る曠野に游牧してゐたカングリ (Kangli)——Cagatai 語にては車の義——といふ種族の名を寫したものとも見ゐるが、之等兩種族の名が西史の上に現はれた年代から考へると、康居を以て寧ろカンガルに當てた方が、穩當であらうとのことである(『東洋學報』第一卷三四五頁及び三三〇頁)。

張騫が西域に使した頃は康居は小弱國であつたと見ゐて、『史記』には『康居……國小。南羈事月氏、東羈事匈奴。』と記してある。されば、當時康居國は東方の匈奴と南方の月氏との勢力に掣肘せられ、之等兩國に服屬してゐたのである。然るに『漢書』の時代になると、康居の國勢に多少變化を生じた。卽ち『漢書』の西域傳には康居に五小王のあることを記して、次のやうに各王の治域を示してをる。

康居有小王五。一曰蘇薤王。治蘇薤城。去都護五千七百七十六里。去陽關八千二十五里。二曰附墨王。治附墨城。去都護五千七百六十七里。去陽關八千二十五里。三曰窳匿王。治窳匿城。去都護五千二百六十六里。去陽關七千五百二十五里。四曰罽王。治罽城。去都護六千二百九十六里。去陽關八千五百五十五里。五曰奧鞬王。治奧鞬城。去都護六千九百六里。去陽關八千三百五十五里。凡五王屬康居。

今『西域傳補注』に從ふて、之等小王城の地域を研究すると、第一の蘇薤城は玄弈の所謂羯霜那國(Kasanna)であつて卽ち今のKeshに相當し、第二の附墨城は玄弈の所謂屈霜儞迦國(Kusannika)であつて、卽ち今のKerminch附近に相當し、第三の窳匿城は玄弈の所謂赭時國(Tyashi)であつて、卽ち今のTashkend地方に相當し、第四の罽城は玄弈の所謂捕喝國(Bōkh)であつて、卽ち今のBokhāraに相當し、第五の奧鞬城は玄弈の所謂貨利習彌伽國(Khorismika)であつて、卽ち今のKhivaに相當する。要するに之等五小王國はタシュケンドとアムー河との間の粟弋(Sogdiana)——白鳥博士は『後漢書』西域傳に康居の屬國として記してある粟弋の字音はZoku-yokuその南京音はSuk-dokなれば、之がSugdak卽ちSogdianaの對音であることは明かであると考證せら

れた、而して『魏書』には之が粟特と記されてある——の地と基華(Khiva)地方とを包含してをるのであるから、康居國は張騫時代以後、前漢末までに南方にその勢力を發展したことは明白である。然るに、白鳥博士は張騫が月氏に使した時、西方ウラチューベまで領してゐた大宛が直ちに彼を大月氏國に赴かしめずして、康居人の手を借りて大月氏國に送つたといふ史的事實と、粟特と觀貨羅との間には鐵門の險あつて、自ら兩區域を截斷してをるから、觀貨羅に據れる勢力がツァルアフシァン河流域に及ぶこと、の困難なるは、タシュケンド・トカリスタン等の地を占領せる邦國が此の地域に命令することの容易なるに如かないといふ地勢上の考察とに立脚して、トマッシェク(Tomaschek)及びフランケ兩氏のやうに粟特は元大月氏の領土であつたのを康居が勢力を得るに從つて、之を奪ひ取つたのであるとする說に反對して、康居は武帝の時より既に粟特の地を領有してゐたのであると極力主張せられた(『東洋學報』第一卷三四〇——四二頁)。けれ共、博士のこの主張は大月氏が『史記』の時代から大夏を征服してその地を領有してゐたといふことを證明せむために、强ひて粟弋の地を康居の領域と看做さうと努められた嫌ひがあるやうに思はれる。

博士の提示せられた張騫の月氏に使した行程は博士の主張に對する有力な證權であるには違ひないが、併し張騫が其の際大宛の王と會見してゐる所から考へると、彼は大宛の都たる貴山城卽ちカーサーンに赴いたに違ひないから、此の地より大月氏の根據地なる嬀水北方の王庭に到るに、康居南方の領域卽ち今の Tashkend 地方を通過したからとて殆んど迂回にはならない。若し當時の康居王が『漢書』西域傳康居國の條にその國王冬期の治城として其の名の擧げられてゐる卑闐城——白鳥博士の考證に依ると此の城の所在地は今の Turkestan より Chimkend に亘る地域に求めねばならないとのこと——を既に治めてゐたとすれば、チムケンドよりも尙遙か南方に至るまで、少くともシル河以北の地は當時康居國の勢力範圍であつたに違ひないから、今のナマンガンの西北に當るカーサーンから大月氏の根據地へ至るには康居の領域內にあつた今のタシュケンドに出るのが當然の順路である。且又假令地理的關係は暫らく之を措くとしても、大宛が康居をして張騫を月氏に送致せしめたのは、何等か外交的事情に由つたものと想像することが可能である。而して博士の他の論據たる地勢的考察も餘り權威のあるものではない。

尤も、粟弋と覩貨羅とは鐵門に依つて區分せられてはをるけれども、當時なほ游牧的風俗を維持してゐた勇悍な大月氏民族に取つては鐵門の險を越ねて粟弋の地を監領することは敢て不可能のことではない。要するに、白鳥博士の示された論據のみでは未だ以て前漢武帝の時代より康居が粟弋を屬國としてゐたことを確證するに足らぬ。而も康居國に關する『史記』と『漢書』との記事の間には明かに差異が存してゐて、『史記』に於ては康居を以て小國となし、月氏及び匈奴に羈事せることを錄してあるに反して、『漢書』に於ては匈奴に羈事せることのみを記して、月氏に羈事せることは載せてない。加之、『漢書』の時代には其の兵數に於て二三萬の增加を見、又其の人口數に於て殆んど二十萬——『史記』には康居の人口數は示してないが『漢書』に於ける康居の兵數と口數との比例を『史記』に於けるその兵數に適用して計算したのである、——の增加を見るのであるから、康居が張騫の西域を去つた後、前漢末に至るまでの間に、その國力を發展し來つたことは疑ひを容るべきでない。翻つて、『史記』大宛傳に於ける月氏の條を見るに、『始月氏居敦煌祁連間、及爲匈奴所破。乃遠去過宛。西擊大夏而臣之。遂嬀水北爲王庭』とあるから、月氏

民族は大宛卽ちフェルガナの地を通過して、先づその西方ソグディアナの地に據り、鐵門を踰ゑて大夏を征服したのであるらしい。而して當時はアムー河北方の地に王庭を設けたのであるが、『漢書』の時代に及んで其の游牧的習俗を脫却するや、更にアムー河以南の地にその根據を移したから、隨つて自らソグディアナの防備の薄らぐに乘じて、康居國が之を奪ふた結果、其の國力を增進し、月氏に羈事することを止めたのではあるまいか。斯く考察する方が當時の眞相を得てゐるものゝやうである。

上述の如く、康居は前漢時代に國力增進し、後漢時代はなほ粟弋を屬國として其の勢力を保持してゐたやうであるが、漢史に於ては其の後の消息を知ることは出來ぬ。唯『魏志』並に『晉書』に於て魏の少帝咸熙二年(西紀二六五年)及び晉の武帝泰始三年(西紀二六七年)に康居國王那鼻が使を遣して善馬を献じ、更に同じく武帝の大康八年(西紀二八七年)にも亦此の國から來献したといふことが傳へられをるばかりである。然るに、北魏の時代になると、康居といふ國名は亡びて、其の後を悉萬斤・者舌と稱へたのである。悉萬斤は今のサマルカンド地方を指し、者舌は玄奘

の所謂赭時國であつて、今のタシュケンド地方を指してをるのである。但し、北魏時代より以後は康居の後を一般に康國と呼んだのであつて、『魏書』卷百二『隋書』卷八十三『北史』卷九十七の西域傳には、皆『康國者康居之後也。……西域諸國多歸之。米國史國曹國何國安國小安國那色波國烏那曷國穆國皆歸附之。』と記してある。康國は今のサマルカンドであつて、之に附歸してゐた諸國は皆ソグディアナの域內に位してゐたのであるから、南北朝時代の康居國は漢代の康居がその屬國としてゐた粟弋地方に相當することは明かである。

此の國は古來商業中心の國であつたと見ゐて、『漢書』西域傳に依ると、成帝の代(西紀前三二—七年)康居が侍子を漢に遣して貢献した時、都護の郭舜が康居の都護吏に對する傲慢な仕打を指摘して、その侍子を派遣するのは畢竟通商をせむが爲の口實に過ぎないといふことを言上してをる。而して又『梁高僧傳』卷一に依ると、吳の赤烏十年(西紀二四七年)に建鄴(金陵)に來つた康僧會の父は康居國人であつて、商賈のために交趾(今の安南交州府の西)に移住したといふことである。ペリョー氏の報告する所に依ると、スタイン氏は羅布泊より燉煌に通ずる古道に於て、衞堡の廢墟より

西暦紀元前第一世紀の時代に作成せられたソグディアナ語の商業上の文書を發掘し、其他スタイン氏の發掘した古文書の中には、西暦第七世紀の初期に當つて、康國民族が羅布泊の南、土其耳斯坦南道の交叉點の地に、一殖民地を建て、その後一世紀を經てなほ自治體の組織を保有せしことを記してあるといふことである(『藝文』第三年第八號一四——五頁)。かく、康居國民は錙銖の利を逐ふて、各處に轉住し、支那にまでも移り來つたのであるか、商業上の關係と離れ、或は國難を避ける爲、或は佛教を傳へる爲に支那に來つたものも可なり多くあつたらしい。『法華經傳記』卷五に依ると、隋京師靜法寺釋智嶷は姓を康といひ、本康居王の胤であつたが、先祖が國難の爲、東方魏に歸し襄陽に封せられ、既に十餘世を經たといふことである。又『梁高僧傳』卷十一に依ると、齊の代章安東寺に止りて禪に心を寄せ、齊の竟陵文宣王に師禮を盡され、建武(西紀四九四——七年)の末七十歳にて山中に於て卒した釋慧明は、姓を康といひ、康居人であるが、祖父の時地を東吳に避けたといふことであるから、彼の先祖も亦三國時代に國難を避けて支那に來つたのであらう。さすれば三國時代に康居國は外人の侵略を受けたらしいが、惟ふに之は薩珊朝の興起するに及

んで、東部波斯の地を逐はれたパルチア人が、此地方へ侵入した爲ではなからうか。

僧傳や經錄の中には、康の姓を冠して居る者が少くないが、直接本國から經典を將來したものはあまり多くない。漢の靈帝中平四年(西紀一八七年)洛陽に於て『問地獄事經』一卷を譯出した沙門康臣(或は巨)は、諸經錄に於ては佛教の弘宣を志して支那に來つた西域人であると記してあるが、多分康居の人であらうと思ふ。次に獻帝興平元年(西紀一九四年)より建安四年(西紀一九九年)に至る間に、『太子本起瑞應經』(『瑞應本起』)二卷『梵網經』(二卷)(三卷)『四諦經』(『中阿含』第七卷異譯)一卷『報福經』一卷『舍利弗摩訶目犍連遊四衢經』(『增一阿含經』第四十一卷異譯)一卷『興起行經』(『嚴誡宿緣經』)二卷の六部九卷を譯出した康孟詳は、『歷代三寶記』には只外國沙門と記してあるばかりであるが、『開元釋敎錄』には其先康居國人と記してあるから、彼は商賈の爲か其の他何等かの事情の爲に支那に來つた康居人の子孫であつたに違ひない。故に彼の譯出した經典は幾分康居國に關係を有するものもあつたであらうが、兎に角直接彼自ら康居から將來したものでないことは明かである。又魏の嘉平四年(西紀二五二年)に洛陽白馬寺に於て寶積部に屬する『郁伽長者所

問經』『郁伽羅越問菩薩行經』一卷(或二卷)『無量壽經』二卷及び『四分雜羯磨』『曇無德律部雜羯磨』一卷を譯出して康僧鎧(Saṃghavarman)は『梁高僧傳』に於ては外國沙門といひ、諸經錄に於ては天竺國沙門となつて居るが、康の姓を冠して居るのである から、彼は或は天竺國の方へ遊學してゐたかも知れないが、本來は康居人であつたらうと考へる。前述した康僧會は吳の赤烏十年(西紀二四七年)に初めて建鄴に來り、孫權に歸依せられて、孫權が彼の爲に建てた建初寺に於て數部の經典を翻譯してゐるが、『高僧傳』には『康僧會其先康居人。世居天竺。其父因商賈。移于交趾。會年十餘歲。二親並亡。以至孝服畢出家。勵行甚峻。爲人弘雅有識量。』と錄してあるから、彼は交趾に於て養育せられ、その兩親の死後出家したのである。從つて、その譯する所は康居國と殆んど何等の關係もないやうであるが、後の參考の爲に彼の翻譯に就て一言して置かう。彼の譯出した部數は經錄によつて異つてゐて、『出三藏記集』では二部凡十四卷といひ、『歷代三寶記』では十四部二十九卷といひ、『開元釋敎錄』では『六度集經』(『六度無極度經』『度無極集經』『雜無極經』)八卷(九卷)『舊雜譬喩經』(『雜譬集經』)二卷『吳品經』(『小品般若』)五卷『菩薩淨行經』(『大集』寶髻品異譯)一卷『權

方便經』一卷、『菩薩二十五法經』一卷(或二卷)、『坐禪經』一卷の七部二十卷を揭げ、而して費長房の錄に以上の外康僧會の譯出として擧げて居る所の『阿難念彌經』『阿難念經』(二卷)『鏡面王經』一卷、『察微王經』一卷、『梵皇王經』一卷の四部は皆是れ『六度集經』中に出て居るものばかりであると附記して居る。此等の外に、東晉成帝の世(西紀三二七——四二年)に乘經を抄集して『譬喩經』(『正譬喩經』)十卷を撰出した沙門康法邃、及び東晉の孝武帝太元二十一年(西紀三九六年)に『思益經』三卷を譯出した康道和は何國の人とも傳へてないが、多分康居國に關係のある人であらう。尙又晉孝武帝の世(西紀三七三——九六年)弟の法華と共に出家して白馬寺に止り、月氏の沙門支曇籥の弟子となつた釋法平は康居人であり、東晉の末諸方を遊涉して佛法を宣揚した高僧支曇諦——『曇無德羯磨』を譯した曇諦とは別人である——は本康居人であり(『廣弘明集』卷二十三所收の『支曇諦誄』に依る)、宋孝建中(西紀四五四——六年)支那に來り、禪に通じ經律に達してゐて齊の文惠文宣及び梁の太祖に師禮を以て敬せられた阿那摩低(Ratnamati? 寶意)も亦康居人として傳へられて居るが、何等の佛典をも譯出してゐない。

以上列擧した康居國の佛僧は漢代にその民族が根據としてゐたキルギズ曠野の人ではなく、主としてその屬國たる粟弋の人であつたらう。何となれば、白鳥博士の言つてをられるやうに、キルギズ曠野に住する民族は游牧を業とする勇悍な土耳其種であるが、その屬國たる粟弋は古來文化の本源地であつて、その人民は多く平和の業務に從來するイラン人であつたからである。故に此の粟弋地方も亦夙にバクトリア方面から佛教を傳へられてゐたに違ひない。かの康臣(巨)や康孟詳が支那に佛教を傳へた時代、卽ち西曆第二世期の末頃には既に此國の佛教は餘程隆盛に赴いてゐたやうである。而して此の國から支那へ傳へられた佛典が、主として方等部特に寶積部に屬する大乘經典、阿含部に屬する小乘經典であつて、その他大乘般若部のものや曇無德部に屬する律などである所から見れば、屢々前述したやうに、此の國の佛教が大月氏・安息の佛教と同一教系に屬するものであることは明かである。尙此の國にも亦大月氏と同じく佛典の翻譯が行はれたのであつて、ベリヨー氏は中亞探檢に於てソグド語の重要な佛典を獲たことを報告してをられる。併し、未だ詳細な報告に接せぬから、その內容は判らない。要するに、康

居國民が商業上の目的を以て中亞及び支那に於て活動したと同時に、布教の目的を以て同じ地方に於て活動し、由つて以て東洋文明に貢獻した所は尠くない。

西曆第四世期の中頃から嚈噠は大月氏を逐ふてバクトリアに據り、今の基華(Khiva)に都して、康居をも其の屬國としてゐたのであるから、勢粟弋地方の佛教はその壓迫を加へられたことであらう。嚈噠族は佛教を信せず、外神に事へてゐたことは既に述べた所である。尤も『魏書』西域傳嚈噠國の條に『其王都拔底延城(Bactria)。蓋王舍城也。其城方十里餘。多寺塔。皆飾以金。』と記してあるが、之等の寺塔は前代よりの遺物であつて、嚈噠が佛教を奉じてゐた證據とはならない。かくて、康國の佛教が異教徒たる嚈噠族の爲に打擊を受けたことは明かであるが、其の後も此の國には矢張佛教が行はれてゐたと見ゐて、『魏書』西域傳康國の條に『國立祖廟。以六月祭之。諸國皆助祭。奉佛爲胡書。』とあり、『隋書』卷八十三康國傳にも『俗奉佛爲胡書。』とあり、『舊唐書』卷百九十八にも此の國には『頗有佛法。』と記し、『唐書』卷二百二十一下にも此の國は『尙浮屠法。祠祆神。』と錄してある。けれども、『杜氏通典』卷百九十三『文獻通考』卷三百三十八には『康居國漢時通焉。在大宛西北可二千里。…

……章節西蕃記云。康國人並善賈。男年至五歲。則令學書。少解則遣學賈。以得利多爲善。其人好音聲。以六月一日爲歲首。……俗事天神。崇敬甚重。云神兒七日死失骸骨。事神之人。每至其月。俱著黑疊衣。徒跣撫胸號哭涕淚交流。丈夫婦女三五百人散在草野。求天兒骸骨。七日便止。國城外別有二百餘戶。專知喪事。別築一院。其院內養狗。每有人死者。卽往取尸。置此院內。令狗食之。由是盡收骸骨殯無棺槨。』と記して、佛教に關することは毫しも傳へずして、却つて異教の儀式を詳細に說いてある。殊に『慈恩傳』卷二に依ると、颯秣建國(Samarkand)の王及び百姓は佛法を信ぜず、拜火教を奉じ、寺は兩所あるも、若し佛僧にして來り投ずるものあれば、胡民火を以て燒いたといふことである。然るに、玄奘がこの國に於て佛法を宣說した所が、王の歸依を受け、これより上下咸眞摯に佛法を求め、遂に大法會を營み、人を度して寺に居らしむるやうになつたといふことである。かく玄奘の布教に依つて、此の國には再び佛教が多少行はれるやうになつたけれども、遂に昔日の如き盛況を見ることなくして、間もなく外教の爲に滅ぼされたのであるらしい。故に西曆第八世紀の初期この地方へ來つた慧超は『又從大寔國已東。並是胡國。卽是安國曹國史國石騾國米國康國。中

雖各有王。並屬大寔所管。爲國狹小兵馬不多。而不能自護。……又此六國總事火祆。不識佛法。唯康國有一寺有一僧。又不解敬。』と傳へてゐる。此に所謂火祆とはゾラシュトラ教のことであることは言ふを須ゐない。而してサマルカンドに於てのみ存してゐた一寺一僧は、玄奘の此の地に於ける布教事業の殘照ではあるまいか。

第四章　于闐國の佛教

第一節　于闐建國に關する傳說に就て

于闐といふ國名は支那の記錄に於ては古くから現はれてゐて、既に『史記』大宛傳には『于闐之西則水皆西流。注"西海"(Aral Sea)。其東水東流。注"鹽澤"(Lop-Nor)。鹽澤潛"行地下"。其南則河源出焉。多"玉石"。河注"中國"。』と記してある。當時の于闐國も矢張東方土爾其斯坦の西南に位する現今の和闐 (Khotan) 州地方に城廓を構へてゐたに違ひない。

于闐といふ名稱は啻に漢代に於てのみ用ゐられたのではなく、其の後明代に至るまで襲用せられ、更に西曆第十八世紀に於て清朝に依つて東方土爾其斯坦が恢復せられた以後ですら、尙この稱號の公用が止まなかつたやうである(Rémusat; Ville de Khotan. P. 107.)。而して西藏傳に於ても、この于闐の音に相當するU-then といふ都並に河の名が表はれてをる(Rockhill; Life of the Buddha, P. 233.)。かやうに、此の名稱は久しく且つ廣く用ゐられたものであるけれども、其の由來に至つては學者の意見區々として決する所はない。多くの學者は玄奘の所謂瞿薩旦那(Kustana)に重きを

置き、梵語にその起源を求め、音韻轉化の法に依つて說明を試みやうとしてをるけれども(Watters; On Yuan Chwang, II, P. 299.『藝文』第三年第四號に於ける荻原雲來氏の說『解說西域記』九九三頁等參照)、すでに玄奘の言つてをる通り、于闐が舊名であつて、彼の所謂瞿薩旦那は後に至つて梵語に附會した雅名であるから、于闐其の他玄奘の傳へた俗語の渙(或は漢或は喚)那、匈奴の于遁、諸胡の谿(或は豁)旦、印度人の屈丹などがその實名であつたに違ひない。かくて、于闐といふ名稱を古來和闐に於ける有名な產物たる玉石に關聯せしめて解明せむとする企てが發表せられた。この企てを試みた最初の人はブッセル(Bushell)博士であるが、博士の考案は餘りに淺薄であつた(Stein; Ancient Khotan. P. 157.)。然るに、本年白鳥博士の公にせられた意見は頗る興味のあるものであつて、博士の說に從ふと、西藏語にては玉石をgyu(yu)といふから、khu若しくはguなる古音を有する于は、この語の對音にて玉石の義なるべく、又西藏語にては城邑・村落をtongといひ、Chhingtangya語等にてはtenといへば、闐(ten)はこの語の對音にて村落・城邑の義なるべければ、古へより玉石の產地として有名なるこの國を和闐(Khu-tan)于闐(Khu-ten: gu-ten)卽ち玉城或は玉邑と呼んだ

のであらうとのことである(『東洋學報』第三卷第二號二二〇頁)。斯くの如く于闐の名稱を以て此の國の最も有名な產物たる玉石に因んだ土言と見るのは、この場合實に適當な考案であるといはねばならぬ。而も玄奘の傳へた渙那(Khan-na、中音toの省りしもの)于遁(Khu-ton: Gu-ton)谿旦(Khi'a-tan)屈丹(Ku-tan: G'u-tan)の如きは皆この土言の轉訛せられたものであることは明かである。尙又西藏では現今此の國をLi-yulと呼んでをる。Li-yulとは(Liの國)といふことであつて、ロックヒル氏の說に依るとLiはBell-metal卽ち梵語のRitiを意味するとのことであるが、ワッタース氏は之に反對してLiは支那語に所謂犛といふ動物の名であつて、此の動物は今もなほ和闐地方に於て見出さるゝと說明してをられる(Watters; Yuan Chwang; II. P. 300.)。固より、後者の說が此の場合適切であることは言ふを俟たない。

扨于闐國が張騫の大月氏に使した時旣に西域に於ける一國として存在してゐたとすれば、この國は如何なる人種が如何なる時代に建設したものであらうか。若し此の問題を解決することが出來れば、于闐國の佛敎的年代を考定する基礎が成立するのである。而も幸にして此の問題に關する傳說が西藏傳にも玄奘の『西

域記』にも記載せられて居る。先づ兩傳の本文を掲げやう。

昔者此國虛曠無人。毘沙門天於此捷止。無憂王太子在咀叉始羅國。被抉目已。無憂王怒。譴輔佐。遷其豪族。出雪山北。居荒谷間。遷人逐物。至此西界。推舉酋豪。尊立爲王。當是時也。東土帝子蒙譴流徙。居此東界。群下勸進。又自稱王。歲月已積。風敎不通。各因田臘。遇會荒澤。更問宗緒。因而爭長。忿形辭語。便欲交兵。或有諫曰。今何遽乎。因獵決戰。未盡兵鋒。宜歸治兵。期而後集。於是回駕而返。各歸其國。校習戎馬。督勵士卒。至期兵會。旗鼓相望。旦日合戰。西主不利。因而逐北。遂斬其首。東主乘勝。撫集亡國。遷都中地。方建城郭。憂其無土。恐難成功。宣告遠近。誰識地理。時有塗灰外道。負大瓠盛滿水。自進曰。我知地理。遂以其水屈曲遣流。周而復始。因卽疾驅忽而不見。依彼水迹。峙其基堵。遂得興功。卽斯國治。今王所都此城也。城非崇峻。攻擊難克。自古已來。未能有勝。其王遷都作邑。建國安人。功績已成。齒老云暮。未有胤嗣。恐絶宗緒。乃往毘沙門天神所。祈禱請嗣。神像額上剖出嬰孩。捧以回駕。國人稱慶。旣不飲乳。恐其不壽。尋詣神祠。重請育養。神前之地忽隆起。其狀如乳。神童飲吮。遂至成立。勇智光前。風敎遐被。遂營神祠。宗先祖也。自茲已降。奕世相承。傳國君臨。不失其緒。故今神廟多諸珍寶。拜祠

享祭。無替於時。地乳所育。因爲國號。(『西域記』卷十二)

達摩阿輸迦(Dharmāsoka)の治世第十三年、その皇后一男を生みぬ。召された る占者等はこの兒に偉大の相多く、父王の生存中に王たるべしと宣言せり。依りて、王は彼が爲に其の王位を奪はれむことを惧れて、彼を棄つべきことを下命せり。而して母后は若し其の兒を棄てざりせば、王の彼を殺さむことを慮りて、其の命に從へり。然るに、王子が棄てられし時、地上に乳房を生じ、由つて以て彼は身を養ひて、死することなかりき。之がために、彼は瞿薩旦那(Kusatana)卽ち地乳と呼ばれたり。

恰もその時茲に大菩薩たる支那(Bgya)の統領の住せるあり。彼は九百九十九人の子を有せしが、千人に滿さむと欲して、尙一人の子を得むことを毘沙門天(Vaiśravaṇa)に祈願をかけぬ。毘沙門天は眼を四方に轉じて、棄てられたる小兒瞿薩旦那が有望の人物なることを知りて、彼を携へ來つて、支那の統領の子となせり。支那の統領は彼を養育せしも、或日統領の子等が彼と爭ひて、彼が支那統領の子にあらざることを告げぬ。而も支那の記錄に徵してその眞

なることを認むるや、彼は大に悶ゑて、統領に對して己が本國を求むるために出で行くを許されむことを請へり。統領は彼がその實子なることを告げて、頻りに宥めしも、尙瞿薩旦那は彼の王國を求めむと欲して、一萬人の大勢を率ゐて、西方に赴きぬ。かくて、遂に彼は和闐國(Li-yul)の Me-skar に達せり。

當時印度の達摩阿輸迦王の宰相たる耶舍 (Yaça) は、その家族の勢力が大に擴張して、王の厭憎を買ふに至りしかば、彼は七千人と俱にその國を去り、東西に鄕土を探りて、遂に于闐(U-then)河の下流域に到れり。

當時、瞿薩旦那の從者中より二商人が上靴のまゝ逃走して、道なき所を通じて、遂に To-la に達しぬ。而して彼等が上靴 (ba-ben) にて歩みし (hbrangs) 事實より、此の地が Ba-ben hbrangs-pai-sa 或は Hbru-so-lo-nya といふ名を得たりき。その時彼等は可なり大なる無人の沃地を見て、大に喜び思ふやう、これは是れ瞿薩旦那王子の領土となすに足ると。その後、彼等は南方にありし宰相耶舍の陣營を訪れしに、彼は Me-skar に在る瞿薩旦那に使を送りて曰はく、「汝は王族にして、余は貴族たり。吾等こゝに協同して于闐の地に於て建國せむ。而して汝は

王たり、余は宰相たる可し。」と。さるほどに、瞿薩旦那はその總ての從者と共に來りて、于闐河の南なる Hang-gu-jo と稱せらるゝ地に於て耶舍と會見せり。

王子と宰相とは其の領域確定に就て一致すること能はずして、兩者の群勢は相分れて、今や干戈を交へむとせしが、毘沙門天と吉祥天 (Çrimahadevi) とが彼等に對して現はれ出でしを以て、彼等はその地點に於て、之等兩神に各堂祠を建てゝ、爾後國家の守護神として崇敬せり。

斯くて、瞿薩旦那と耶舍とは和睦して、前者が王となり、後者が宰相となれり。是に於て、王子瞿薩旦那の支那人の從者は于闐河の下流域及び Mdo me-skar と Skam-shed との上部にその居を定め、宰相耶舍の印度人の從者は于闐河の上流域及び Rgya と Kong-dzeng との下部にその居を占めぬ。彼等の居住せし兩地間に印度人と支那とが區別なく雜居し、その後彼等は城を築きぬ。(Rockhill; Life of the Buddha, PP. 234—6.)

以上の兩傳を批較對照して見ると、『西域記』の方は西藏傳に比して、餘程神秘的要素に富み、而して建國に至る歷程に於ても、兩者の間に根本的相違を認め得るが、

于闐の建國を阿育(Asoka)大王時代に歸する點は、兩者全く相一致して居る。併し、此の傳說は如何なる程度まで信賴し得る價値を有するであらうか。今之を判定する上に於て、吾人が最も注意すべきことは、兩傳の上に共通に顯はれて居る所の瞿薩旦那(Kustana)といふ名稱と毘沙門天(Vaiśravaṇa)に對する信仰とである。瞿薩旦那といふ名稱は『西域記』に於ては國名となり、西藏傳に於ては阿育王の太子の名となつて居るが、此の名稱の由來を此の國の開基者が土地より隆起した乳に依つて養育せられたといふ小說的物語に歸して居る點は兩傳一致して居る。併し、玄奘が通俗の雅言であると謂ふ所の瞿薩旦那といふ名稱は、スタイン氏の指摘してをられる通り(Ancient Khotan, P. 153)古き地方的名稱に對して正統的梵語の由來を附與せむと努めた結果であつて、支那の記錄に所謂于闐の眞の古音を梵語化して瞿薩旦那といふ名稱を人工的に作爲したものであることは殆ど疑ひなき所である。さすれば、此の小說的物語は此の地方に梵語が流行するやうになつて、勢Khotanの眞の古名も梵語化せられた所が、地乳を意味するKustanaとなつたものであるから、此の地乳といふ字義に基いて斯る傳說を創作したのではあるまいか。かやうに地方的稱號の字義に基いて其の國の設立者若しくは其の地方の偉人に適するやうな物語を創作することは何處の地方に於ても其の例に乏しくない。前述したやうに、于闐の眞の對音が王城を意味するgyu-tong或はgyu-tenであるとすれば、之を轉訛してKustanaとすることはさほど困難なことではない。固より、支那に於て瞿薩旦那といふ稱號の現はれたのは玄奘に始まつて居るのであるが、此の梵語化した形式が玄奘以前早くから一般に使用せられて居たことは、スタイン氏が古への尼壤城卽ち現今のNiyaに於ける古址に於て發見した西曆第三世紀の佉樓虱底文字の古文書にKustanaもしくはKustanakaの名稱を用ゐてあることに依つて明白である(Ancient Khotan, P. 154)。要するに、吾人は此のKustanaといふ名稱は本來の國名ではなくて、後に至つてそれが人工的に梵語化されたものであるといふことに注意せねばならぬ。次に『西域記』に於ては其の額上から此の國王の先祖を出し、西藏傳に於てはRgyaの皇子となつたKustanaと阿育王の宰相であつた耶舍とが、此の于闐の地で戰ひ始めた時現はれて、此の國の守護神として拜せられるやうになつた毘沙門天は、印度古代の婆羅門敎に於ける福神たる俱乞羅(Kuvēra)であつて、

其の後北方の守護神、夜叉(Yakṣas)の王として、佛教神話と密接な關係を有するものである。玄奘は現在于闐に於ける毘沙門天の神廟には諸珍寶が多く、祭祠を斷たないと記して居るが、吾人は此の傳說に依つて兎に角早くから此の國に於て毘沙門天が崇拜せられて居たことを想像することが出來る。而して于闐が四人の護世者(Lokapālas)の中特に北方の守護神たる毘沙門天を國王の祖先として崇拜することは實に此の地方に取つては適當なことである。併し、吾人が茲に注意を拂はねばならぬことは犍陀羅から日本に至るまで總ての國に此の神が知らるゝやうになつたのは、佛教の傳播に伴ふた結果であるといふことである。從つて、此の國に於て毘沙門天を崇拜するやうになつたのは、勿論餘程古くからではあるに違ひないが、矢張佛教が渡來した以後のことではなからうか。要するに、自分は此の傳說が佛教的空氣の裡に成立したものであると信ずるのである。何となれば、此の傳說の構成要素の中には佛教的傳說が混入してをるやうである。

西藏傳に依れば Khotan に於ける最初の宰相たる耶舍(Yaśas)は元阿育王の宰相であつて、その家族の勢力が擴張した爲め、阿育王の厭憎を受けるやうになつたから、七百人と共に國を棄てたといふことであるが、阿育王の諸種の傳記には斯る事柄を記載してゐない。只『阿育王息壞目因緣經』の中には阿育王の第一夫人淨容『阿育王傳』第三には帝失羅叉といひ、『阿育王經』第四には微沙落起多と記してあつて、共に Tissarakkhā 若しくは Tissarakkhitā の對音である)と共謀して阿育王の他の夫人鉢摩婆底(Padmāvati 蓮華色)の生んだ皇子法益(達磨婆陀那 Dharmavarddhana)の美目を失はしめたところの宰相として耶奢といふ名が表はれてをるばかりである。併し、此の宰相耶奢は其の奸計發覺に及んで鐵牢に於て燒殺されたと傳へられて居る。而して『阿育王經』並に『阿育王傳』に於ても亦耶舍若しくは夜舍といふ名が表はれてをるが、之は阿育王の宰相ではなくて、法益に法を授けたところの鷄頭摩僧伽藍(Kukkuṭārāma Saṅghārāma)の上座の名となつてをる。元來、この耶舍といふ名は多く佛教に關係ある人に屬してゐて、既に釋尊時代に世の無常憂苦を觀じて佛に歸したところの婆羅捺(Vārāṇasī)に於ける富豪の子に耶舍といふがあり、『四分律』卷三十二(Vinaya-text. Mahāvagga. 1. 7. 110.)又佛滅後一百年の時伐地(Vajji)の比丘が非法を行ひしを非難して、所謂七百集法卽ち毗舍離(Vaiśālī)結集を行ふ動機を與へ、

而もその際西方の保守派の委員の一人として選ばれた僧も亦耶舍と稱した（『四分律』卷五十四『善見律毗婆沙』卷一、Cullavagga. XII, Dipavaṁsa V.）尙『西域記』に阿育王の太子が目を抉られたといふことは、玄奘が『西域記』卷三の呾叉始羅（Takṣaśilā 卽ち Taxila）の條に此の顚末に就て詳細に叙述して居るが、斯る物語は支那へも佛敎の渡來と共に早くから傳はつて居たのであつて、西曆第二世紀の中頃支婁迦讖の傳譯した『阿育王太子壞目因緣經』などが卽ちそれである。斯る點から考へて見ると、此の傳說は于闐へ佛敎が渡來した以後生じたものであらう。

而して西域記の傳說には支那の正史に全く記載してないことや、又記載してゐる事實と撞着するやうな點がある。西域記に所謂東土の帝子をヘルンレ（Hoernle）氏の言ふ如く土耳古族の畏兀兒（Uighurs）であると（Antiquities from Central Asia, P. 12）確說することが出來れば兎も角も、一般學者のやうに支那人であつたとすれば、阿育王と同時代なる周の赧王や惠公の世に於て皇子が譴責を蒙つて放逸せられたといふやうな事蹟は支那正史の上には傳へられてゐない。又『西域記』には毗沙門天の頭上から生れ出でた此の國王の先祖以來、奕世相承して國を傳へ、君臨して

其の緒を失はないと記してあるが、しかし『後漢書』西域傳には建武の末（西紀五五年）莎車王賢が勢力を得て、于闐を攻め幷せて、其の王兪林を從して驢歸王と爲したが、其の後明帝永平十六年（西紀七三年）に于闐の將休莫霸が莎車に反して自立して于闐王と爲り、休莫霸の死後はその兄の子の廣德が立つて于闐王となつたと記してあるから、決して于闐國は古來王統連綿といふやうにはなつてゐない筈である。

尙吾人が西域記の傳說に就て最も怪しむべきことは、東方の帝子が西方の移住者を破つて之を逐ひ、都を中央の地に遷して城廓を建つる際、塗灰外道（Pōśupata Tirthika）がその大瓠から地に注いだ水迹に依つて基堵を定めたといふ傳說は、スタイン氏の指摘せられたやうに（Ancient Khotan, P. 159.）カルハナ（Kalhaṇa）の Rājataraṅgiṇī の中にプラヴラセナ（Pravarasena）二世がその新都卽ち現今のスリーナガル（Śrīnagar）を建つる際、超自然の方法で新城の建築に對して適當な位置と吉時とを確める爲に、夜に乘じて祖父プラヴラセナ一世の都たるプラーナードヒストハーナ（Purāṇādhisthāna）を出で小河に達せし時、對岸に恐ろしい容貌の夜叉が現はれて、彼の爲に女神のシャーリコー（Śirikō）及び夜叉のアッタ（Aṭṭa）とが住する所のシャーリータカ

(Sāritaka) 村に於て、奇しき測量線を横へて、以て彼の希望を滿したといふ傳說と頗る相似通ふて居る。而もスタイン氏の言ふ所に依れば、プラヴラセナ二世は西曆第六世紀の或時期に生存してゐた人であるから、王は玄奘と同時代でなければならぬ。玄奘は迦濕彌羅國の條下では斯る傳說に就て一言を述べてゐない所を見ると、或は彼が迦濕彌羅國に於て耳にした事柄を混同して、此の傳說の中へ加へたのかも知れない。されば、西藏傳に於ては斯る傳說に就て些しも述ぶる所がない。

斯くの如く此の傳說を批評し來ると、之が傳ふる所の于闐建國の顚末に關しては、吾人は些しも信を置くことが出來ないやうである。が併し、又他面から之を觀察すると、此の中には信賴し得べき確かな事實を含んで居るやうである。抑、此の傳說が前述したやうに佛教渡來以後成立したものであるとすれば、其の建國の由來を佛法の大保護者たる阿育王に結び付けて置きながら、而も此の傳說の中直接にも關接にも佛教に關聯した點の絕無なのは如何なる故であらうか。若しも此傳說が全部佛教の空氣中に於て構成されたものであつたならば、必然于闐の佛教

と佛教の大宣布者たる阿育王との間に何等かの關係を附すべき筈である。然るに、事實上兩傳ともに毫しも斯る傾向の絕ねてなきのみならず、却て兩傳ともに佛教の渡來の時期を其の後に置いて居るのである。斯く此の傳說の上に些しも佛教徒の野心の痕跡が現はれてゐない所から觀ると、此の中には佛教渡來以前より此の國に存在してゐた眞の傳說を幾分漏して居るのではなからうか。

殊にスタイン氏の說に從ふと、西藏傳に於ける于闐の地理的暗示は能く實地に適合して居るやうである (Ancient Khotan. P. 162.)。卽ち王子の瞿薩旦那と宰相の夜舍とが互に和睦して、前者が王となり、後者が宰相となつて、前者に隨ふ所の支那人 (Rgya) は于闐河の下流域に、後者に隨ふ所の印度人は于闐河の上流域に各その居留地を定めたといふことは和闐河 (Khotan Darya) の二支流たる玉隴哈什河 (Yurung-kāsh) と卽ち白玉河と哈拉哈什河 (Kara-kāsh) 卽ち黑玉河とを指したやうである。東方からの移住者は支那人であつたらしいから、和闐河の東の流卽ち白玉河の邊に其の住地を定めたといふのは、實際の地理上當に然るべきことであり、西方から移り來つた印度人が黑玉河の西方の地に居を定めたといふのも、是れ亦自然の勢で

あると云はねばならぬ。而して此の東西移住者の定住所の間に兩族が互に混入して區別なくなつたといふやうに、此の地方を三分割せむとする此の傳說は、直接和闐の地理的實情に適合するものであつて、實際和闐沃地は二河に依つて、三つの主なる部分、卽ち白玉河の東の部分と、黑玉河の西の部分と、其の河間の地とに區分せられてゐるのである。『西域記』に所謂中地とは此河間の地に相當するのである。

尙興味あることはスタイン氏がジョーイス(T. A. Joyce)氏の說に基いて言ふ所によれば、和闐地方の東部(Keriya)の住民は他の和闐地方の住民よりも一層多く蒙古族に能く類似せる人種的性格を有して居るといふことであるが、是れ實に西藏傳に於ける兩移住民の地方的分割の事實を證明するものではなからうか(Ancient khotan, P. 165.)。

且又あまり附會に過ぎるかも知らぬが、西藏傳に記する東西移住者の總人數が『漢書』に示す于闐の人口數と批較して撞着を生せないことは、幾分此の傳說に價値を加へる證權となるであらう。西藏傳では元阿育王の子たるKustanaは一萬人の支那人を率ゐ、又元阿育王の宰相であつたYaçasは七千人を率ゐて此の地に移住

したといふのであるから、總數一萬七千人である。而して『漢書』西域傳には于闐の條に『戶二千三百。口萬九千三百。勝兵二千四百人。』と記してある。斯く西曆第一世紀頃の人口が殆んど二萬であるとすれば、阿育王時代の建國としても、當時一萬七千人の移住者があつたといふことは極めて自然的であつて、其の間に矛盾はない。

之等の點から考察すると、此の傳說の中にも捨て難い所がないとも言へぬ。故に此の傳說の骨子をなして居る東西よりの移住者が此の地に於て衝突を生じたといふ事柄は幾分信ずるに足ることゝ思ふ。

併し、茲に吾人が最も解決に苦む所は、『西域記』に於ては東方よりの移住者が西方よりの移住者を擊破して、その帝子が城廓を建設したとするに反して、西藏傳に於ては兩者が和睦して阿育王の子が王となつたと記してあることである。而して慧立の『慈恩傳』に於ける之に關する記事は益々吾人をして惑はしめる。同傳卷五には次のやうに叙してある。

王之先祖卽無憂王太子。在『怛叉始羅國。後被『譴出『雪山北。養牧逐『水草。至『此建『都。久

而無子。因禱毗沙門天廟。廟神額上剖出一男。復於廟前地。生奇味。甘香如乳。取而養子。遂至成長。王崩後嗣立。威德遐被。力并諸國。今王卽其後也。

之に由つて觀ると、慧立が于闐國の建設者を阿育王の太子とする點に於ては、玄奘の記錄に反對して、却て西藏傳に一致して居る。慧立は如何なる資料に基いて『西域記』の所傳に反するやうな說を立てたのであるかは不明であるが、若し之が直接玄奘から聞いた所に基いたものであれば、之が西藏傳と一致して居るのは決して看過してならない記事である。併し、余は假令實際玄奘の言つた所と西藏傳とが一致してゐたのであるとしても、阿育王の太子を此の國の建設者とする傳說には信を置きかねる。西藏傳を仔細に觀察すると、强いて此の國の建設者と阿育王と關係を保たしむるために、人工的作爲を施した迹が著しい。西藏傳に於ても最初于闐王となつたものは支那人の移住者の方から出て居るのである。ところが、其の統領を奇怪な物語で以て無理に阿育王の太子に結び付けたのである。元印度人たる阿育王の太子が支那人を率ゐて元阿育王の宰相であつた耶舍の率ゐる印度人と爭ふといふことは、實に奇妙な現象と言はねばならぬ。で、余の想像を

以てすれば、矢張『西域記』に記するやうに實際は支那人が印度人を征服したのであるが、後于闐が印度の文化に浴し佛敎の流行するに從つて、强て阿育王の太子を勝利者たる支那よりの移住者の王として、此の國の最初の王は佛法の保護者印度の大王たる阿育王の太子であるといふやうに傳說を改めたのではなからうかと考へられる。とは言へ、于闐の城廓を建設したのは支那人ばかりではないのであつて、『西域記』に於ては東土の帝子が西方の軍を破つて其の王を斬つて居るが、『東主乘勝。撫集亡國。遷都中地。方建城郭。』と記してあるから、被征服者たる印度の亡國人もなほ征服者たる支那人の中に多く混入して居たに違ひない。

斯く解釋し來れば、『西域記』の記事は根本に於て西藏傳と異ならないのであつて、兩者共に于闐の原住民は印度人と支那人との兩人種であるといふことを漏して居る。于闐の原住民が印度人及び支那人であつたといふことは、スタイン氏が和闐地方より發掘した遺物に依つて證明するごとが出來る。スタイン氏は彼が尼壤城 (Niya) に於て獲た發掘物に就て次のやうに立論して居られる。

西暦第三世紀の中期、北西印度の古きプラクリット (Prakrit) に極めて類似せ

る印度語が、和闐地方を通じて行政上の目的にて日常使用せられたることは、ニヤ(Niya)の古址より出でし佉樓虱底文書を見れば明かにして疑ひを容れず。實際生活及び社會組織の所有方面の事件に關係せる之等多くの文書の性質より考ふれば、此の言語が此の地方内に廣く恐らくは普く知られざりしとは認むること能はず。此の印度語の通用といふ事より引き出さるべき結論は、記錄に於ける佉樓虱底の書體に依りて大に力を添へらる。何となれば、吾人は印度に於てはこの書體が西曆紀元前後數世紀間歷史上又文化上の中心なりしタキシラ(Taxila)及び界接せるガンドハーラ(Gandhāra)地方に特有なるものなりし事を知るが故也。之等文書の言語及び書體は唯佛教の傳播によりて充分に說明せらるべきものに非ず。佛教は唯その傳道上の言語として梵書の使用及びブラーフミー體の書法を中亞に傳へしに過ぎざる事は、吾人の確かに證明し得る所也。然れども、若し吾人が玄奘によりて傳へられたるこの地方の古傳說、卽ち古代タキシラ地方よりの印度移住民によりて于闐の一部が占有せられたりと主張する所の古傳說に於ける史的事實の骨子を認む

れば、于闐に於けるブラクリット語及び佉樓虱底體の書法の流行せし所以は直ちに判明す可し。(Ancient Khotan. P. 163.)

更にスタイン氏はヨートカン(Yotkan)の古址から出た赤土燒の像、ダンダーン・ウイリク(Dandān Uiliq)の廢祠の彩色せる扁額及び壁畫、尙又ラワク伽藍(Rawak Vihāra)の浮彫物等に於て屢々見られ得る准蒙古人の顏面に就て、次のやう論述せられた。

和闐佛教美術が最後まで主として印度模型の影響を受けし事の明かなるを思へば、斯くの如き顏骨高き眼瞳の暗き而も鼻の短平なる特殊の顏面の早く現はれたる事は、此の地方の住民の中に實際現はれたる型なることを承認するより外に殆んど說明の道なし。固より、支那の模型を踏襲したるものとして說明すること能はず。何となれば、佛教美術に關しては支那自らは主として印度及び于闐より借り來りたる事實以外に、疑問の顏面は餘程古代に既に現はれて、支那方面よりの反射的趣向に歸せらるべきにあらざるが故也。

(Ancient Khotan. P. 166.)

以上の如く、スタイン氏が和闐州地方に於ける發掘物に基いて試みられた推論

は、實に正當な意見であると言はねばならぬ。故に西藏傳に於ても亦先きに引用した本文の次に、支那人と印度人と相半ばせる國なる于闐の言語は、印度語でもなく、支那語でもなく、兩者の相混じたるものであつて、文字は印度のそれと極めて類似し、住民の風俗は支那のそれに酷似し、更に宗教及び聖語は印度のそれ等に甚だ類同してをるといふことが記してある(Rockhill; Life of the Buddha, P. 236.)。文字が頗る印度に類してゐて、言語は印度と支那との混合したものであるといふことは、興味のある所であつて、元來于闐は印度に近いものであるから、迦濕彌羅や犍陀羅を通じて印度文明が頻りに輸入せられ、佛教が盛んなるに及んで、玄奘の記して居るやうに、文字憲章聿ら印度に遵ひ、微しく體勢を改むるやうになつたのであらう。併し言語といふものはその國民性と密接な關係を持つて居るものであるから、他國の文化に依つて容易に變化せられるものでない。從つて、玄奘が語は諸國に異つて居ると言つたやうに、全然印度化し終らずして、印度語でもなく支那語でもない一種の變體を生ずるに至つたのであらう。

かく論じ來ると、茲に聊か解釋に困しむ記錄がある。『魏書』西域傳の于闐の條

に『自高昌以西諸國人等深目高鼻。唯此一國不甚胡顔類華。』と記してある。所謂深目高鼻はアーリヤ人の容貌を支那人が觀察するに際して最もよく注意を引く特徴であつて、今茲に于闐の住民が他の諸國人の如く深目高鼻の胡顔でないといふことは西暦第六世紀の于闐國人が非アーリヤン的の容貌を有してゐたといふことになる。リヒトホーフェン氏の如きは、此の記錄を第一の論據として、支那民族の原住地は古くより天山南路に於ける文化の中心であつた此の于闐地方であると主張してをられるぐらゐであるから(China. I. P. 424—8.)、此の記錄は支那人が此の地の原住民であつたといふことを證明するには最も都合よき證權となり得るが、于闐の建國當初印度人が移住し來つたことを否定することになる。然らば此の記錄は如何に解釋すべきであらうか。

之を解釋するに就ては、先づ和闐國民の人種を知る必要がある。和闐國民の人種に就ては、デョイース氏がスタイン氏の提供した研究資料に基いて判定せられた結果が、一九〇三年の『人類學會院雜誌』(Journal of the Anthropological Institute) に於て報告せられた。その報告に依ると、要するに和闐民族は主として所謂アーリヤン

系統に屬するものであつて、之に土耳其種族の血統を混和し、更に多く西藏種族の血統を混加してゐるといふことである。和闐人がアーリヤン系統に最も多く西藏種族の血が混入して居るといふことは、スタイン氏がニヤから發掘した最も古きものに屬する佉樓虱底文字の記錄に於て、確かに印度語でもなく、イラン語でもなく、土耳古語でもなく、寧ろ西藏語に基いて居るやうな多くの語、主として普通に用ゐらるゝ稱號とか名辭とかいふものが現はれ、又ダンダーン・ウイリクやエンデレ(Endere)より出た多くの記錄に於て發見せらるゝ不可知的言語も亦ヘルンレ氏の研究の結果に依れば、土耳古語や蒙古語よりも寧ろ單綴音の西藏語に近いものであるといふ事に徵しても明かである(Ancient Khotan. P. 149—50.)。

然らば、西藏人種の型は如何なるものであるかといふに、之に對してはヂョイース氏自身も研究上種々の困難があつて、滿足に答へられないといふて居られるのである。西藏に於ける現今の住民は過半數蒙古人であるが、西藏人種は全く蒙古人種でないことは確かである。併しロックヒル氏が西藏人種の比較的純粹なものと思へるドルバ型(Drupa type)ですら、短軀短頭、高き額骨、厚くして廣き鼻、黑き毛髮、褐

色の眼を有してゐて(J. Anthrop. Inst., XXXIII. PP. 318 sq.)、アーリヤン型よりも支那型に接近してゐるのである。此の于闐人種を構成して居る要素の第二の地位を占めて居るところの西藏人の容貌が、支那人の容貌に類似してゐるのであるから、『魏書』に於て『貌不甚胡、頗類華。』といふたのは、全く于闐人種に多く混入して居た西藏族の特徵を指示したものであらう。かくの如く于闐の古記錄の上に西藏語の影響があり、又その人種の上に早くから西藏族の血を受けてゐたとすれば、最初東方から于闐へ移住した民族は或は西藏人であつたかも知れない。之は尙考究を要する問題であるが、假令東方の移住民が西藏種族であつたとしても、于闐國の原住民が印度アーリヤ種族と准蒙古種族であつたといふことは動かない。

之を要するに、于闐建國に關する傳說は、その枝葉の點に至つては到底信ずることは出來ないが、其の根本となつて居る部分は、于闐の建國當時から彼等の間に傳へられ來つた眞の事實を含むものであると見て差支ないやうである。

于闐の建國を阿育王時代とする點は、兩傳ともに一致して居ることは既に述べた所である。殊に西藏傳に於ては阿育王の治世の第十三年に生れたKustanaが于

闐國を建設したのは彼の十九歳の時であつたと記してあるから、于闐の建國は阿育王の治世第三十一年に相當する。而してマハーヴンサの說に從へば、阿育王は在位三十七年にして歿したといふのであるから、于闐の建國は阿育王の治世中のことであつて、王が父王頻頭沙羅(Bindusāra)の位を繼いだのは前述したやうに西曆紀元前二七二年であるから于闐の建國は西曆紀元前二四二年となる。此の計算は固より西藏傳の記錄が誤つて居れば、何等の價値もないことになるが、兎に角于闐の建國は阿育王の時代よりも早くなく、張騫が西域に使した時よりも遲くないことは動かすべからざる事實である。換言せば、西曆紀元前第三世紀の中頃から同第二世紀の中頃までの間に于闐國が建設せられたと見れば最も確實である。

第二節　于闐佛教傳來の事情

『西域記』卷十二には于闐國佛教の傳來に關して、次のやうな傳說が揭げられてをる。

王城南十餘里。有大伽藍。此國先王爲毗盧折那(唐言遍照)阿羅漢建也。昔者此國佛法未被。而阿羅漢自迦濕彌羅至此林中。宴坐習定。時有見者。駭其容服。具以其狀。上白於王。王遂躬往覩其容止。曰。爾何人乎。獨在幽林。羅漢曰。我如來弟子。閑居習定。王宜樹福。弘讚佛教。建伽藍。召僧衆。王曰。如來慈愍四生。誘導三界。或顯或隱。示生示滅。遵其法者。出離生死。迷其教者。羈纆愛網。王曰。誠如所說。事高言議。既云大聖。爲我現形。既得瞻仰。當爲建立。罄心歸信。弘揚教法。羅漢曰。王建伽藍。功成咸應。王苟從其請。建僧伽藍。遠近咸集。法會稱慶。而未有犍稚控擊召集。王謂羅漢曰。伽藍已成。佛在何所。羅漢曰。當至誠。聖鑑不遠。王遂禮請。忽見空中佛像。下降授王。犍稚因卽誠信。弘揚佛教。

玄奘よりも百二十餘年前に于闐國を通過した惠生も亦すでに之と同じやうな物

語を傳へて居る。

于闐王不信佛法有商將一比丘名毘盧旃在城南杏樹下向王伏罪云今輒將異國沙門在來城南杏樹下王聞忽怒卽往看毘盧旃旃語王曰如來遣我來令王造覆盆浮圖一軀使王祚永隆王曰令我見佛當從命毘盧旃鳴鐘告佛卽遣羅睺羅變形爲佛從空而現眞容王五體投地卽於杏樹下置立寺舍畫作羅睺羅像忽然自滅云々。

（『洛陽伽藍記』卷五）

ロックヒル氏所譯の西藏傳に於ては、この毘盧折那（毘盧旃 Vairotchana）阿羅漢が于闐國に來つて、佛法を傳へたのは、此國の建國以後百六十五年を以て王位に卽いた所のヰヂァヤサムブハヴ（Vijayasambhava）の治世第五年であつたと錄してある。而して又玄奘の所謂王城の南十餘里の地にある伽藍を、西藏傳では Tsar-na 大寺と記してあるが、『魏書』西域傳には『城南五十里有贊摩寺卽昔羅漢比丘盧旃爲其王造覆盆浮圖之所』とあるから、于闐國に於て創めて建てられた寺は、有名な贊摩大寺であつたことは明かである（Rémusat, Histoire de la ville be Khotan. PP. 20, 29.）。

于闐の建國を西藏傳や玄奘所傳の說に從ふて、阿育王時代と見て、前示したやう

に西曆紀元前二四二年頃とすれば、佛敎が此國に傳はつたのは西曆紀元前七十四年頃となる。而して此國最初の布敎者たる毘盧折那といふ高僧は西藏傳にも惠生の傳にも何處から來た人とも記してないが、玄奘は明かに彼が迦濕彌羅國から來つた人であることを傳へて居る。

自分はこの傳說の骨子となつて居る所、卽ち西曆紀元前第一世紀頃に毘盧折那といふ高僧が迦濕彌羅地方から于闐國に來つて、宣敎したといふことは信賴するに足ると思ふ。

元來、迦濕彌羅國は既に阿育王の時代から佛化に浴してゐたのであつて、阿育王時代に末闡提（Madhyāntikē）といふ高僧が四人の從僧と共に迦濕彌羅及び健馱羅へ赴いて、旺んに佛日を輝かしたのであるから、紀元前第一世紀頃には迦濕彌羅國の佛敎も他國へ傳道師を出すほど隆盛の域に達してゐたに違ひない。

抑、于闐國は前漢時代から所謂南道の要衝であつて、此地より莎車（Yarkand）に進み、更に西の方葱嶺を踰ゑて、南方に向へば、迦濕彌羅國に達することが出來るのである。而して支那本土と迦濕彌羅とは夙に交通が開けてゐて、『前漢書』西域傳に

も『自武帝始通罽賓自以絶遠漢兵不能至其王烏頭勞數剽殺漢使烏頭勞死子代立遣使奉獻漢使關都尉文忠送其使王復欲害忠忠覺之廼與容屈王子陰末赴共合謀攻罽賓殺其王立陰末赴爲罽賓王授印綬』と記してあるから、武帝以來外交上彼此の交通が可なり頻繁であつたらしい。固より『漢書』に所謂罽賓は現今の迦濕彌羅國より西北の地方を指して居るやうであるが、當時は此地方も迦濕彌羅本國の屬國となつてゐたのであらうから、迦濕彌羅國の範圍內に入れても大した差支はあるまい。扨支那と罽賓との間を往來した兩國の使者の中、南道若しくは中道を取つた者は、是非とも于闐を通過せなくてはならないのであるから、西紀前第一世紀頃には迦濕彌羅と于闐との交通の可能であつたことも推察し得られる。尙又玄奘の傳へた通り、若し眞に于闐國の原住民の一部が咀叉始羅(Takshasila)方面から來つたものとすれば、彼等が于闐に到るには必ず迦濕彌羅若しくは健馱羅を通過したに相違ない。故にこの兩國間の交通は早くから開けてゐたと見るのが當然である。

更に于闐國に於ける古傳說と、迦濕彌羅國に於ける古傳說との極めて相似通ふ

て居る所から察すると、兩國間には思想上密接な關係の存してゐたことを領解することが出來る。先づ西藏傳に於ける于闐の傳說を約言すると、次のやうである。迦葉(Kaçyapa)佛の時、仙人(Rishis)が此國に來つたが、國人から冷遇せられた爲、去つてしまつた。そこで龍族(Nagas)は怒つて、此の乾國を變じて湖とした。釋迦牟尼佛が多數の弟子と共に此國に來り、光明を以て此湖を覆ひ、その光明は三百六十三—Thomas に依つて改められた形は三百五十三であつて、この數はその後此の國に建てられた寺院の數を示すのである——の輝くところの睡蓮に集中せられた。遂に光明が統一せられて、三度湖の周圍を左方に繞り、而して水中に沒した。斯くて、佛は舍利弗(Çariputra)に彼の杖の尖端を以て、又毗沙門(Vaiçravaṇa)に彼の鋭鎗を以て、湖を突き刺すやうに命じた。而して佛は七日間瞿室饒伽(Gośīrṣa)山に住して阿難(Ānanda)に對して『これより後、湖は乾きて、我が滅後、Li-yul と稱する地となるべし、將來光明の三度繞りし處に於て、U-then と呼ばるゝ五塔を有する大都が建設せらるべし』と豫言せられた。

『西域記』には湖に關する物語は缺けて居るが、この山に於ける佛の豫言が傳へ

られてゐる。

王城西南二十餘里。有瞿室饒伽山（唐言牛角）峯兩起。巖嶮四絕。於崖谷間。建一伽藍。其中佛像時燭光明。昔如來曾至此處。爲諸天人。略說法要。懸記此地當建國土。敬崇遺法。遵習大乘。

ロックヒル氏はこの于闐に於ける傳說と、現今の迦濕彌羅・尼波羅(Nepal)地方や'Bod-yul(西藏)に嘗て存してゐたと信ぜられて居る湖の乾燥に關する物語と對照し(Lo-ekhill; The Life of Buddha, P. 232.)、又スタイン氏はこの傳說を以て迦濕彌羅國を固サチーサラス Satisaras の湖であつたとする所のニラマタ・プラーナ (Nilamata Purāṇa) 及びラーヂァタランギニに於ける古話に批較して、迦濕彌羅の古代物語と于闐のそれとの間に密接な關係の存することを指摘して居られる。于闐の物語に於ける釋迦牟尼佛と其の二弟子たる舍利弗と毘沙門とに歸せられてをる役目は、迦濕彌羅國の古話に於ては、梵天と其命の下に山を刺すことに依つて湖を乾かしたヴシヌ(Viṣṇu)とバラブハドラ(Balabhadra)とに依つて演ぜられて居るのである。佛がGośīrṣa卽ちGośṛinga山に住したといふ于闐の傳說は、迦濕彌羅の東南のナンバントハナ・チ

ルトハ(Nanbandhana Tirtha)の高嶺に於て、梵天及び其聖衆によつて占められたと傳へられてをる處を反映して居るやうに見ゐる。斯くニラマタ・プラーナに於ける迦濕彌羅の古傳說が、于闐に於て佛說的智識を以て變更せられて、西藏傳や『西域記』に於ける傳說のやうに、全く異つた形式を取るに至つたことは、兩國間に思想上密接な關係のあつたことを證明するものである(A Chronicle of the Kings of Kaśmīr, II. PP. 388sq.; Ancient Khotan. P. 160.)?

なほ、玄奘の傳ふる所に依ると、王城の西三百餘里を距つる勃伽夷城(Bhagai?現今のPiālma附近の地)中にある高さ七尺餘にして、相好允備威肅巍然として、首に寶冠を戴き、時に光明を放つ所の佛の坐像は、元迦濕彌羅國に在つたものを請ふて、此地に移したのであるといふ俗說が傳はつてゐたといふことである。其傳說は次のやうである。

昔有羅漢。其沙彌弟子臨命終時。求酢米餅。羅漢以天眼觀見瞿薩旦那國有此味焉。運神通力。至此求獲。沙彌噉已。願生其國。果遂宿心。得爲王子。既嗣位已。威攝遐邇。遂踰雪山。伐迦濕彌羅國。迦濕彌羅國王整集戎馬。欲禦邊寇。時阿羅漢諫王。勿鬪兵也。

我能退之。尋爲瞿薩旦那王說諸法要。初未信。尚欲興兵。羅漢遂取此王先身沙彌時衣。而以示之。王既見衣。得宿命智。與迦濕彌羅王謝咎交歡。釋兵而返。奉迎沙彌時所供養佛像。隨軍禮請。像至此地。不可轉移。環建伽藍。式招僧侶。捨寶冠置像頂。今所冠者。卽先王所施也。

斯る傳說の悉く信ずるに足らないことは、固より言ふまでもないことであるが、『後漢書』西域傳に『明帝永平中。于闐將休莫霸反。莎車自立爲于闐王。休莫霸死。兄子廣德立。遂滅莎車。其國轉盛。從精絕西北至疏勒十三國皆服屬。』と記してあるやうに、于闐國は後漢の明帝永平年中すでに南道諸國を服屬せしめたほど、威勢を有してゐたのであるから、或は葱嶺を踰ねて兵を進め、迦溼彌羅國を伐つたことがあるかも知れぬ。而して于闐王が其際其地の阿羅漢から法を聞いて發心し、其他の佛像を請じて本國へ還り、此地に安置したのではあるまいか。兎に角此傳說は古代に於て迦濕彌羅國と于闐國との間に政治上並に佛教上の交渉のあつた消息を洩すものである。

以上、諸種の事情から推察すると、迦溼彌羅國の羅漢たる毘盧折那が紀元前第一

世紀頃此國に來つて、佛法を傳へたといふことは、先づ信賴しても宜しからうと想ふ。

更に又迦濕彌羅國と于闐國との間には夙に美術風俗の上に交渉のあつたことが、近年の探檢に依つて明瞭になつた。スタイン氏がヨートカンから發見せられた古代陶器若しくは祠堂並に窣堵波の裝飾の一部であつた板石の彫刻の中には健馱羅の希臘佛教美術の形式を模したものが多くあり、又ダンダーン・ウイリクの舊跡に於て彼の發掘した佛堂の裝飾的遺物に存する佛教美術は殆んど皆健馱羅式である(Ancient Khotan. PP. 207—20, 244—55.)。尙又于闐が希臘文化の影響を受けて居ることに就ては、ヘルンレ氏がマカートニト(Macartney)氏やマッソン(Masson)氏等が和闐地方に於て發見した古遺物に基いて詳細な報告を出して居られる(A Collection of Antiquities from Central Asia, J. A. S. B. Extra Number 1, 1899. Introduct. P. XXXII.)。彼は和闐の窣堵波と迦濕彌羅の直接西北の阿富汗斯坦に於けるそれとの多くの一致點を觀察して、その中に存する遺物の種類及び形式の類似點を指摘し、マッソン氏が發見したバッサニ(Passani)に於ける塚の眞中から出た所の人間の頭蓋骨及び其の下に灰彩色せる石念珠等を入れた臘石の大壺。なほ又佉樓虱底文字を以て記

された樺樹皮の斷片などは、于闐の王若しくは酋長の古代の埋葬地であつたクラ・ヤーンターグ(Qura Yāntāg)に於て發見せらるゝものと著しく似通ふて居ることを述べて居られる。殊に和闐に於て絶無であつて、印度に於て產出する猿や象の模造が澤山和闐地方に於て發見せられるといふことであるが、之は確かに和闐の文化と印度のそれとの密接な關係を示すものと謂つ可きである。之等の報告を綜合して見ると、紀元前後に印度西北部に於て流行した希臘佛教徒の美術が此の于闐の佛教美術の本源をなして居ることは毫しも疑ひを挿む餘地はない。抑、カブールやバンヂャブ其の他の北方印度が紀元前一九〇年頃ヤヴナ即ち希臘人たる大夏國王デメトリオスに占領せられて以來、五六十年間は阿富汗斯坦並に西北印度の地は無數の希臘諸王の領する所となつて、之等の地方は希臘文化に浴することになつたのである。故に于闐に於ける古代の遺物に希臘文化の影響が認め得られるのは、當時以來于闐か健馱羅若しくは迦濕彌羅から直接其の文化を輸入した結果であると言ふより外はない。

以上諸種の方面から推察すると、迦濕彌羅國の羅漢たる毗盧折那が紀元前第一

世紀の中頃この國に來つて佛法を傳へたといふことは、事實と認めて差支ないやうに思はれる。西暦紀元前二年に大月氏國から伊存といふ王使が遙か遠方の支那に來つて、佛教を傳へて居るぐらゐであるから、東北印度に近い、而も交通並に文化の中心であつた于闐國へ西暦紀元前に佛教が傳はつたとしても、敢て怪むに足らない。

此時建てられた于闐最初の伽藍賛摩寺の遺跡は、スタイン氏の探撿の結果に依ると、現今のチャルマカザーン(Chalma-Kazān)の地に當るらしい(Ancient Khotan, P. 233.)。玄奘は賛摩寺が竣工した際、佛像が空中から降下したと傳へてをる——但し宋雲の傳ふる所に依ると、空中に現じた佛の眞容を王が畫作したのであるといふことである——が、實際は毗盧折那が王の爲に自ら之を造つたのであるか、さなくば彼がその本國迦濕彌羅から之を將來したのであるに違ひない。かくして賛摩寺に安置せられた此佛像は、餘程の傑作であつて、其後諸外國に於て有名となつたと見ゐて、涼の亡ぶる前、即ち西暦第五世紀の初期に罽賓(Kaśmīr)の臺寺にある佛鉢を拜する目的を以て、西域に赴いた涼州の沙門僧表は、罽賓の通路に故障が生じたものであ

るから、于闐に停り、國王に對して『讃摩伽藍有寶勝像。外國相傳云。最似眞相。願得供養』との志望を陳べた所が、王は卽ち工匠に命じて、高さ一丈の金薄像を造らしめ、其の頂上に眞の舍利を置いて、之を彼に與へたといふことである（『名僧傳』第二十六僧表傳）。

然らば此の時傳來した佛教は如何なる種類のものであつたらうか。今『西域記』に於ける前揭の記錄に依ると、國王が毗盧折那に對して、『如來は何の德があり、何の神がある、而して汝鳥棲勤苦して敎を奉ずるや、』と尋ねた所が、羅漢は『如來は四生を慈愍し、三界を誘導し、或は顯に或は隱に生を示し滅を示す。其法に遵ふ者は生死を出離し、其敎に迷ふ者は愛網に羈纏す。』と答へたといふことである。如來を以て或は顯に或は隱に生滅を示すことの出來るものであるとする思想は、確かに大乘敎的であるから、若し此傳說が眞であつたならば、最初于闐國へ傳はつた佛敎は、大乘敎であつたと斷定せねばならぬ。

然るに、『慈恩傳』に於ける此記事に依ると、國王が『如來と稱するは復何の義ぞ

や』と問ふたのに對して、羅漢は『如來とは卽ち佛陀の德號なり。昔淨飯王の太子一切義成じて、諸の衆生の苦海に沈沒し、救ひなく歸するなきを愍みて、乃ち七寶千子の資、四州輪王の位を棄てゝ、閑林に道を進むこと六年にして果成じ、金色の身を獲、無師の法を證し、甘露を鹿苑に灑ぎ、摩尼を鷲峯に耀かし、八十年中示敎利喜、化緣既に盡き、應を息めて眞に歸し、像を遺し典を遺す、云々』と答へて居る。斯くの如く、如來を以て淨飯王の太子が成道して得たる德號とする說明は、全く小乘敎的であつて、『西域記』に於ける如來の說明とは大にその趣を異にして居る。惟ふに、之は『慈恩傳』の方が正しいのであつて、『西域記』の方は玄奘自身が大乘敎徒であつたから、羅漢の口から出たものとして、大乘敎的說明を挿入したのであらう。すでに羅漢と言へば、小乘敎徒であることは明かであり、且又迦濕彌羅國は元來保守的な小乘敎國であつたのであるから、此國の羅漢が斯る大乘敎的口吻を漏すべき筈がない。而もワッタース氏が言つて居られるやうに（Watters, on Yuan chwang. II. P. 301.）『慈恩傳』に於ける佛陀の說明が、佛敎の何ものたるかを些しも知らない質問者に對する解答としては自然のものである。

于闐は有名な大乘教國ではあつたけれども、古來此國に於ては、小乘教も亦可なり勢力を振ふてゐたことは、次節に於て論ずる所に依つて明かである。さすれば最初迦濕彌羅國から于闐國へ傳はつた佛教が小乘教であつたと推定しても、此國の佛教事情とは衝突せない。

第三節　于闐佛教の盛衰

前節に於て詳說したやうに西曆紀元前第一世紀の中頃には、既に于闐國へ迦濕彌羅地方から小乘佛教が傳へられて、國王ヰヂァヤサンブハヴの敬信保護を受けて、佛像も造られ、伽藍も建てられたのであるから、從つて當時佛法が此の國の民間にも多少弘通したと觀て宜しからうと思ふ。

更に西藏傳に依ると、于闐最初の寺院賛摩寺が建立せられてから、以後七代の間は、一伽藍も建設せられなかつたといふことである。若し之が事實であるとすれば、ヰヂァヤサンブハヴ王以後數代の于闐王は、佛教弘通の念なく、從つて此の國の佛教は久しい間振興の機運に向はなかつたと觀ねばならぬ。ところが、此七代に殆んど三百年間も經過して居ることになる譯——その譯は後に自ら判明する——であるから、此傳說は餘り信用することは出來ぬ。現にかの朱士行の如きは、『道行經』の原本を求めむが爲に、魏の甘露五年(西曆二六〇年)に西流沙を渡つて、直ちに此國に赴いて居る。さすれば、當時すでに于闐國に大乘經典の存在してゐたことが、支

那へまでも知れ渡るほど、此國の大乘敎は其地盤を固めてゐたに相違ない。朱士行は果して此國に於て其の梵書正本九十章を得て、弟子弗如擅をして、之を洛陽に持ち還らしめた。而して、之が翻譯の任に當つたものは、于闐國人の無叉羅(Mo'sha'la)と河南の居士竺叔蘭とであつた。斯る史實に由つて觀ても、當時于闐の大乘敎は外國へ譯經僧を出すほど進歩してゐたことは明かである。が併し、一方に於ては、之に對して、小乘敎が當時の于闐敎界に侮る可からざる勢力を有してゐたことは朱士行が此地に於て求め獲た『放光般若』の梵本を洛陽に送らむとした時、此國の小乘敎徒が國王に異議を申し立てゝ、之を遮ぎらむとしたことに依つて、窺知することが出來る(『梁僧傳』第四)。其後、晉の太康七年(西暦二九六年)に『光讃般若』の梵本を將來した于闐國の沙門祇多密羅(Gitamitra)が、華嚴部方等部般若部の大乘經典並に阿含部の小乘敎典を傳譯して居る所から觀ても(晉代の譯經僧祇多密(謂友)は總ての經錄には只西域沙門として傳へられてゐるが、『出三藏記集』卷七所收の『合放光光讃隨略解序』には于闐沙門祇多羅と記してあつて、祇多羅も亦謂友を意味する祇多密羅(Gitamitra)の略音であるに過ひないから、祇多密の于闐沙門であることは明かである)、其後も依然として于闐國には大小兩乘敎が並び行はれてゐたことが判る。それで假令久しい間國王に依つて、一伽藍も建立せられなかつたとしても、

大小兩乘の佛敎は共に此の國に於て、漸次發展してゐたのである。併し、史料空乏のため、其の發展の迹を探ることの出來ないのは遺憾の極みである。

扨ボヂャサムブハヴ王から八代目の于闐王なるボヂャボリヤ(Vija-yavirya)の時に至つて、一伽藍が造營せられた。西藏傳には、之が建立せられるやうになつた因緣を次のやうに記してある。

或日彼(Vijayavirya)ショクカル(Srog-nkhar居城?)より眺望しつゝありしに金銀の塔(Telmitya)の如く輝く光明を認めて、其處に伽藍建立せらるべしとの佛の懸記を知りぬ。此に於て、王は沙門ブダァーヅァータ(Buddhadhuta)を召見して、彼を以て己が心靈上の導師と爲し、グンチル伽藍(Hgum-sfir vihāra)の造營を指揮すべきことを彼に命じたり(The Life of Buddha. P. 238.)。

玄奘も亦この傳說に相當すべき物語を傳へて居る。

王城西五五里有娑摩若僧伽藍、中有窣堵波、高百餘尺、甚多靈瑞、時燭神光、昔有羅漢自遠方來、止此林中、以神通力、放大光明、時王夜在重閣、遙見林中光明照曜、於是歷問僉曰、有一沙門、自遠而至、宴坐林中、示現神通、王遂命駕、躬往觀察、旣覩明賢、乃

心祇敬。欽風不已。請至中宮。沙門曰。物有所宜。志有所在。幽林藪澤。情之所賞。高堂邃宇。非我攸聞。王益敬仰。深加宗重。爲建伽藍。起窣堵波。沙門受請。遂止其中。(『西域記』第十二)

今之等兩傳を批較して見ると、大に異つて居る點もあるが、併し根本に於ては、相一致して居る。西藏傳に謂ふ所のグンチル伽藍は、玄奘が王城の西五六里距つてをる處に在る娑摩若(Somaña)——スタイン氏の說に從へば此地は現今のソミャ(Soniya)村であつてヨートカン(Yôtkan)の西に接してをるとのことである(Ancient Khotan, P. 194, n.)——僧伽藍に相當し、玄奘の所謂羅漢は西藏傳に謂ふ所のブダヅッータであることは明かである。さすればボヂャボリャ王がブダヅッータ羅漢の爲に、現今のソミャの地に一伽藍を建てたに相違ない。而して『法顯傳』にも、亦この伽藍と同一のものを指してをるやうな記事が存する。卽ち其の于闐國の條には、次のやうに錄してある。

其城西七八里。有僧伽藍。名王新寺。作來八十年。經三王方成。可高二十五丈。彫文刻鏤。金銀覆上。衆寶合成。塔後作佛堂。莊嚴妙好。梁柱戶扇窓牖皆以金薄。別作僧房。亦嚴麗整飾。非言可盡。

『法顯傳』にはその所謂王新寺の起源に就ては、何等記する所はないが、其名稱に依つて考へて見ると、之は王の建立に係るものであることは疑ひを挿むべき餘地がない。而も王城からの方角距離並に伽藍の外に高塔のある點などは、殆んど全く玄奘が娑摩若伽藍に就て傳へた所と相一致してをるのであるから、王新寺と娑摩若伽藍とは同一視せざるを得ないのである。

若し果して之等兩伽藍が同一のものであるとすれば、娑摩若伽藍は法顯が于闐國に錫を留めてゐた時より八十年以前に造營せられたものとなる。而して法顯が此の國に停住したのは西曆四〇一年であつたから、王新寺卽ち娑摩若伽藍がその工を起したのは西曆三二二年よりも以前でなければならぬ。從つて、若し法顯の傳ふる所に誤りがなかつたならば、この伽藍を建て始めた所のボヂャボリャ王は、西曆第四世紀の初期から中期の間に出世した人となる譯である。

玄奘は之に次でボヂャボリャ王の時に、于闐に於て佛敎が頓に敬信せられるやうになつた由來を傳へて居る。

頃之。王感獲舍利數百粒。甚慶悅。竊自念曰。舍利來應何其晚歟。早得置之窣堵波下。豈非勝迹。尋詣伽藍。具白沙門。羅漢曰。王無憂也。今爲置之。宜以金銀銅鐵大石函等。以次周盛。王命匠人。不日功畢。載諸寶輿。送至伽藍。是時也王宮導從遮僚凡百觀送舍利者。動以萬計。羅漢乃以右手舉窣堵波。置諸掌中。謂王曰可以藏下也。遂坎地安函。其功斯畢。於是下窣堵波。無所傾損。觀覩之徒。歎未曾有。信佛之心彌篤。敬法之志斯堅。王謂群官曰。我嘗聞。佛力難思。神通難究。或分身百億。或應迹人天。舉世界於掌內。衆生無動靜之想。演法性於常音。衆生有隨類之悟。斯則神力不共。智慧絕言。其靈已隱。其教猶傳。餐和飲澤味。道欽風。尙獲斯靈。深賴其福。勉哉凡百宜深崇敬佛法。幽深於是明矣。

之に由て觀ると、此に玄奘の謂ふ所の羅漢、卽ち Buddhadhuta は、餘程高德英邁の沙門であつて、彼はその威神力を以て、于闐國の上下を敎化して、佛敎に歸依せしめたやうである。而して『信佛之心彌篤。敬法之志斯堅。』と記されてある所から察すると、此王の時代に至つて、初めて于闐國の佛敎は牢乎たる地盤を築き、著しう發展の域に達したやうである。殊に王が群臣に向つて、佛力を讃歎した言葉の中に、『佛

力難思。神通難究。或分身百億。或應迹人天。……演法性於常音。衆生有隨類之悟。』といふ一節のある所を以て觀れば、此王は慥かに大乘佛敎の信奉者であつたに違ひない。從つて、彼の高僧プダァヅッータも亦大乘佛敎徒であつたに違ひない。

西藏傳に依ると、此王はグンチル伽藍の外に、其後牛頭山(Goçirsha)にゲントゥシャン伽藍(Hgen-to-shan vihāra)を建立したといふことである。ロックヒル氏はこの Hgen-to-shan といふ語を以て、梵語の Goçirsha 若しくは Goçring の亂れた形であると註釋を施して居られるが、或は左樣であるかも知れない。併し、之は梵說の轉訛ではなくて、或は支那語の牛頭山の音を寫したものであるかも知れない。『六十華嚴』並に『八十華嚴』の菩薩住處品にも、共に牛頭山と記されて居るが、牛頭(Goçirsa)山が卽ち玄奘の所謂牛角(Goçṛṅga)山であることは、既にスタイン氏の證明してをられる所である(Ancient Khotan, PP. 186, 187.)。元來、この牛頭山は于闐の佛敎と深い關係を有してゐるのであつて、于闐に於ては、一般に釋迦牟尼佛がこの山に於て、將來于闐國の建設せらるべきこと、並に佛敎の興隆すべきことを豫言せられたといふ傳說が行はれてゐたぐらゐである。而して、玄奘の所傳に從ふと、此の山の崖谷の間に、一伽

藍があつて、其の中には佛像が安置せられてあり、又この山の巖に大石室があつて、其の中に滅心定に入つて、彌勒の出世を待てをる阿羅漢が住して、數百年間供養を絶たないといふことである。この山の崖谷の間に在るといふ伽藍は、ヰヂァヤヰリヤ王の建てた所謂Hgen-to-shan伽藍であることは明瞭である。

西藏傳には、此の王の後二代の間は、更に伽藍が建立せられなかつたと記してあるが、法顯は王新寺に就て『作來八十年、經二王方成。』と傳へてをるから、之は二王が前王ヰヂァヤヰリヤ王の起工した娑摩若寺を完成することに全力を注いだ爲であつて、決して三寶に對する冷淡の爲ではなかつたらしい。法顯や玄奘が傳へてをるやうな宏壯華美を極めた伽藍の工事を竣へるには、異常の熱誠と努力とを要したに相違ない。さすれば、此の二王も亦佛法保護の爲に盡力した人であることは明かである。殊に法顯がこの娑摩若寺を王新寺と名けて居ることや、又その工事年數やなどから考へて見ると、此の後の王が法顯當時の于闐王であつたらしいから、この王は熱心な崇佛家であつたのである。

法顯は西暦四〇一年に此の國へ來つて、瞿摩帝(Gomatī)僧伽藍——スタイン氏は現今その位置は判らないと言つて居られるが、レヰ(P. Lévi)氏は瞿摩帝が哈拉哈什(Kara-kāsh)河の古名であることを示してをられるから、此の河の東岸に隆起して居て、現今なほ石室を有するコマーリー(Kolmārī)山が、此の伽藍の所在地であつたのであらう(Ancient Khotan. PP. 169, 186, 187.)——に於て、三ヶ月間宿泊して、行像の莊觀に接したのである。『法顯傳』に於ける此の國に關する記事は、實に當時の于闐教界の狀況を窺ふに、最も好き資料を供するのである。彼は先づ當國佛教の概勢を述べて、『此國豐樂。人民殷盛。盡皆奉法。以法樂相娛。衆僧乃數萬人。多大乘學。皆有衆食。』と記してをる。之に由つて觀れば、當時于闐は純然たる佛教國であつて、而も大乘學派が頗る優勢であつたらしい。而して、如何に人民が佛教に熱心であつたかは、その家毎の門前に皆小塔を建てゝ、其最小なものでも高さ二丈許りもあつたといひ、且又客僧を饗應し、其必需品を給する爲に、四方に僧房を作つてゐたといふことに依つて明かである。法顯の宿泊してゐた瞿摩帝伽藍は大乘教に屬する寺であつて、三千の大乘學僧がこゝに集つてゐたのである。彼は此寺に於ける食事の模

樣を記して、『三千僧共捷槌食。入食堂時。威儀齊肅。次第而坐。一切寂然。器鉢無聲。淨人益食。不得相喚。但以手指麾。』と陳べてをるから、當時于闐の僧風は頗る嚴肅なものであつたに相違ない。更に又彼は行像の有樣を次のやうに傳へて居る。

其國中有十四大僧伽藍。不數小者。從四月一日。城裏便掃灑道路。莊嚴巷陌。其城門上。張大幃幕。事事嚴飾。王及夫人婇女皆住其中。瞿摩帝僧是大乘學。王所敬重。最先行像。離城三四里。作四輪像車。高三丈餘。狀如行殿。七寶莊校。懸繒幡蓋。像立車中。二菩薩侍。作諸天侍從。皆金銀彫鎣。懸於虛空。像去門百步。王脫天冠。易著新衣。徒跣持華香。翼從出城。迎像頭面禮足。散華燒香。像入城時。門樓上夫人婇女。遙散衆華。紛紛而下。如是莊嚴共具。車車各異。一僧伽藍則一日行像。四月一日爲始。至十四日。行像乃訖。行像訖。王及夫人乃還宮耳。

この記錄に依れば、當時于闐に行はれた行像の儀式が、如何に莊嚴華麗を極めたものであり、且大乘教徒の國王が三寶に對して如何に敬虔であつたかは、想像するに餘りある。而して當時于闐國には行像をなし得る大伽藍が十四あつて、其の他小伽藍も多數存在してゐたことが判る。實に此の時代が于闐佛教の極盛時代で

あつたらしい。かの晉の沙門支法領が此の國に於て『四分律』並に『六十華嚴』の梵本を求め得たのは當代のことであり、又かの曇無德部(Dharmaguptāḥ)の三藏佛陀耶舍(Buddhayaśas)も彼が支那に來る前、暫く此の國に留錫してゐたのも當代であつた。なほ、曇無讖(Dharmarakshа)も亦この頃此の國へ或は自ら赴き、或は使を遣して、彼の譯出した『大般涅槃經』の梵本を索め得たのである。さすれば、西曆第五世紀の前後には、すでに于闐には大乘經典が大に備はつてゐたことが推察し得られる。

ヴィジャヤ ヴィリャ王から第三代目の國王ヴィジャヤジャヤ(Vijayajaya)の治世中には奇妙な因緣から、一伽藍の建設を見るやうになつた。初め此の王は支那の皇女のプチーシャン(Pu-nye shan桑公主?)を娶つたのである。公主は于闐へ蠶を輸入せむと欲して、マーザー(Ma-dza)といふ處で、之を養ひ始めた所が、王は支那の宰相に欺かれて、之等の蟲が土地を荒すところの毒蛇となるといふことを信じて、蛇を養ふ家を燒かしめた。しかし、皇女はその中の幾分を救ふて、竊かに之を養ひ、斯くて得たる絹を以て作つた衣服を、王に示した時に、王は先きの行爲を大に悔いて、印度からサング、ハーゴシャ(Sanghagosha)と云ふ沙門を招聘して、心靈上の導師となし、而して彼が蠶

の大部分を殺した惡業を償ふために、ポタラ(Po-ta-lya)及びマーザーの塔と大伽藍とを建てたといふことである。これは西藏の傳說である。

此物語とは少しく其の形式を異にして居るが、其の內容に至つては、全然同一である所の傳說が『西域記』にも亦記されてをる。伽藍の建てられるやうになつた道行きや、又建設者やなどは、兩傳一致を缺いて居るが、桑蠶の種が初めて支那の皇女に依つて、此の國へ輸入せられたのが因緣となつて、伽藍が造營せられたといふ點が、兩傳全く一致して居る。故に西藏傳に謂ふ所のMa-dza vihāraは玄奘が王城の東南五六里の地に在るといふて居る所の麻射僧伽藍であることは、毫しも疑を容れない。スタイン氏は玄奘の記錄に基いて、此伽藍の遺蹟を現今のクミ・シャヒーダーン(Kumi-Shahidān)に求めて居られる(Ancient Khotan. P. 230.)。而して、若し支那の公主を娶つたヰヂャヤヂャヤ王の先王が法顯と同時代であるとすれば、此王は西曆第五世紀の初期に屬する人となる譯である。併し、支那の正史に於て、當時于闐へ公主を遣したといふやうな記事が見わないのは、聊か物足らない感じがする。

若し涼州の沙門僧表が于闐に到つたのは此の王の治世中であるとすれば——彼

が西域から還つた時は、涼の將に亡びむとする時卽ち西曆第五世紀の初期であつた——此の王は大に佛僧を尊重した人であるに違ひない。卽ち僧表が固は弗樓沙國(Purushapura)に、當時は迦濕彌羅國の臺寺に在つたといふ佛鉢を拜する爲に、西域に赴き、于闐まで來つたところが、迦濕彌羅の通路が塞がつたものであるから、于闐王は彼に同情して、佛鉢を摸寫して、彼に與へ、且彼の希望を容れて、贊摩寺に在る佛像に摸して、高さ一丈の金薄像を造らしめ、眞の佛舍利をその頂上に置いて、之を彼に與へたのである。此の佛像は梁代には蜀の龍華寺に在つたといふことである。

西藏傳に依ると、ヰヂャヤヂャヤ王に次で卽位したヰヂャヤダルマ(Vijayadharma)王の時、その兄のダルマーナンダ(Dharmānanda)が僧となつて、印度に行き、此の國へ摩訶僧祇部(Mahāsanghika)卽ち大衆部の敎義を將來し、カムシッド(Skam-shid)に於ける八伽藍が此の學派の僧徒に依つて占められたといふことであり、又此の王の弟ドンチュー(Ho-don-ldros)が印度より薩婆多部(Sārvastivādina)卽ち說一切有部の學派に屬するマンタシディー(Mantasidhi)尊者を招き、ソンチル(Song-tir)伽藍を建立したといふことである。されば、西紀四百二三十年頃、王位に在つたと想はれるヰヂャヤダルマ王は小乘敎を

信奉して、小乘學派の教義を輸入することに盡力した人であるらしい。從つて、當時の于闐教界に於ては、小乘教が漸次勢力を得たことであらう。さればにや、當時幼少の際から、此の國の瞿摩帝寺に停つてゐた沮渠京聲が、宋の孝建二年(西紀四五五年)に楊都竹園寺及び鐘山定林寺に於て、譯出した經律――之等は主として彼が于闐から將來したのであるらしい――の種類を査べると、固より方等部涅槃部の大乘經並に大乘律も少くはないが、小乘經律の部數が非常に澤山ある。惟ふに、之は西暦第五世紀前後から從來の宗教的鎖國主義を破つて、一時に多くの聖僧を東方へ出した迦濕彌羅の小乘教に影響せられたのであらう。現に當時迦濕彌羅國に於て、第三教首と仰がれてゐた佛陀斯那(佛陀先Buddhasena)は、此の國に來つて、瞿摩寺に停つて、禪法を宣揚してゐたのである。かの沮渠京聲が高昌郡に於て翻譯して、齎し歸つた『禪法要解』『禪秘要治病經』各二卷は、彼が于闐留學中、佛陀斯那から授けられたものである。それで、當時印度から此の國へ招聘せられたといふ薩婆多部學派のマンタシディー尊者も亦恐らく迦濕彌羅國の聖達であつたであらう。

ヰヂァヤダルマ王に次いで卽位したヰヂァヤシンハ(Vijayasinalu)王の治世中に、ガ

ザク(Ga-ljag)王が于闐と戰ふて敗られ、其の生命を助けて貰ふ條件として、佛教を奉ずることゝなり、而して固アニョヂャ(A-lyc-ljia)といふガザク王の女であつた于闐王妃が、スウリク(Shu-lik)に佛教を弘布することに盡力したと傳へられて居る。ロックヒル氏は此に所謂Shu-likは疏勒(Kashgar)と何等か關係がありはすまいかと言ふてをられるが、或は左樣であるかも知れない。若し之が眞に疏勒であるとすれば、吾人の注意を拂ふべき點である。此の傳說を綜合し見ると、ヰヂァヤシンハ王時代には于闐の佛教的勢力は國内に充實し、更に溢れて、近隣の諸邦へ波及するに至つたことが知られる。

西藏傳には、ヰヂァヤシンハー王に次で位に卽いたヰヂァヤキルティ(Vijayakirti)王が、グツァン(Gu-zan)の王・カニカ(Kanika)の王等と共に、兵を印度に用ゐたと記してある。ロックヒル氏は茲に謂ふ所のカニカの王とは、莎車(Yarkand)や于闐までも支配してゐたと傳へられる迦膩色迦(Kanishka)王のことであらうと言ふて居られる。若し之が迦膩色迦王のことであるとすると、迦膩色迦兩王の中孰れか一人は西暦第

五世紀の中期の出世となる譯である。併し、自分は茲に所謂「カニカの王」を以て迦膩色迦王と同一視することは不都合であると想ふ。固より、『法顯傳』などに於てはKaniṣkaの音を寫すに劉膩伽の文字を以てしてをるから、西藏傳のKanikaを以てKaniṣkaの略音であると見て差支はないとしても、西藏傳の本文を熟讀すると、このKanikaといふのは人名でなくて、地名のやうである。卽ち并ヂァヤキルティ王は、Kanikaや Gu-zanといふ土地の諸王と共に、同盟軍を興したといふやうに解せられる。假令之が人名であるとしても、于闐地方は迦膩色迦王の勢力範圍であつたといふことであるから、若し于闐が印度に於て兵を用ゐたとすれば、全く迦膩色迦王の部下として働かねばならぬ筈である。然るに、西藏傳に依ると、并ヂァヤキルティ王は之等の諸王と同盟して、その兵を率ゐて印度に入り、ソキッ(So-kid)といふ町を征服して、多量の舍利(Cariras)を獲て還り、それを彼の建立したチョニョ(Phro-nyo)の伽藍の中に安置したといふことであるから、彼はKanikaの王やGu-zanの王やなどゝ對等の權力を有してゐたやうである。所詮、此の記錄では彼がKanikaの王の下に從屬してゐたやうには見ねぬ。且又この王の時代に外國の侵入者がこの地を征服し支配し

て、人民を苦しめ、其の後チュッグ(Drugu)のアノセー(A-no-sios)が于闐國へ軍を率ゐ來り、牛角山の南方に於ける伽藍の大部分を燒き拂ふたといふ西藏傳の記錄は如何に解釋すべきであらうか。迦膩色迦王の年代に就て既に詳論した所であるが、今王の年代の範圍を充分擴めて、西曆紀元前第一世紀から紀元後第四世紀の初期までの間に出世した人であるとしても、この間には、于闐國が斯る運命に遭遇したといふやうな史實は、少くとも支那の記錄に於ては、發見することは出來ない。固より、『後漢書』西域傳には建武の末年(西紀五五年)莎車王の賢といふものが于闐國を攻め并せて、其の王兪林といふ者を徙して驪歸王となしたと記してあるけれども、并ヂァヤキルティ王を西曆第一世紀の人と見ることの出來ないことは前述の考證に依つて明かである。併し、『魏書』には全然迦膩色迦王と無關係に、此の傳說を解明し得べき史實が存してをる。その西域傳には、次の如き事件が錄してある。

顯祖末蠕蠕寇于闐。于闐患之。遣使素目伽。上表曰。西方諸國。今皆已屬蠕蠕奴。世奉大國。至今無異。今蠕蠕軍馬到城下。奴聚兵自固。故遣使奉獻。延望救援。

北魏の顯祖献文皇帝の末年は西紀四七〇年頃である。蠕蠕は卽ち東胡の苗裔

たる柔然であつて、魏の道武帝の時には、高車(甘肅廸化州鎮西府)の地を奪ひ、東は朝鮮の境より、西は焉耆(Karashar)に至る版圖を有して、其の勢威大に振興したが、太武帝の時屢々敗られて、遠く西方に遁れたやうであるから、爾後于闐地方を侵すに至つたのであらう。而して、柔然は實に野蠻種族であつて、太武帝がその無知にして虫に類するの故を以て、之を蠕蠕と名けたくらゐであるから、斯る種族が于闐國に侵入した際には、西藏傳に示してあるやうに、その國民を苦めたに違ひない。之等の點から考へて見ると、西藏傳に所謂外國の侵入者とは、恐らく蠕蠕族のことであつたらう。

しかしながら、西藏傳に、この後于闐國を攻めて、伽藍を破壞したと記されて居る所のチユッグのアノセーは蠕蠕とは別種族のものであつたらうと思ふ。蓋し、蠕蠕族は實に佛教信者であつたからである。『梁僧傳』第八所收の法瑗傳に依ると、齊の永明七年(西紀四八九年)に入滅した靈根寺の沙門法瑗の第二兄に當る法愛といふ沙門は、よく經論を解し、兼ねて數術に長じてゐて、芮芮卽ち柔然の國師となり、三千戶に俸せられてゐたといふことであり、『魏書』の蠕蠕傳に依ると、永平四年(西紀五

一一年)九月に蠕蠕の醜奴卽ち豆羅伏跋豆伐可汗が沙門洪宣を遣して、珠像を奉献したといふことであり、其の他蠕蠕の王には婆羅門とか伏圖とか名けたものがあつたやうであるから、彼等の間には夙に佛教思想の行はれてゐたことは明かである。故に假令蠕蠕の軍が于闐へ侵入しても、伽藍を燒くといふやうな排佛的行動は取らなかつたであらう。

然らば蠕蠕族に次で于闐國へ侵入したものは、何種族であつたらうか。自分の見る所では、之は嚈噠(Ephthal)であつたに相違ないと推定してゐる。此の種族は全く遊牧生活を送り頗る凶悍であつて、而も佛法を信ぜず、多く外神に事へて居たのであるから、此の民族が侵入した地方の佛教は、一時大打擊を受けたに違ひない。而して、嚈噠は西暦四二五年頃トランスオキヂアナに侵入して以來漸く勢力を得て、『魏書』西域傳嚈噠國の條に『西域康居于闐沙勒安息及諸小國三十許皆役屬之』と記してあるほど其の國力發展したのであるから、此の民族が于闐に寇した時には、當然伽藍などを燒き拂ふて此の地の佛教に打擊を加へたことであらう。

以上の研究にして、若し誤りがないとすれば、弗ヂァヤキルティ王の時代に于闐國

へ侵入したものは、蠕蠕及嚈噠であつたのであるから、此の王は西紀四百七八十年前後の人となる譯である。而して余が『法顯傳』の記事に基いて、推定した所によれば、前王の年代は西暦第五世紀の中葉となるのであるから、略これと一致して、些しも衝突を見ないのである。然れば西藏傳に所謂 Kanika の王が迦膩色迦王でないことも、自ら明白である。

法獻が聖迹巡拜の目的を以て、西域に赴いたのは、宋の元徽三年(西紀四七三年)であつたから、彼が于闐に到つたのは、丁度ヂァヤキルティ王の時代であつたであらう。彼が此國に於て、達摩摩提(Dharmamati)の譯した『妙法蓮華經提婆達多品』及び『觀世音懺悔除罪呪經』各一卷の原本と共に、佛牙一枚舍利十五粒を得たのであつた『歴代三寶紀』第十一)。さすれば、當時此國には幾分密教の行はれてゐたことが窺はれる。而して法獻の得たのは『法華經』の一部に過ぎないが、唐代に出來た『法華經傳記』第一卷には『西域志』から引用して、昔于闐の王宮に『法華經』梵本六千五百偈あつたことを傳へ、又同書第七卷には『西國傳』から引用して『法華經』に關して次のやうな物語を載せてをる。

于闐國有僧伽藍名瞿摩帝是大乘寺三千僧居揵椎而食時有一駈使沙彌年十六亦有尼乾子善占相見此沙彌云汝年十六餘命只一年雖捨衣鉢不可延壽沙彌悲愁上座哀愍之爲後世善敎法華經沙彌根鈍不識文字上座一部之中最方便壽量二品授之沙彌專心轉讀尼乾子後見沙彌生希有心問汝修何功德答纔讀經一兩品尼乾歎曰大乘之力不可思議轉十七歲壽成七十年乃出家投寺讀摩訶衍經

斯る物語は固より悉く信ずるに足らないが、兎に角是等の傳說に依つて見れば、于闐國に完全な『法華經』の梵本が存在してゐたことは推して知られる。

前述したやうに、于闐國はヂァヤキルティ王の時代に、蠕蠕に侵入せられ、嚈噠に征服せられて、一時此の國の人民並に佛教は大打擊を受けたのである。故に西藏傳には、それが爲、此の國の住民は滅亡し、一伽藍も新設せられなかつたと記してある。而して、此の國のヂァヤ王家は其の際東方に逃れて、北魏に歸し、其の別部として、現今の山西省大同府に據り代々武名を輝かして、唐代に至り、慈恩大師基窺の如き宗教的偉人をも出したのであるらしい。『宋高僧傳』卷四所收の窺基傳には、窺基の姓

を尉遲氏であると記して、更に『尉遲之先、與後魏同起、號尉遲部、如中華之諸侯國、入華則以部爲姓也。魏平東將軍說、六代孫孟都生羅迦、爲隋代州西鎭將、乃基祖焉、考諱宗。唐左金吾將軍松州都督江由縣開國公、其鄂國公德則諸父也。』と錄し、又唐代の李又の撰んだ『大唐大慈恩寺法師基公碑』(『續藏經』第二篇乙第二十三套第一冊所收『玄奘三藏師資叢書』)には『法師諱基、字洪道、姓尉遲氏、代郡人也。其先魏之別部、家代以將師爲雄。』と載せてある。茲に所謂尉遲氏とは『舊唐書』卷百四十八に傳へてをるやうに、于闐王の姓であつて、スタイン氏は發音學上から支那に謂ふ所の尉遲(Wei-chih)を以て、西藏に謂ふ所の Vijaya の音譯であると見做してをられる (Ancient Khotan. P. 173, n. 9.)。且又西藏傳には ヴィジャの姓を有する于闐王としては西曆第五世紀の末期の王 ヴィジャキルティを以て最後としてをるのであるから、ヴィジャ王家の末路に關する余の推論は正當であると信ずる。尙余は『宋高僧傳』に記す所の魏の平東將軍となつた說といふ人が卽ち Vijayakirti ではあるまいかと思ふて居る。何となれば、于闐に於ける ヴィジャ王家の最後の王名たる kirti (kīrti)は、普通には名聲とか名聞とかいふ意味を有する梵語であるが、之は元來語るとか說くとかいふ意

味の梵語動詞の現在語基なる kṛit に ti の加はつたものであるから、說といふ漢字に意譯され得るのであつて、而もこの說といふ人が後魏に於ける尉遲部の始祖となつて居るからである。併し唐代に於ては ヴィジャ王家が再興せられたと見ねて『唐書』于闐傳には『王姓尉遲氏、名屋密、本臣突厥、貞觀六年遣使者入獻』と錄し、更に尉遲の姓を有する王名が記されてをる。

西紀五一九年に惠生と共に此の國に來つた宋雲は、此の國に關する記錄を遺してをるが、之は主として此の國の風俗傳說に止つて、當時の佛敎狀態を窺ふに足るものは至つて乏しい。けれども、彼は捍麼(麼)城——玄奘の所謂媲摩城であつて今の Uzum-Tati ——の南十五里の所に在る一大寺に三百人の僧がゐたといふてをるから、此の地方に於ける佛敎的勢力の衰へてゐなかつたことを推察することが出來る。彼はまた此の國の葬儀のことを述べて『死者以火焚燒、收骨葬之、上超浮圖、居喪者、翦髮劈面、以爲哀戚、髮五寸、卽就平常、唯王死不燒、置之棺中、遠葬於野、立廟祭祀、以時思之』と記してをるのは、于闐地方の遺跡を發掘する上に於て、注意すべきことなるのみならず、當時一般民間の葬儀は、佛敎的であつたといふことも知り得るのである。且

惠生等が此の國から乾陀羅國に至る間に、彼が初め京師を出發する際、皇太后から下附せられた五色百尺の幡千口、並に錦の香袋五百枚の外、王公卿士から與へられた幡二千口を佛事の行はれてゐた處に、皆奉納して、悉く盡きてしまつたと傳へられてをるから、于闐より西方の地には當時如何に佛事が盛んに行はれてゐたかといふことが判り、從つて之等の地方に於ける嚈噠の侵入も佛教を根絶するに至らなかつたことを推知することが出來る。而して支那正史の上に於ても、亦引き續いて、于闐國に於ける佛教の隆盛を傳へてをる。『梁書』の于闐傳には『尤敬佛法』といひ、又梁の武帝太同七年(西紀五四一年)に此の國から玉を以て刻んだ佛像を献じたといひ、尙又『魏書』の西域傳には『俗重佛法、寺塔僧尼甚衆、王尤信尙、每設齋日、必親自灑掃』と記してある。併し、同書には更に『俗無禮義、多盜賊、淫縱』と傳へて居る所から見ると、當時于闐國には佛教の感化を受けない蠻族が多く入り込むでゐたに違ひない。而して民間に於ける佛教の感化力が多少衰へたのであらう。

中印度優禪尼(Ujjayanī)國の王子であつた月婆首那(Upaśūnya)が、陳の天嘉乙酉歳(西紀五六五年)に江州興業寺に於て、譯出した所の『勝天王般若波羅蜜經』七卷は、彼

が梁武帝太清二年(西暦五四八年)に突然出遇ふたところの于闐國の沙門求那跋陀(Guṇabhadra)の所持せるものを請ひ受けたのである(『續高僧傳』第二)。さすれば此の『般若經』も亦于闐國に行はれてゐたのであることは明かである。

西紀六四四年に于闐國に來り、小乘薩婆多寺に住して、この國の諸僧の爲に『瑜伽』『對法』『倶舍』『攝大乘』等の諸論を講じてゐた玄奘は、當時此の國に伽藍百有所、僧徒五千餘人あつて、多く大乘佛教を學習してゐたことを傳へて居る。而して當時の于闐國王が如何に三寶を敬重してゐたかといふことは、玄奘が此の國の東境勃伽夷(Bhāgya)城に來つて七日間停住してゐたところが、于闐王は彼がその國境に到つたことを聞いて、躬らこの地に來り迎へて謁し、王は先づ都に還つて、兒を留め置いて奉侍せしめ、二日目に王は又達官(Darkan)を遣して奉迎せしめ、城を離るゝこと四十里程の地に宿らしめ、其の翌日王は道俗と共に音樂香華を將て、路左に整列して出迎へ、玄奘を城内に請して、小乘薩婆多寺に安置し、而して玄奘が諸論を講じた際には、王は道俗と共に歸依聽受したといふことに依つて明かである『慈恩傳』卷五)。併し、この時代に於ける于闐佛教は法顯時代のそれに比べて多少衰勢に向つてゐた

やうである。何となれば、法顯は此の國の僧數萬人と記して居るが、玄奘は只五千餘人と傳へ、又彼は旣に荒廢に歸して僧侶のゐない伽藍すら目擊して居るのである。茲に注意すべきことは、『魏書』並に『隋書』には此の國の風俗禮義なく、多く賊盜淫縱であると記してをるに反して、玄奘は『俗知禮義、人性溫恭、好學典藝、博達伎能、衆庶富樂、編戶安業、國尙音樂、人好歌舞。……儀形有禮、風則有紀。』と傳へてをることである。惟ふに、之は前述したやうに、蠻族の侵入に依つて、一時攪亂せられた于闐の風俗人情も、漸く恢復整頓し、イラン・印度・支那の文化の影響を蒙つて、益々開發して此に至つたのであらう。

玄奘の歿後二十餘年を經て、于闐國から學僧は大小に通じ、智は眞俗を兼ね、呪術禪門悉く皆諳曉してゐたといふ沙門提雲般若(Devaprajña)が支那に來り、魏國東寺(後大周東寺と改稱す)に於て、天授二年(西紀六九一年)までに、華嚴部密敎部の經典各二部、その他『大乘法界無差別論』一卷を傳譯したのである。提雲般若に次で、于闐國から、又大小乘を始めとして異學の論にも通達してゐた有名な實叉難陀(Śikshānanda)が、支那へ多くの大乘經典を將來した。初め唐の太后は佛日を輝かすことに努め、

特に大乘經を敬重してゐたが、『華嚴』の舊經の虞會が未だ完備してゐないのを遺憾として、于闐國にこの梵本の存することを聞き、使を發して、之を求めしめ、並に適當な譯人の派遣を請はしめた。そこで、實叉難陀が經典を携へて長安に臻り、證聖元年(西紀六九五年)三月十四日に大遍空寺に於て、所謂『八十華嚴』を譯し、聖曆二年(西紀六九九年)十月八日に至つて、佛授記寺に於て、その業を畢へたのである。此の外、彼は久視元年(西紀七〇〇年)までに華嚴部方等部秘密部の經典を始めとして、般若部大乘論律の佛典合せて十八部二十七卷を傳譯した。尙又于闐國王の質子として支那に來り、唐の中宗景龍元年(西紀七〇七年)に出家を遂げた智嚴が、開元九年(西紀七二一年)に譯出した『出生無邊門陀羅尼經』『說妙法決定業障經』等の大乘佛典四部六卷、並に『尊勝陀羅尼』『法華經』等の呪七首は、或は于闐國と關係のあるものであるかも知れない(『開元釋敎錄』卷九)。之に依つて觀れば、當時于闐國には華嚴部密敎部の經典が最も盛んに行はれてゐたことを推知することが出來る。當代に於ける密敎の流行は、啻に此の國ばかりでなく、印度西域一般の風潮であつたことは、支那の譯經史に徵して、炳かである。

西紀七二三年十一月上旬安西(庫車附近)に至つた慧超は『又安西南去于闐國二千里。亦是漢軍馬領押。足寺足僧。行大乘法。不食肉也。……于闐有一漢寺。名龍興寺。有一漢僧。名(二字欠)。是彼寺主。大好住持。彼僧是河北冀州人士。』といふ記錄を殘して居る。さすれば、西曆第八世紀の初期に於ても、矢張于闐國は大乘敎が盛んであつたらしい。而して此の國に龍興寺と稱する支那僧の寺があつて、慧超當時一人の支那僧がそこに住してゐたのである(『慧超往五天竺國傳』殘卷)。西紀七四三年于闐國に於て客死した東印度の沙門達摩戰涅羅(Dharmacchandra)は、一年有餘も此の國の金輪寺に住して、有緣を化度してゐたのであつて、道俗の歸向が篤かつたといふことである。彼は嘗て龜茲(Kucha)國に居た時には、門人利言に七千偈の『大乘月燈三摩地經』及び五千偈の『瑜伽眞言』の梵本を敎授し、次で支那に赴いた時には『普遍智藏般若波羅蜜多心經』一卷を譯出してをるから、彼は于闐國に於ても亦大乘敎を弘布したことであらう(『貞元釋敎錄』卷十四)。

爾後二百年間ほどは、此の國の佛敎狀態を窺ふべき何等の資料も存してゐない。固より、此の間に支那の僧にして印度へ赴いた者は、大抵この國を通過してをるに

違ひないが、些しの記錄も殘つてゐないのである。唯『十力經』の序に依ると、悟空卽ち法界が西紀七七四年に北庭州(Turfan)龍興寺に於て、于闐國の沙門尸羅達磨(Śīladharma)と共に『華嚴經』の一部たる『十地經』を譯出したといこふことを知り得るに過ぎない。併し、之に依つて、吾人は西曆第八世紀の末葉に及んでも、于闐國の佛敎はなほ外國へ傳道師を出すほど優勢であつたといふことゝ、久しく此の國に『華嚴經』の行はれてゐたといふことゝを、明かに知り得るのである。

『五代史』卷七十四于闐傳に依ると、天福三年(西紀九三八年)九月に于闐王李聖天が馬繼榮來を使者として遣して、其の國產を貢獻したから、高祖は李聖天を封して、大寶于闐國王と爲し、此の歲冬十二月供奉官の張匡鄴、及び假鴻臚卿彰武軍節度判官の高居誨が于闐に使し、靈州(現今の甘肅省寧夏府靈州の西南の地)より行くこと二年にして、于闐に到り、天福七年の冬歸國したのである。而して、高居誨はその旅行記をものしてをる。其の中に『俗喜鬼神。而好佛。聖天居處。嘗以紫衣僧五十人列侍』と記してあるから、西曆第十世紀に入つては、民間にはすでに佛以外の神などを信仰するものも少くなかつたやうであるが、併し國王を始めとして國民の多數は、依然として三寶を敬信

してゐたのである。更に『宋史』卷四百九十于闐傳に依ると、太祖乾德三年(西紀九六五年)五月に于闐の僧善名・善法の兩人が來朝して、紫衣を賜ひ、善名は其の後四年を經て、重ねて來朝して、昭化大師といふ號を賜はつた。尙又開寶四年(西紀九七一年)に于闐國僧の吉祥といふ者が、その國王の書を賫し來り、疏勒(Kāshgar)を破つて獲たる舞象を献上したといふことである。

スタイン氏がグルナー(Grenard)氏の研究の結果に基いて論ぜられた所に從ふと、イシク・クル(Issik-kul)から喀什喝爾(Kāshgar)卽ち疏勒に至る地方を領有し、サトク・ボグラ汗(Satok Boghra khān)といふ名の下に、周く東方土爾其斯坦に行き涉り、敬虔な回教確立者として、俗傳に於て有名な主權者が、回教に改宗したのは、西紀九四一年以後間もないことでなければならぬといふことである(Ancient Khotan. P. 56.)。若し果して然りとすれば、西紀九七一年に支那に來つた于闐國僧吉祥が疏勒を破つて舞象を獲たといつたのは、全く于闐の佛教徒と疏勒の回教徒との戰であつて、此の戰に於ては、于闐の佛教徒が疏勒に於ける土爾其族の主權者を破つたのである。

支那の正史には、于闐の佛教徒と土爾其族の回教徒との戰爭に關する消息に就ては、毫しも漏してないが、唯『宋史』の于闐傳に、眞宗大中祥符二年(西紀一〇〇九年)に此の國の黑韓王が回鶻の羅厮溫等を遣して、方物を貢献せしめたといふことが錄してあるが、茲に所謂黑韓なる名稱は可汗(Khākān; Khān)といふ土爾其語を寫したものである。故に同書には『黑韓蓋可汗之訛也。』と記してある。而も、その使者として支那に來つた羅厮溫といふ者は、年來異教徒としてバラーサーグーン(Balāsāgūn)の汗を敵視してゐた佛教徒の回鶻人(Uigurs)であることに依つて觀れば、第十一世紀の初期から、于闐國の主權者の種族及び宗教上に變化の生じたことは明々白々である。從つて、于闐國が西紀一〇〇六年に、當時喀什喝爾及びバラーサーグーンの土耳其王朝の首領であつた所のアブール・ハサン・ナジル・イリック・カラー汗(Abū'l-Hasan Naṣr Ilik Qaṭā Khān)の兄弟若しくは從兄弟に當るユースフ・カデル汗(Yū-suf Qadr Khān)に依つて支配せられてゐたといふ回教徒史家の記事は、確實であるに違ひない。ユースフ・カデル汗が四萬の大軍を率ゐて、于闐に侵入した際には、當時の于闐國王ヂァガールー・カルカールー(Jagālū Khalkhālū)は西藏及び回鶻の援兵を得て、

二十四年の長年月苦戰奮鬪を續けたが、遂に西紀一〇〇〇年に至つて、力盡き、ヂヤガール・カルカールー王は殺されて、ユースフ・カデル汗が于闐國王となつたのである。

于闐國の佛教徒と土耳其族の回教徒との宗教戰爭に關しては、スタイン氏は詳說してをられるが(Ancient Khotan, P. 180—182.)要するに、于闐は西暦第十一世紀になるや否や、全然回教徒の土爾其民族に征服せられて、爾後此の國に於ける佛教は滅盡の非運に陷つたのである。實際、此の國民は土爾其斯坦に於ける諸國が悉く回教徒に征服せられた後と雖も、なほ奮鬪防戰を繼續して、飽くまで佛法保護の任に當つたのであつて、以てその如何に佛教に熱心であつたかを推察することが出來る。

西藏傳には、佛滅後一五〇〇年に至つて、于闐國王は佛法を信せずして、僧徒を虐待し、國民も亦三寶に對する信仰を失ひ、最早僧衆に施與するものがなくなつたが爲、彼等僧衆は耕作の業に從事せざるを得ないやうになつた。その後、此の國の無信仰な宰相が、僧房を奪ふたから、僧衆は Tsar-ma 大寺に集會して、此の國を見棄ることに決議して、そして彼等は Bod-yul(西藏)にその歩を向けむと決心したといふことが記載してある。蓋し、之は回教徒侵入の結果を叙したものであらう。斯くて、一千

年以上も此國に於て生長發展した佛教も、忽ちにして根絶せらるゝに至つたのである。故に西紀一二七一年から一二七五年までの間に、この地に來つたマルコポロ (Marco Polo) も于闐の人民は大汗 (Kaan) に服從し、總てモハメット (Mohammed) の崇拜者である事を目擊したのである (Travels of Marco Polo, tr. by Yule. I. P. 188.)。

第四節　于闐附近の純大乘教國

于闐國は西域に於ける大乘教國として、將た又支那大乘教の本源地として、佛教史上有名な國であるが、古來大乘教獨占の地でなかつたことは前節に於ける論述に依つて明かである。然るに、此の國の附近には、佛教史上あまり著しうない國で、而も大乘教のみ獨り盛んであつた國が存在してゐたのである。

『歴代三寶記』卷十二に於て、『新合大集經』六十卷の成立した由來顚末を記述してをる中に、後周明帝の武成年中(西紀五五九—五六〇年)に北印度健馱羅(Gandhāra)國より南道を通過して初めて長安に來り、更に突厥に往き、後再び隋の開皇五年(西紀五八五年)に洛陽に來り、多數の大乘教典を翻譯した有名な闍那崛多(Jñānagupta 至德)が毎に自ら說述した言葉として、次のやうな記錄が挿んである。

于闐東南二千餘里。有遮拘迦國。彼王純信敬重大乘。諸國名僧入其境者。竝皆試練。若小乘學卽遣不留。摩訶衍人請停供養。王宮自有摩訶般若大集華嚴三部大經。竝十萬偈。王躬受持親執鍵鑰。轉讀則開。香花、供養。又道場內種種莊嚴。衆寶備具。兼懸諸雜花時非時果。誘諸小王。令入禮拜。彼土又稱。此國東南二十餘里有山甚嶮。其內安置大集華嚴方等寶積楞伽方廣含利弗陀羅尼華聚陀羅尼都薩羅藏摩訶般若八部般若大雲經等凡十二部。皆十萬偈。國法相傳。防護守視。

右の記錄は大に佛教學者の注意を惹いたものと見ゐて、費長房の經錄以後に出來た僧傳や經錄には屢々之が引用せられてをるのみならず、唐の法藏の撰出した『華嚴經傳記』卷一や、其の門弟惠英の輯錄した『華嚴經感應傳』などの中にも、亦之が記載せられて居る。而してまた唐の祥公の編輯に係る『法華經傳記』卷一の中には、其の出處や其の辭句は前者と異つてゐるが、其の內容に至つてはそれと全く同一なる記錄が存してゐる。聊か重複に涉る懼れはあるが、先づその全文を掲載しやう。

西域誌云。昔于闐王宮有法華梵本。六千五百偈。東南二千餘里有國。名遮拘槃國。彼王累世敬重大乘。諸國名僧入其境者。皆試其解。若小乘學。則遣不留。大乘人請綺供養。王宮亦有華嚴大集摩訶般若法華大涅槃等五部大經。竝十萬偈。王躬受持親執戶鑰。轉讀則開。香華供養。又東南二十餘里有山。甚嶮難。峯山有石窟。口狹內寬。其內

華嚴大集方等寶積楞伽方廣舍利弗陀羅尼華聚陀羅尼都薩羅摩訶般若大雲法華凡一十二部。皆十萬偈。國法相傳。防護守掌。

茲に所謂『西域志』とは何人の著作したものであるか明かでないが、或は『法苑珠林』卷三十五、卷三十八、卷三十九及び卷五十五等に引用せられてゐる王玄策の『西域志』（『法苑珠林』第百卷に依ると、之は王玄策等が乾封元年（西紀六六六年）に勅を受けて、撰出したものである。）と同じものであるかも知れぬ。併し、費長房が闍那崛多の言葉として錄して居るものと、此の祥公の引用文とを對照して見ると、兩者の間には多少辭句の相違はあるが、其の叙說の順序といひ、其の方角距離の表示といひ、兩者全く同一であり、且又或數句の如きは兩者の間に些しの相違も發見することが出來ぬぐらゐであるから、祥公の引用文は『歷代三寶記』の記錄と全然獨立して、別の源から流れ出でたものと判斷することは出來ぬ。惟ふに、祥公の引用文中、最初の『昔于闐王宮有法華梵本六千五百偈。』といふ一句が『西域志』から出たものであつて、其の他の記錄は費長房の記錄と關係のあるものから引き出されたのであらう。假令之が眞に『西域志』の中から引用せられたものとしても、『西域志』そのものゝ記錄が『歷代三寶記』のそれと密接な關係を有して

ゐたと推察せざるを得ない。

然らば、遮拘迦若しくは遮拘槃といふ名を以て傳へられた大乘敎國は果して如何なる地方を指したのであらうか。闍那崛多の言ふ所に依れば、此の國は于闐國の東南二千餘里を距つた所にあるとのことであるが、斯る地方に大乘敎の行はれてゐたといふやうな傳說は此の外何れの記錄にも表はれてゐないやうである。おそらく、之は玄奘の所謂斫句迦國と同じものであらう。玄奘は斫句迦國より東嶺を踰ゑ谷を越えて行くこと八百餘里にして、于闐國に達して居るのであるから、于闐國よりいへば斫句迦國は西八百里の地に存してゐたのである。さすれば、兩者の示す方角と距離とは毫しも一致せないことになる。然し、斫と遮とは同じくcheといふ音を有するのであるから、斫句迦國と遮拘迦とは同一名稱を音譯したものであることは明かである。既にワッタース氏の如きは、玄奘の所謂斫句迦と『大方等大集經』卷五十五に出て居る國名の遮居迦と同一であることを主張せられたのであるから（Watters, On Yuan Chwang. II, P. 294.）遮拘迦と斫句迦との同一國名であることに就ては、此の上論證を加へる必要はあるまい。併し國名は同じであ

つても、其の所在地が異つて居るのではあるまいかといふ疑問があるかも知れないが、玄奘が斫句迦國の條に於て述ぶる事柄は闍那崛多が遮拘迦國に就て說く所と符節を合するやうである。卽ち『西域記』卷十二に『此國中大乘敎典部數尤多。佛法至處莫斯爲盛也。十萬頌爲部者凡有十數』と記されてある所は前に揭げた費長房の記錄を簡單に詮表したのに外ならぬ。而して費長房は前揭の記錄の次に、矢張闍那崛多が兼ねて言ふた事として、『有三滅定羅漢在彼山窟寂禪冥衞半月一月或有僧往山爲羅漢淨髮』と記して居るが、玄奘も亦斫句迦國の條に『國南境有大山崖嶺嵯峨峯巒重疊草木凌寒春秋一貫谿澗浚瀨飛流四注崖龕石室棊布巖林印度果人多運神通輕擧遠遊棲止於此諸阿羅漢寂滅者衆以故多有卒堵波也今猶現有三阿羅漢居巖窟中入滅心定形若羸人鬚髮恒長故諸沙門時往爲剃』と傳へて居る。

これ等の一致點から觀察すれば、假令兩者の示す方角や距離は全く異つてゐても、遮拘迦と斫句迦とは同一國土であると斷定するのが當然である。而して玄奘の示す國々の方角距離は實に正確なものであるから、多分闍那崛多の言ふた所は彼自身の思ひ違ひか、さなくば『歷代三寶記』の選者費長房が誤りを傳へたのであら

う。かくて、祥公の引用した『西域志』若しくは地の記錄も亦此の誤りを繰り返へすに至つたのである。

ワッタース氏の說に從ふと、玄奘の所謂斫句迦國は古の莎車、現今の Yarkand に相當するとのことであるが、スタイン氏の說に依ると、此の國は佉沙卽ち疏勒 (Kāshgar) より東南に行くこと五百里にして、從多 (Sitā 卽ち Yarkand) 河を渡つて到る地であるから、現今のカルガリク (Kargḥalik) と同一地方であるだらうとのことである (Ancient Khotan. P. 89—92.)。固より後者の說の正當であることは言ふを俟たぬ。而して法顯の所謂子合國、慧生の所謂朱駒波國、其の他『魏書』『北史』『唐書』等の西域傳に所謂朱居國朱俱波(槃)國も亦此の地方を指すものであることは學界の定說となつてをる。

法顯は于闐國から直ちに子合國に赴いて此の國に十五日間錫を留め、更に葱嶺に向つて進んだのであるが、彼は子合國に就て其の國王は精進であり、千餘人の僧があつて、多く大乘敎を學んで居ると傳へて居るから、西曆第四世紀の末葉から第五世期の初期に當つては、すでに遮拘迦國には大乘佛敎が大に盛んであつたこと

を推察するに難くない。次に西紀五一九年に慧生は于闐國から此の國に入つたのであるが、遺憾ながら彼は此の國の佛教のことに關しては一言も述べてゐない。只此の國の人民は山に住居し、五穀が甚だ豐かで、食物は粟麥を以てして、生物を屠殺せないが、死したるものゝ肉は之を食し、風俗言語は于闐と似通ひ、文字は婆羅門と同一であることを告ぐるに止つて居る。さうして此の記事は玄奘が斫句迦國の地勢・產物・風俗・文字・言語等に就て傳ふる所と大にその趣を同じうして居る。

斫句迦國。周千餘里。國大都城周十餘里。堅峻險固。編戶殷盛。山阜連屬。礫石彌漫。臨帶兩河。頗以耕植蒲陶梨柰。其菓寔繁。時風寒。人躁暴。俗唯詭詐。公行劫盜。文字同瞿薩旦那國。言語有異。禮義輕薄。學藝淺近。

『西域記』に於ける此の記錄を讀んで、『魏書』卷百二西域傳に於ける朱居國の記事を見ると、『魏書』に所謂朱居國は玄奘の所謂斫句迦國に相當するものであることが自ら悟了せられ得る。

朱居國在于闐西。其人山居。有麥多林果。咸事佛。語與于闐相類。役屬嚈噠。

斯くの如く、于闐よりの方角も、其の地勢も、其の產物も、其の宗教も、兩者倶に一致

してゐるのであるから、朱居國は卽ち斫句迦國であることは疑ひない所である。而して『魏書』には咸く佛に事へて居ると記してあるから、法顯時代より西曆第六世紀の中頃までは、此の國に於ける佛教の全盛時期であつたに違ひない。然るに、玄奘がこの國の佛教狀勢を記して『淳信三寶。好樂福利。伽藍數十。毀壞已多。僧徒百餘人。習大乘教。』といふてをる所から推察を運らすと、西曆第七世紀の中頃に至つてはこの國の佛教は稍衰退の傾向を示してゐたらしい。既に玄奘が言つてゐるやうに、國人が躁暴でその俗は詭詐であつて、公に劫盜を行ふといふ風であつて見れば、佛教の感化が一般國民に行き渉つて居たとは言へない。蓋し之は多分性質凶悍にして佛法を信ぜず多く外神を奉じてゐた所の遊牧人種たる嚈噠の侵入を受けた結果であらう。又數十の伽藍の中すでに毀壞してゐたものが多いといふのであるから、玄奘當時の國王は佛教に對して特別の保護を加へなかつたやうであり、且又僧徒の數も法顯時代には千餘人あつたのに比して玄奘時代にはその十分の一にしか相當せないほどに減少してをる。が併し、當時なほこの國は純大乘教國たる面目を維持してゐて、十數部の大乘經典が完全に保存せられてゐたこと

は闍那崛多の傳へた所と同じであり、國內百餘人の僧徒は皆大乘教を學習してゐたのである。

因みに茲に一言すべきことは、玄奘が斫句迦に註して『舊曰沮渠』と錄してゐることである。唐の道世がその撰出に係る『法苑珠林』卷三十羅漢部に於て『于闐國南二千里沮渠國有三無學羅漢在山入定無數年來卓然如生至十五日外僧入山爲鬚髮』と記してをるのは、彼も亦『歷代三寶記』等に所謂遮拘迦國と玄奘の『西域記』に所謂斫句迦國との同一なることを知り、而も玄奘が斫句迦を舊には沮渠と稱へたといふ說に基いて、遮拘迦に代ふるに沮渠を以てしたのであらう。

然らば、玄奘が斫句迦の舊名を沮渠としたのは何故であらうか。堀學士は沮渠は西晉時代に姑臧卽ち今の凉州に據つてゐた蒙古種族の部將蒙遜の氏姓であつて、其の聲音が稍斫句(迦)に似てゐたから、玄奘は誤つてかく挿入したのであると斷定してをられる(『解說西域記』九八七頁)。けれ共、此の斷定はあまり早計ではなからうか。玄奘の博識を以てして斯る淺薄な理由で兩者を結合したとは何うしても思はれない。之には何等か根據のあることでなければならぬ。

『魏書』卷九十九には『胡沮渠蒙遜本出臨松盧水其先匈奴左沮渠遂以官爲氏』とあるから、玄奘の所謂沮渠は本來國名ではなくて、匈奴の官名であつたのを蒙遜がその氏名としたことは明かである。故に沮渠氏の先祖は漢代に於ける匈奴の一種族であつたのである。而してその種族から出た蒙遜は東晉時代に臨松盧水(今の甘州府南方の地)から起つて、河西の張掖(今の甘州府)に據り、五胡十六國の一つに數へられる北凉を建設したのである。その後、彼は南凉を敗り、姑臧を取つて、茲に都を遷して河西王と稱し、又西秦を侵し、宋の永初元年(西紀四二〇年)西凉を滅して、大にその威を振ふたのである。蒙遜は北魏の延和二年(西紀四三三年)に歿し、その子牧犍嗣立したが、數年の後北魏の大延五年(西紀四三九年)に至つて、北魏の太武帝の爲に亡ぼされたのである。爾後、牧犍の弟無諱は西鄯善(Lop Nor)を擊ち、又高昌(Turfan)を取つて此に據り、無諱の歿後は其の弟の安周が立つたけれども、北魏の和平元年(西紀四六〇年)に柔然卽ち蠕々のために攻め滅ぼされたのである。而してその後の消息は正史の上には現はれてゐないから知ることは出來ないのであるが、玄奘が斫

句迦國を舊には沮渠と稱したと傳へてをるのであるから、惟ふに柔然に破られた沮渠氏族は更に逃れて于闐の西方斫句迦の地にその居を定めたのではあるまいか。道世も亦この事を認めてゐたと見ゐて、彼は『法苑珠林』卷二十九に於て、玄奘の『西域記』より引用して于闐の事を錄して、更に斫句迦國に移つて『卽是沮渠處也』と註してをる。この註に依れば、斫句迦國が沮渠氏の住處であつたことは明かである。元來、沮渠氏は佛敎信者であつて、『法顯傳』に依ると法顯が西遊の際張掖を通過した時には張掖王――當時はなほ蒙遜の弑した段業が王位に在つたのであるが茲に所謂張掖王は蒙遜を指してをるやうである――は慇懃に彼を留めて檀越となつたといふことであり且又『梁高僧傳』卷二に於ける曇無讖傳に依ると『蒙遜素奉大法志在弘通』と錄してあつて、曇無讖(Dharmarakṣa 法豐)が罽賓(Kaśmīr)や龜茲(Kuchā)の諸國を經て姑臧に入り來つた時蒙遜は非帝に彼を優遇して、請ふて諸經を譯出せしめたのである。實に曇無讖が『大般涅槃經』を始めとして多數の大乘經典を譯出することの出來たのは、偏に沮渠氏保護の力であつた。その他、道龔、法衆、僧伽陀(Saṅghata 僥善)も亦張掖に於て蒙遜の需めに應じて各一部若しくは二部

の大乘經典を譯出してをる。而して支那譯經史上見過すことの出來ない沮渠京聲が蒙遜の從弟に當る優婆塞であつたことから、觀ても、沮渠氏と佛敎との關係の淺くないことが知られる。加之、蒙遜に次で王位に卽いた牧犍も亦佛敎信者であつたと見ゐて、彼は永和五年(西紀四三七年)に浮陀跋摩(Buddhavarman)に請ふて、凉州城內の閑豫宮寺に於て『阿毘曇毘婆沙論』六十卷を譯出せしめ、其の譯場に參與した義學僧が三百餘人あつたといふことである(『開元釋敎錄』卷四)。斯くの如く、沮渠氏は一般に奉佛の精神が篤くあつたから、斫句迦國へ移住した後と雖も、決して從來この地に榮ゐてゐた佛敎に害を加へるといふやうなことをせず、却つて益々之が保護の爲に盡力したのであるらしい。而も北凉に於て譯出せられた佛典八十二部の中、數部を除く外は、悉く大乘經論ばかりである所から察すると、沮渠氏は大乘佛敎を信奉してゐたに違ひないから、斫句迦に於ても、特に大乘敎に保護を加へた結果、この國は純大乘敎國となつたのであるらしい。

實に東方土爾其斯坦に於て大乘敎國として擧ぐべきものは、唯于闐と斫句迦と

の兩國のみである。而も純粹の大乘教國と稱すべきものは斫句迦ばかりである。然るに、支那へ大乘教典を輸入したのは、主として于闐國であつて、斫句迦から支那に將來せられた大乘經典、若しくは支那に來つた佛僧として經錄僧傳倶に一も其の名を傳へてゐないのは聊か怪むべきことではあるまいか。惟ふに、之は閣那崛多の言つたやうに此の國の王は只自國内に大乘經典を保存し、自國内に大乘學者を請入することにのみ汲々として、積極的方針を取らなかつたのに基いた現象であらうが、實際此の國から支那へ輸入せられた大乘經典でも、或は于闐國の名を以て渡來したのかも知れない。何分、于闐國は古來南道の要衝であつて、而も有名な美玉や桑麻や其の他五穀類を多く產出して東方土爾其斯坦に於ける工業上の中心地となり、富强國を以て其の名異域に轟いてゐたから、其の一小隣國なる斫句迦國より傳來したものも、于闐國の名の中に包括せられるといふことは隨分あり得可きことゝ信ずる。假令、支那の大乘經典は斫句迦のそれとは直接の關係はないとしても、既に法顯傳に於て此の國には千餘人の大乘學僧がゐたと記してあるやうに、餘程早くから大乘教が此の國に於て行はれてゐたのであるから、此の國の大

乘教と于闐のそれとの間には密接な交渉のあつたことは當然であらう。さすれば、支那の大乘教と斫句迦のそれとは關接的關係があつたと言はねばならぬ。

以上のやうに論述し來ると、支那土爾其斯坦に於ては于闐・斫句迦の兩國を除いては、古來大乘教が存在せなかつたやうに聞ゐるが、決して左樣な譯ではない。龜茲(Kucha)國の如きは、夙に『無量淸淨平等覺經』『菩薩修行經』『首楞嚴經』等の大乘經を傳譯した帛延や、初めて密教部の經典を將來し譯出した帛戸梨密多羅(Śrimitra)や〔次章參照〕將た又大品小品の般若經、並に龍樹提婆の諸論、其の他多種多樣の大乘經論を譯出した鳩摩羅什(Kumārajīva)などを出した國であつて、殊に羅什と時代を同じうした國王白純の如きは、羅什をして諸經を講說せしめ、大乘教に對して趣味を有してゐたやうであるが、玄奘の時代にはすでに龜茲國は全く小乘教國となつてしまつたと見ゐて、彼は『西域記』卷一の屈支(龜茲)國の條に『伽藍百餘所、僧徒五千餘人、習學小乘教說一切有部、經教律取則印度』と記して居る。其の後、西曆第八世紀の初期に西域を周遊した慧超も亦『此龜茲國足寺足僧、行小乘法』と傳へて居るから、此の土地の佛僧は矢張小乘教のみを修行してゐたことは爭はれない事實である。

また法顯傳に依ると、鄯善(Lop Nor)の如きは、隨分佛法が盛んであつて、國王は法を尊信し僧徒は四千餘人もゐたと云ふことであるが、之等の僧徒は悉く小乘學者であつて、尙又『法顯傳』に所謂烏夷國(『西域記』に所謂阿耆尼國)卽ち焉耆(Karashar)國は法顯時代も玄奘時代も共に小乘教國であつたことは法顯が『烏夷國僧亦有四千餘人。皆小乘學』と言ひ、玄奘が『阿耆尼國……伽藍十餘所僧徒二千餘人。習學小乘教說一切有部。經教律義既遵印度。』と言つて居ることによつて明瞭である。而して慧超も亦此の國の條に『足〻寺足〻僧。行小乘法』と傳へて居る。此の外、跋祿迦(姑墨Aksu)の如きも玄奘時代には伽藍數十僧徒千餘人あつたけれども、皆小乘教の說一切有部を學習し、羅什時代には幾分大乘教が行はれてゐたらしい所の疏勒(Kāshgal)卽ち玄奘の所謂佉沙國の如きも、玄奘當時には伽藍數百僧徒一萬餘人を有し、又羅什の大乘教師たる須利耶蘇摩(Sūryasoma)を出した所の莎車(Yarkand)卽ち玄奘の所謂烏鎖國の如きも、玄奘當時には伽藍十餘所僧徒殆ど一千人あつたけれども、孰れも皆小乘教の說一切有部の教義ばかりを學修してゐたのである。かやうに玄奘時代に於ては于闐及び斫句迦の東北地方も西北地方も咸く小乘教國のみであ

つたのに反して、此の兩國が古來大乘教國として異彩を放ち來つたのは如何なる理由に基いたのであらうか。

之は言ふまでもなく、闍那崛多の傳へた通り遮拘迦國の王が代々大乘教を敬重して、之に對して特別の保護を加へ、大乘學者は大に之を歡迎するに反して、異解者は之を國外に放逐し、努めて大乘經典を蒐集し、之を弘布せしめたのに依るのである。而して又于闐國の王も多く大乘教の尊信者であつたと見ゐて、『法顯傳』には于闐に於ける行像の狀況を叙せる中に、瞿摩帝伽藍の僧は是れ大乘學徒であつて王の敵重する所であると言ひ、『魏書』西域傳の于闐國の條に『俗重佛法。寺塔僧尼甚衆。王尤信尙。每設齋日。必親自灑掃饋食焉。』と錄してあり、玄奘も亦于闐國王は甚だ佛法を敬重するといふを傳へて居る。故に之等兩國が東方土爾其斯坦に於て、獨り大乘教を保存し得たのは全く國王の熱心な保護の力であると言ねばならぬ。

要するに、吾人は支那大乘教の母國として于闐國を記憶すると同時に、それよりも一層純粹な大乘教國であつた斫句迦國の佛教にも多大の注意を拂はねばならぬ。

第五節　于闐國の大乘教典

支那に於て譯出せられた大乘教典の重なるものゝ多くは、于闐國から將來せられたのである。今諸種の經錄・僧傳に基いて、支那譯大乘教典中、その原本の于闐國から輸入せられたと認め得べきものを列擧しやう。蓋し、之に依つて、關接的に于闐國に於て行はれてゐた大乘教典の種類を窺ひ知ることが出來るからである。

（×印は缺本）

華嚴部

菩薩十住經	一卷	西晉	祇多羅譯
×十地經	一卷	同	同人譯
×普賢觀經	一卷	同	同人譯
大方廣佛華嚴經	五十卷	東晉	佛馱跋陀羅譯
大方廣佛華嚴經不可思議境界分	一卷	唐	提雲般若譯
大方廣佛華嚴經修慈分	一卷	同	同人譯
大方廣佛華嚴經	八十卷	同	實叉難陀譯

大方廣入如來智德不思議經	一卷	唐	實叉難陀譯
大方廣如來不思議境界經	一卷	同	同人譯
×大方廣如來難思議境界經（前本と同本？）			
	一卷	同	同人譯
大方廣普賢所說經	一卷	同	同人譯

方等部

×普門品經	一卷	西晉	祇多羅譯
×如幻三昧經	二卷	同	同人譯
×彌勒所問本願經	一卷	同	同人譯
寶如來三昧經	二卷	同	同人譯
×維摩詰經	四卷	同	同人譯
×無所希望經	一卷	同	同人譯
×浮光經	一卷	同	同人譯
×如來獨證自誓三昧經	一卷	同	同人譯
×瓔珞經	一卷	同	同人譯
×照明三昧經	一卷	同	同人譯

弟子死復生經	一卷	宋	沮渠京聲譯
諫王經	一卷	同	同人譯
×菩薩誓經	一卷	同	同人譯
大乘造像功德經	二卷	唐	提雲般若譯
大乘入楞伽經	七卷	同	同人譯
×文殊師利授記經	三卷	同	實叉難陀譯
右繞佛塔功德經	一卷	同	同人譯
大乘四法經	一卷	同	同人譯
×大方廣不生不滅經	一卷	同	同人譯
×菩薩出生四法經	一卷	同	同人譯

般若部

放光般若波羅蜜經	三十卷	西晉	無叉羅・竺叔蘭共譯
光讚般若波羅蜜經	十卷	同	法護譯
×大智度經	四卷	同	祇多羅譯
勝天王般若波羅蜜經	七卷	陳	月婆首那譯
摩訶般若隨心經	一卷	唐	實叉難陀譯

法華部

妙法蓮華經提婆達多品	一卷	齊	達磨摩提譯

涅槃部

大般涅槃經（中後分）	二十八卷	北涼	曇無讖譯
×中陰經	一卷	宋	沮渠京聲譯

大乘律部

×菩薩正齊經	一卷	西晉	祇多蜜譯
×賢者律儀經	一卷	宋	沮渠京聲譯
十善業道經	一卷	唐	實叉難陀譯

大乘論部

大乘法界無差別論	一卷	唐	提雲般若譯
大乘起信論	二卷	同	實叉難陀譯

秘密部

×觀世音懺悔除罪呪經	一卷	齊	達磨摩提譯
智炬陀羅尼經	一卷	唐	提雲般若譯

諸佛集會陀羅尼經	一卷	唐	提雲般若譯
觀世音菩薩秘密藏神呪經	一卷	同	實叉難陀譯
妙臂印幢陀羅尼經	一卷	同	同　人譯
百千印陀羅尼經	一卷	同	同　人譯
救面燃餓鬼陀羅尼經	一卷	同	同　人譯
×離垢淨光陀羅尼經	一卷	同	同　人譯

以上の大乘教典の原本が于闐國から傳來したといふに就ては少しく説明を要する。祇多蜜(Gitamitra 訶友)提雲般若(Devaprajña 天智)實叉難陀(Sikshānanda 學喜)の如き于闐國の沙門が將來し譯出したものは、當然于闐國に行はれてゐたものと見られ得るが、于闐國人でない佛陀跋陀羅(Buddhabhadra 覺賢)曇無讖・沮渠京聲・達摩摩提(Dharmamati 法意)月婆首那(Upaśūnya 高空)等の譯出佛典の原本が于闐國から傳來したものと判定するには、相當の證權がなくてはならぬ。重複に渉る嫌ひはあるが、簡單にその證權を提示して置かう。

『梁高僧傳』卷二『開元錄』卷三に依ると、北印度の沙門佛陀跋陀羅が吳郡內史孟顗及び右衞將軍褚叔度の請ひに應じて、道場寺に於て、義熙十四年(西紀四一八年三月十日から着手して元熙二年(西紀四二〇年六月十日に譯了した『華嚴』前分三萬六千偈卽ち『大方廣佛華嚴經』六十卷(譯出した當初は五十卷であつたが後人が分つて六十卷としたのである)は、晉の沙門支法領が西域に赴いた際、于闐國に於て求め得た所のものであるといふことである。

同じく『梁高僧傳』卷二に依ると、中天竺の沙門曇無讖が玄始三年(西紀四一四年)から同十年十月二十三日までかゝつて姑臧に於て譯出した『大般涅槃經』四十卷の中、その前分十二卷は彼が本國中印度から賫したものであるが、其の品數不足のため、彼は西域に還つて之を探求し、遂に于闐國に於て之を得、更にその後分も亦彼が于闐に使を遣して索め得しめたものであるといふことである。その後、此の經は南朝に傳はつて、宋の文帝元嘉十三年(西紀四三六年)に慧觀・慧嚴は法顯が義熙十四年(西紀四一八年)に譯出した六卷本の『大般泥洹經』と對照して、之に修正を加へて、三十六卷本としたから、支那に於ては之を南本といふに對して、曇無讖所譯の『涅槃經』は北本と稱せられた。

尙同じく『梁高僧傳』卷二に依ると、北涼沮渠京聲は少時法を求めて于闐に至り、

瞿摩帝(Gomati)大寺に停住して修學したのであるから、彼が宋の孝建二年(西紀四五五年)に楊都竹園寺及び鐵山定林上寺に於て譯出した二十八部の經典の中、その多くは彼が于闐國に於て得たものであるに相違ないと思ふ。だから、彼が于闐の瞿摩帝大寺に於て天竺法師佛馱斯那(Buddhasena 覺將)から授けられた『禪法要解』『禪秘要治病經』各二卷、及び彼が于闐よりの歸途高昌に於て獲た『觀彌勒菩薩上生兜率天經』『觀世音觀經』各一卷を除く外、彼の譯出經典の大部分の原本は于闐國から將來したものとして差支はない。

『歷代三寶紀』卷十一に依ると、西域沙門達摩摩提が齊の武帝永明八年(西紀四九〇年)に楊都の瓦官寺に於て譯出した『妙法蓮華經提婆達多品』一卷及び『觀世音懺悔除罪呪經』一卷は沙門法獻が聖迹を巡拜せむと欲して、宋の元徽三年(西紀四七三年)に西域に往き、于闐に於て佛牙一枚舍利十五粒と共に得た所のものであるといふことである。于闐國から支那に傳はつた法華部に屬する經典は唯此の一卷のみであるが、前述したやうに、昔于闐の王宮には『法華』梵本六千五百偈あつたといふことであるから、于闐國には唐以前すでに完全な『法華經』の存在してゐたこ

とは明かである。

終りに『續高僧傳』卷二に依ると、中印度優禪尼(Ujjayani)の王子であつた月婆首那が陳の天嘉乙酉歲(西紀五六五年)に江州興業寺に於て翻譯した所の『勝天王般若波羅蜜經』七卷は、彼が梁の武帝太清二年(西紀五四八年)に突然出會ふたところの于闐國の沙門求那跋陀(Gunabhadra)の所持せるものを請ひ受けたのであるといふことであるから、此の般若部の經典も于闐國に行はれてゐたものと見て然るべきである。

以上年代順に列記したものゝ外、弘始六年(西紀四〇四年)に智猛と共に于闐を通じて印度に行つた寶雲の譯出して居る『佛本行經』七卷『新無量壽經』二卷『淨度三昧經』二卷『付法藏經』六卷の中や、又于闐に於て自ら涅槃經の中分を求め得た曇無讖の譯出して居る多部の大乘經典の中や、尙又于闐國王の質子として支那に來つて、唐の中宗景龍元年(西紀七〇七年)に出家を遂げに智嚴(本の姓名を鬱持樂といふ)が開元九年(西紀七二一年)に譯出した『說法決定業障經』一卷『出生無邊門陀羅尼經』一卷『師子素馱婆王斷因經』一卷『大乘修行菩薩行門諸經要集』三卷の中や、その他

西域諸國より于闐を通じて支那に來つた譯經僧の翻譯に係る三藏の中やなどには、多少于闐國と關係を有するものがあつたであらうと思ふが、今之を考定すべき資料がないから、先づ上に表示した佛典が主として于闐國に流行してゐたものであるといはねばならぬ。さすれば、于闐國には唐以前に於て諸部の大乘經典が完備してをり、『起信論』の如き重要な大乘論も行はれてゐたことは疑ふべからざる事實である。

于闐國にせよ、斫句迦國にせよ、其の國内に行はれてゐた各部多數の大乘敎典は主として西方土爾其斯坦、東北印度及び中印度地方から渡來したものであるらしい。最初、大乘敎典の成立した地方は東北印度であつたと見ゐて、彼の龍樹(Nāgārjuna)の如きは其の本國西天竺に於て學び得た三藏を以て滿足することが出來ずして、更に異經を求めて東北に往き、雪山中に於て老比丘より摩訶衍(Mahāyāna)卽ち大乘の經文を授けられて、大に樂んで研究したといふことである(『龍樹菩薩傳』)。元來、印度の東方は西方に比して自由革新の思想が熾んであつて、佛滅一百年後に

起つた吠舍離(Vaiśālī)結集の際、保守的嚴肅派の多數決に依つて、進步的自由主義を壓迫せられたのに反抗して、益革新思想を高めて、公然經典の取捨を爲し、字句を修正し、上座と全く分離獨立して經典の結集を試みた大衆部(Mahāsāṅghika)の徒は卽ち東方の佛徒であつた(Dīpavaṁsa, V. 31—9.)。西藏傳に依ると迦膩色迦王の時、脇尊者が東方より善知識の有せし稀なる經典を將來し、王は迦溼彌羅國に於て比丘首をして之を結集せしめたといふことである(Tāranātha; Geschichte d. Buddhismus, S. 59)。故に龍樹がその主著『大智度論』中に引用してゐる諸種の大乘經典は既に當時東北印度に於て成立し、多少流布してゐたことは明かである。かくて、東北印度から中印度並に西方土爾其斯坦に傳はつた大乘敎典が更に之等の諸地方から葱嶺を越ゐて斫句迦國や于闐國に賫されたのである。

玄奘は中印度地方と于闐國との間に早くから佛敎上の交通があつたらうとの想像を幾分確め得る傳說を傳へてをる。『西域記』卷十二に依ると、于闐の王城から東三百三十餘里を距つる媯摩(Bhīma)城——Bhīmāとは于闐地方に於て崇拜せられたものとして西藏の書に記載せられたる Śrī-Maladevī といふ女神のことであつて

(Watters; On Yuan Chwang, II. S. 303.)、此の地は宋雲の所謂捍麽(麽)、マルコ・ポロの所謂Pein と同じく、今のUzum-Tati に相當するとのことである(Stein; Ancient Khotan, PP. 452—7)、——に高さ二丈餘、靈應甚だ多く、時に光明を燭かす所の彫檀の立佛像があつたが、此の佛像の由來に就て玄奘が土人から聞き及んだ所に從ふと、この佛像は昔佛在世の時憍賞彌(Kausāmbī)國の鄔陀衍那(Udāyana)——或は優塡(Udena)——王の作る所であつて、佛滅後彼の國から空を凌ぎて此の國の北方なる曷勞落迦(Rallaka?)城中に至つたが、その城人邪見にして之を貴ばず、其の後此の國人が此の像を禮拜してゐる異容の羅漢を見て驚き、早速之を王に告げしに、王は沙土を以て此の異人を坌らしめたが、時に此の像を尊敬してゐた一人が羅漢を見て密に食物を與へたところが、羅漢が將に立ち去らむとする時、其の人に對してこれから七日間沙土を降らし、此の城を塡めて、遺るものなきやうにするから、早く免れる工夫をするがよいと告げて、忽ち去つた、そこで此の人は城に入つて此の事を具に親戚のものに告げたが、之を聞くもの皆嗤笑してゐた、然るに果して第二日から大風が忽然として發つて、穢壤を吹き去り、雜寶を雨らして衢路に滿ち、第七日夜宵分の後沙土を雨らして

城中を滿した、彼は豫て準備して置いた孔道から出で、東して此の國に趣き、媲摩城に止つた、彼が此の城に至るや否や、其の像も亦來つたから、卽ち供養して敢て移さなかつたといふのである。

これより先、宋雲が捍麽城の南十五里距つた處に在る一大寺に於て拜した所の佛像は正しく玄奘の言ふ所のものと一致して居る。玄奘は此の佛像の靈驗に就て、『凡有疾病隨其痛處金薄帖像卽時痊復。虛心請願多亦遂求。』といふて居るが、宋雲も亦『戸人有患以金箔貼像所患處卽得陰愈。』と記して居るから、其の同一なるものであることは疑ひない。然るに宋雲が此の像に就いて此の地の父老に聞いた傳說は玄奘のものと大に趣を異にして居る。彼の言ふ所に依ると、此の像は本南方から空に騰つて來たのであつて、于闐王は親しく之を見て禮拜し、像を載せて歸途に就いた所が、途中夜宿して居る間に忽然として像が見ねなくなつた、そこで人を遣して之を尋ねしめた所が、本處に還つてゐたものであるから、乃ち王は塔を起し四百戸を封じて灑掃に供へたとのことである。而して彼は又此の像は恒に東面して立つてゐて、西を顧るのを肯んせないといふてをる。此の佛像に奉納して

ある數千の懸綵幡蓋の中、姚秦の年號を記した一流の幡があつたといふことであるから、此の像は隨分昔から此の地へ傳來して居たものであるらしい。此の像が此の地を離れなかつたといふことは玄奘が勃迦夷城中にある佛の坐像に關する俗傳と趣を同じうして居るが、之は宋雲が之等處を異にせる傳說を混同したのではあるまいか。なほ又宋雲は南方から此の佛像が來たといふて居るが、しかし此の像は恒に東方に面して西方を後にして居るといふのであるから、此の佛像の本來の所在地は于闐地方より正南ではなくて西南であるといふことになりはすまいか。卽ち于闐より西南に當る印度本國を指したものではなからうか。斯く解釋すれば、玄奘が此の佛像の原在地に就て傳ふる所と一致する。

茲に驚く可きことは、スタイン氏が此の媲摩城卽ち現今の Uzun-Tati 及び Ulugh-Ziārat の探檢に際して、彼が村人から直接彼等が其の故地を棄てた原因に就て聞いた所の物語が、其の根本に於て玄奘の傳ふる所と全然一致して居ることである。其の話に依ると、一聖者が此の町の住人より輕侮せられて水を拒まれた、そこで彼は此の町を呪ふて、その破滅近きに在ることを豫言した、住民が此の豫言を嘲つて

ゐた間に、砂が空から降り出して、七日七夜止み間もなく續いて、遂に建築物の全部が埋めらるゝに至つたが、只聖者に尊敬を拂ふてゐた七人のみが玄奘の話とは異つて居る奇妙な方法によつてその生命を救ふたといふことである (Ancient Khotan. P. 460.)。スタイン氏の言ふ所に從ふと、東方土爾其斯坦を通じて、一般にタクラマカーン (Taklamakān) に於て埋められた古址に就て似通ふた俗話が傳はつて居たらしい、そして玄奘が媲摩城に於て尙それよりも一層古い城に就て聞いたところの物語が媲摩城そのものゝ遺物に移されたのであるらしいとのことである。尙玄奘の言ふ所に依ると、曷勞落迦城は其の當時すでに大推阜となり、其の寶物を發掘せむと欲して其の側に至ると猛風が發り、煙雲四方に起つて、道に迷ふたとのことである。故に此の城が現今の如何なる地方に相當するかは不明であるが、和闐州地方より北方の沙漠中に存してゐたに違ひない。

此の物語は如何なる程度まで信ずるに足るかは頗る判定に苦しむ所ではあるが、兎に角和闐の西北の地方に早くから中印度の憍賞彌國から佛の靈像が渡來してゐて、この地方が沙漠地方にありがちである所の沙雨の爲に埋沒せられた際、こ

の佛像を奉じて媲摩城へ逸れ來つたものがあつたと見て差支なからう。固より、鄔陀衍那王製作の佛像は玄奘當時憍賞彌國の城内の故宮中の大精舍に在つたといふことから考へると『西域記』卷五憍賞彌國の條、この傳説は全然虚構のものゝやうに見ゐるが、併し翻つて案ずれば、鄔陀衍那王が佛成道後九十日間忉利天に上られた時、佛を拜することの出來ないのを悲んで、栴檀を以て佛像を彫刻せしめたといふことは古代の佛教界に於ける有名な傳説となつてゐたのであるから、中印地方から于闐地方へ傳來してゐた佛の靈像にこの傳説を結び付けて、之を以て鄔陀衍那王の製作としたのではあるまいか。或は又古來憍賞彌國に在つた此の佛像を摸造したものが于闐地方へ賣らされたのかも知れない。要するに、斯く媲摩城に存してゐた佛像は、于闐地方と中印地方と早くから佛教上の交渉があつたことを洩してをるやうに思はれる。

更に又夙に大乘教の行はれてゐた西方土爾其斯坦地方と于闐地方と文化上の交渉のあつたことは、マカートニー(Macartney)氏の探檢の結果に依つて知ることが出來る。ヘルンレ氏の報告する所に從ふと、マカートニー氏は和闐に於て大夏風

の裝飾を施した陶器の一片、その他希臘佛教徒の裝飾法及び彫刻術の樣式を施した遺物を發見し、又希臘特有の樂器や神像を表はした印形などを發見し、尙又彼自ら『和闐附近に於て發見したる遺物は確かに希臘に由來する所のもの也。一八九七年五月に余はその町の露國商人に依つて希臘文字にて記せる貨幣及び古代風の美はしき彫刻ある印形の黄色の玻璃三片を示されたり。』と言つたといふことである(Hoernle; A Collection of Antiquities from Central Asia. J. A. S. B. Extra Number 1, 1899, Introd., XXXII.)。大夏(Baktria)その他希臘文化の行はれてゐた地方は卽ち大月支の領土であつたから、前章に於て述べた大月支の大乘教典も亦于闐國へ傳來したに違ひない。

以上論じた所に依つて、于闐及び斫句迦に行はれてゐた各部多數の大乘教典の大部分は西方土爾其斯坦及び中央・東北印度などから輸入せられたことは推察することが出來るが、其の中には幾分これ等の地方に於て出來たものがあるであらうと想ふ。固より、之は單に自分の推測に過ぎないのであつて、未だ充分に之を證

明するに足る資料は持つて居ないのであるが、茲にその證權の一端に供し得ると思はれる經文がある。

それは印度烏塲國(Udyāna)の沙門那黎提拏耶舍(Narendrayaśas)が隋の開皇五年(西紀五八五年)に譯出した『大乘大方等日藏經』護塔品『大方等大集經』卷四十五所收)中の一節である。

復以閻浮提內、于闐國中、水河岸上、牛頭山邊、近河岸側、瞿摩娑羅香大聖人支提住處、付囑吃利呵婆達多龍王、

抑、此の護塔品なるものは、佛が諸龍王に付囑せられた大聖人の支提(Caitya塔)及びその住處を指示したものであつて、印度地方に於ては、王舍城(Rājagriha)を始めとして、鞞奢利(Vaiśāli)迦毗羅婆須都(Kapilavastu)摩伽陀(Magadha)摩偷囉(Mayura)憍薩羅(Kōsala)等、その他震旦まで指定してある。ところが、何れも此の于闐に於ける塲所ほど詳細な地理的說明の加へられてある所はない。于闐以外の塲所は只地名が示されてをるばかりである。而して茲に所謂牛頭山(Gośirṣa)とはスタイン氏の論證せられたやうに、玄奘の所謂瞿室餞伽(Gośṛiṅga)山卽ち牛角山のことであつて、彼

は此の山が王城の西南を去る二十餘里の處にあつて、此の山の崖谷の間に一伽藍があり、又阿羅漢の住ずる巖窟があるといふ玄奘の『西域記』の記錄に基いて、此の牛角山を以て葡萄の產地として有名なウヂャト(Ujat)と稱する大邑に對して、和闐沃地の西南端に近い哈拉哈什河の東岸上に隆起せるコマーリ(Kolmāri)山のことであると斷定してをられる(Ancient Khotan, PP. 186, 189.)。さすれば、『大乘大方等月藏經』に所謂于闐國中水河岸上にある牛頭山とは卽ち現今のコマーリ山を指して居るのであつて、かの瞿摩波羅香(Gomaśilagandha)大聖人の支提及び住處に關する地理上の說明は實に正確なものであると言はねばならぬ。從つて斯る記錄は于闐の地理に精通して居るものでなくては、到底ものすることは不可能である。

尙又玄奘はこの山の石室に就て一つの物語を傳へて居る。

牛角山巖有大石室、中有阿羅漢、入滅心定、待慈氏佛、數百年間、供養無替、近者崖崩、掩塞門徑、國王興兵、欲除崩石、卽黑蜂群飛、毒螫人衆、以故至今、石門不開。(『西域記』卷十二)

この記錄に依ると、玄奘の時代よりも數百年以前から絕ねず供養して居るとい

ふのであるから、牛角山の石室に關する此の傳說は、隨分昔から存してゐたに相違ない。惟ふに、『大乘大方等月藏經』の中に牛頭山の邊、河岸に近い側に其の支提住處があると說かれてゐる瞿摩婆羅香大聖人は、玄奘の傳ふる所の牛角山の石室中に在つて滅心定に入り、彌勒菩薩の出現を待つて居るといふ阿羅漢のことであらうと想ふ。若し果して然りとすれば、この大乘經は于闐に於てこの傳說の生じた以後に成立したものであつて、而も于闐地方と頗る密接な關係を有するものであると斷言するに憚らない。固より、自分とても、前揭の瞿摩婆羅香大聖人支提住處に關する一節は、此の經の成立以後、何人かに依つて、挿入せられたものではあるまいかと思はないでもないが、假令之が後世の挿入に係るものであるとしても、その挿入は必ずや于闐地方に於てせられたのに相違ないから、此の經の原本は印度から渡來したものに更に此の地方に於て手を加へたものであることゝなつて、兩者の關係は依然斷絕しない。が併し、かやうに推察するよりも、寧ろ此の經は于闐地方に於て于闐國と關係のある偉才に依つて編まれたものであるから、上述の如く、于闐の地理に關する說明に根つて特に詳細で而も正確なのであらうと觀る方が

穩當ではあるまいか。若し此の經が于闐と特別の關係なくして成立したものであつたならば、かやうに于闐に限つて精確な地理的叙說を試みるべき筈もなく、又試みることも出來ない筈である。現に古來于闐國に於て最もよく完備してゐて、此の國に於て大成せられたものゝやうに見ゐる『華嚴經』でも、未だ交通の開けない古代に印度本國に於て成立した證據には、于闐國の有名な山の所在地を誤り傳へて居る。即ち實叉難陀譯の『八十華嚴』卷四十五の諸菩薩住處品には『疏勒國有一住處名牛頭山從昔已來諸菩薩於中止住』と說いてある。前說したやうに、牛頭山即ち牛角山が于闐國の山であることは明かであるのに、斯く疏勒(Kāshgar)國に屬せしめたのは、澄觀が既にその『華嚴疏鈔』に言つて居る通り、集經當時の交通未開の爲であつたらう。但し、支法領が于闐に於て求め來つて、佛陀跋陀羅が譯出した『六十華嚴』卷二十九の菩薩住處品には『邊夷國土有菩薩住處名牛頭山過去諸菩薩於中住』と說いてあつて、所謂牛頭山の所在地は明示してないが、その所在地たる此の地方を邊夷國と呼んで居る所から見ると、愈此の經は于闐地方に於て成立したものでないことが明瞭になる。然るに、かの『大方等月藏經』に於ては、于闐國

に限つて精確な地理的説明を加へて居るのであるから、此の經の成立と此の地方とは何等か密接な關係があつたに相違ない。

抑于闐地方は東西交通の要衝であつて、印度支那・イラン等の別趣の文化の集合地であつたから、夙に其の文明は開發して、西域文化の中心地となつてゐたのである。近來此の地方から發掘せられた古代の遺物を見ても、如何に此の地方の美術が進歩してゐたかゞ察せられる。而して西暦第三世紀の中頃以前より既に此の國は大乘教國として支那に知られて居り、唐代には『大乘法界無差別論』や『起信論』やなどの高尚な大乘論が行はれてゐたぐらゐであるから、此の國の思想界も亦大に發展してゐたに違ひない。從つて大乘的の佛典を創作するぐらゐの無名の天才も出たことであらう。已に述べたやうに、明河の撰んだ『補續高僧傳』卷一に依ると、宋の太宗の時、西域から獻じた『大乘祝藏經』は于闐の書體であつて、文義不正であつたが爲に焚棄せられたといふことである。この大乘經は餘程拙い述作であつたらしいが、兎に角此の記錄は于闐地方に於て作られた大乘經典のあつたことを證明するものであると見てよろしからう。故に支那に於て譯出せられた大

乘經典の原本中には多少此の地方に於て出來上つたものもあつたであらうと想ふ。かの『賢愚經』は固より大乘教理に關係したものではないが、『出三藏記集』卷九所收の同經記に依ると、之は印度で編輯せられたものではなくて、曇學威德等の支那沙門が北魏の時代に佛典を求める爲めに西域に赴き、于闐の大寺に於て執行せられてゐた般遮于瑟 (Pañcha-parisad) 即ち五年大會に於ける經律の講説を聽記して、高昌に還つて編輯したものであるといふことであるから——『歴代三寶記』卷九並に『大唐內典錄』卷三の所傳に從ふと、此の經は曇學が于闐に於て其の梵本を得、高昌に於て威德と共に譯したのであるといふことであるが、經記の説の正しいことは言ふを俟たない——此の經は于闐國に於て成立したものと觀て差支はない。斯樣に種々の事情から考へてみると、『大方等月藏經』や『大乘祝藏經』やの樣に、于闐地方に於て成立した大乘經典が多少あつたであらうとの推察は、あながち空想ではないと信ずる。

余は大乘經典の成立地としては、于闐よりも寧ろ其の西鄰の純大乘教國たる斫句迦に一層多くの注意を拂つてをるのであるが、未だ以て積極的證明となるべき

何等の資料に接することが出來ないから、之は將來の研究に俟つの外はない。

第五章　龜茲國の佛教

第一節　龜茲國の佛教傳來時期並に其の佛典

龜茲國は支那の古記錄に於ては、丘慈・歸慈・丘茲・邱茲・屈茨・苦叉(俱支)・曇・屈茲・屈支など種々の文字を以て表はされてゐて、古來西域地方に於ける鐵器の產地として、有名な國である。故に道安の『西域記』にも『屈茨北二百里有山。夜則火光。晝日但煙。人取此山石炭。冶此山鐵。恒充三十六國用。』(『水經注』卷二引用)と記してある。而して、此の國が現今の庫車(Kucha)地方に相當することは今更言ふまでもないが、其の領域は唯單にKucha地方に止らず現今のSairamや其の他の地方に及んでゐたのである。固より、其の勢力範圍は時代に伴ふて異つて居るが、三國時代から北魏の時代にかけては、姑墨(Aksu)溫宿(Uch)尉頭(溫宿國より西三百里距つた國であるといふことであるから、現今のPaiPai地方ではなからうか。)などの諸國皆此の國に役屬してゐたのであつて『魏略』西戎傳『魏書』西域傳、古來龜茲國は北道に於ける盛大な國であつた。

龜茲國の佛教に就て最初吾人の知りたいことは、此の國へ初めて佛教の傳來した時期である。

『阿育王息壞目因緣經』の中には、阿輸迦王が其の子法益(Dharmavardḍhana)卽ち鳩那羅(Kuṇala)に讓らむとした彼の領土の一部の中に龜茲國の名が示されて居る。若し此の傳說が歷史的事實であるとすれば、龜茲國は佛敎の大保護者たりし阿輸迦王の時代に於て、すでに印度と密接な關係があつて、西曆紀元前第三世紀の中頃に幾分印度と佛敎上の交涉があつたに相違ないと推察し得られる。此の傳說は早くから北印度地方に行はれてゐたものと見ゐて、月支國より來つた支婁迦讖は西曆第二世紀の中頃に、旣に此の經典を傳譯して居る。又玄奘の如きも『西域記』卷三の咀叉始羅の條に於て、阿育王の太子が繼母の奸計に陷つて、此の地に於て、その眼を抉り去つた顚末に就て詳說して居る。併しながら、此の傳說は畢竟小說的物語に過ぎないのであつて、歷史的事實としては、殆んど採るに足らぬ。從つて、此の傳說に基いて、阿育王時代から印度と龜茲國との間に佛敎的交涉があつたなどと推定するとは出來ない。此の外、直接に龜茲國佛敎傳來の時代を告ぐる確實な資料が絕ゐてないやうであるから、斯る重要な問題も、此の國と支那との佛敎的交涉に立脚して、解決を求むるより外に道がない。

龜茲と支那との佛敎的交涉を論ずるに先立つて、西域譯經僧中白(帛)姓を有する人の本國に就て一言して置く必要がある。西域佛僧にして帛姓を冠するものは帛延と帛尸梨蜜多羅(Śrīmitra 吉友)とである。この兩人は僧傳にも經錄にも只西域人とか或は何許の人なるかを知らないとか記してあるが、余は確かに彼等兩人は龜茲國の人であると信ずる。

『魏書』西域傳の龜茲國の條に『其王姓白』とあるが、これを諸正史に依つて檢して見ると、果して左樣であつて、『後漢書』に依れば後漢の和帝永元三年(西紀九一年)西域長史班超が月氏を破つて初めて龜茲を降し、遂にその王尤利多を廢して元龜茲の侍子であつた所の白覇を立てゝ王と爲したといひ、又後漢の安帝延光三年(西紀一二四年)に班超の子班勇が西域を征服した時の龜茲王は白英と稱し、『晉書』に依れば晉の武帝大康年代(西紀二八〇—九年)に於ける龜茲王は白山と呼び、又符堅の將呂光が攻め殺した龜茲王は白純と言ひ、更に『魏書』に依れば呂光が白純に代つて立てた龜茲王は白震と稱し、尙『隋書』並に『北史』に依れば隋の大業中(西紀六〇五—一六年)に使を遣して隋に奉獻した龜茲王は白蘇尼咥王と名け、尙又『唐書』

には開元七年(西紀七一九年)に死んだ龜茲王は白莫苾と稱し、開元九年(西紀七二一年)六月に使を遣して馬及び狗を献じた龜茲王は白孝節と記されてをる。斯くの如く龜茲國に於ては古代からその王族は白といふ姓を襲ふたのである。今『梁高僧傳』卷二に於ける帛尸梨蜜多羅の傳に依れば、彼は國王の子であつて、當に王位を繼承すべき身であつたが、之を弟に讓つたといふことである。國王の子であつて、而も帛姓を冠する西域人といふことから推察すれば、彼を以て龜茲國人と考定しても決して不當ではあるまい。現に『出三藏記集』卷七に收められてある『首楞嚴後記』に依れば、成安(和は誤)三年(西紀三七三年)に涼州內正聽堂講露軒下に於て月支國の優婆塞支施崙が『須賴經』『首楞嚴經』『上金光首經』等を誦出した際、これが翻譯の任に當つた帛延といふ人は歸慈王の世子であつたといふことである。さすれば、魏の甘露三年(西紀二五八年)に洛陽白馬寺に於て大乘方等部に屬する『無量淸淨平等覺經』二卷及び小乘部に屬する『除災患經』一卷を譯出した沙門白延も亦龜茲國人であることは疑ふべきでない。『開元錄』卷四に於ては、魏の時代の白延と晉の時代の帛延とは全く別人として取扱ふてあるが、一般に帛も白も同一に用

ゐられてをるから兩人は同名である上に、其の翻譯經典も同じものが尠くないから、或は別人でないかも知れぬ。併し兩者の間にはあまり年數が距り過ぎてをるから、同人と見るのも穩當でない。惟ふに『首楞嚴後記』の筆者が支施崙の譯出經典の重なるものが魏の代の白延の譯出したものと同じである所から斯る誤記を爲したのではなからうか。されど之は單に想像に止つて何等の證據のあるといふ譯ではない。記錄の上に於ては明かに別人となつてをるのであるから、時代を異にして同じく龜茲國から來つた同名の人と見て置いてよろしからう。

又『出三藏記集』卷七に收めてある『阿維越致遮經記』に依ると、晉の武帝太康五年(西紀二八四年)十月十四日に沙門法護が譯出した『阿維越致遮經』(『不退轉法輪經』)の梵本は、彼が燉煌に於て、龜茲の副使羌子侯より與へられたものであるといふことであり、尙又『出三藏記集』卷八に收めてある『正法華經後記』に依ると、太康七年(西紀二八六年)八月十日に法護が『正法華經』を譯出した際、天竺の沙門竺力と共に、參校の任に當つた帛元信は、矢張龜茲國の居士であつたといふことである。斯くの如く、西曆第三世紀の中葉から、龜茲國の佛僧が支那に來つて、經典を傳譯し、

又龜茲國の顯要の地位に在る官吏が、自ら燉煌まで佛典を賫して、之を沙門に與へたばかりでなく、龜茲國の居士が支那に來つて、佛典翻譯の聖業を助けたといふやうな事實から考へて見ると、龜茲國の佛教は第三世紀の中頃までには、餘程隆盛に赴いてゐたことは想像するに難くない。而も、『魏書』の西域傳に於ける龜茲國の條には、其の王は白を姓としたと錄してあるから、白延にせよ、帛延にせよ、帛元信にせよ、皆龜茲國の王族の人であつたに違ひなく、且又西晉の永嘉中(西紀三〇七——三一二年)支那に來つて、建初寺に於て、初めて密教の經典を傳譯した龜茲國沙門帛尸梨蜜多羅(Śrīmitra 吉友)の如きは、其の傳記に依れば、確かに國王の子であつたのであるから、龜茲國の佛教は上流社會、殊に王族の間に大勢力を有してゐたことは明かである。かやうに、王族の沙門居士が續々支那へ傳道に出かけたのは、他の異教徒から壓迫を蒙つた爲ではあるまいかとも想はれるが、史上には斯る事實を傳へてゐないから、矢張これは龜茲國に於ける佛教徒の傳道熱が熾んになつた結果であると見るのが當然であらう。若し果して然りとすれば、他國へ傳道師を出すほどに、此の國に於ける佛教が其の根柢を固めるには、隨分長い年月を要したに違ひ

ない。之を支那佛教史上に徵すれば明瞭であつて、後漢の明帝永平年中に佛教が渡來してから以後二百餘年間は、支那佛教界は西域佛僧の獨舞臺であつて、支那人は佛教に對して、全然受動的態度を保つてゐた。漸く西暦第三世紀の中頃に至つて、只一人の朱士行を出したが、眞に支那人にして佛教の爲に積極的自發的活動を試みるに至つたのは、西暦第四世紀に出世した道安・慧遠・法顯以後のことに屬する。同より、支那と龜茲とは風俗民情も異り、文化の程度も同じくないから、佛教を受容し、玩味し、宣傳するに至る時期の遲速に就て、一概に論ずることは出來ないが、支那の如きは、夙に佛教の空論と似通ふた老莊の學說が行はれてゐたのみならず、其の國民道德の基礎となつてゐた儒教も亦佛教の道德說と共通點を有してゐたにも拘らず、其の國民が佛教の爲に進取的活動を演ずるやうになるまでには、長い年月を經過したのであるから、支那よりも一層文化の程度の低い龜茲國に於て、當國から他國へ佛教の弘布を試みるやうな沙門や居士を出すに至つたほど、佛教の地盤が堅牢になるには、支那に於けるよりも一層多くの歲月を要したことであらう。凡そ特別の事情のない限り、一新宗教が一國民の信仰を受けるやうになることで

さへ、短日月の能くする所でないのであるから、まして佛教の如き高遠な義理を有する宗教が、新たに他の國民によつて、會得せられ、遵奉せられて、遂に信仰のあまり、身命を賭して、遙か異域に進入して、其の教法を傳へるやうな熱誠な教徒が續々輩出するといふやうな立派な果實を結ぶに至るには、其の國に初めて其の宗教の種子が蒔かれた時から、餘程多くの年代を經過せなくてはならぬ。

更に他の方面から觀察しても、龜茲國へは支那へよりも寧ろ早く佛教が傳來すべき筈であることが分る。抑、龜茲國は南道に於ける于闐(Khotan)國の如く北道に於ける要衝であつて、大月氏・安息・康居若しくは印度などの諸國と支那との間を往復するもので、北道を取るものは、是非とも此の國を通過せなくてはならぬのである。『魏略』の西戎傳などの記事に依ると、大月氏と支那とは紀元前から多少佛教上の交渉が行はれたやうであるから、大月氏國の佛教徒にして此の國を經由したものは、幾分佛教上の消息を龜茲國人に傳へたことであらう。加之既に紀元前に迦濕彌羅・健陀羅地方から佛教が輸入せられてゐたらしいところの于闐・疏勒などゝ此の國とは、漢時代より政治上の交渉があつて、往來頻繁であり、現に『後漢書』班超

傳に依ると、明帝永平十六年(西紀七三年)に龜茲王が疏勒を攻め破つて其の王を殺し、龜茲國人の兜題といふものを立てゝ、其の國王と爲したといふほど、密接な關係があつたのであるから、夙に此の方面からも佛教が入り來るべき筈である。要するに、地理上の關係から考へて見れば、支那よりも一層早く此の國へ佛教の渡り來るのが、當然であるやうに思はれる。故に、龜茲國へ佛教の傳來した時期は、支那佛教渡來の時期、卽ち後漢の明帝の時代と殆んど同時であるか、若しくは寧ろそれより以前のことでなければならぬと推察せざるを得ない。

次に、龜茲國には如何なる種類の佛典が行はれてゐたかを檢べて見やう。之を檢べる方法としては、此の國から支那へ齎らされた佛典を探るより外はない。最初、此の國から支那へ傳へられた經典は、沙門白延の將來したものであつて、彼は前述したやうに、方等部に屬する大乘經典四部と、小乘教に屬する經典一部とを譯出した。

西晉惠帝の代(西紀二九一——三〇六年)に法立と共に四部十二卷の經典を譯出し、

法立の歿後、自ら四十部五十卷の佛典を譯出したと傳へらるゝ法炬は『開元錄』卷二)一般にその氏族は分らないと言はれてゐるが、『出三藏記集』卷九に收めてある『漸備經十住胡名並書叙』の中に『帛法巨亦是博學道士』と記されてをるところの法巨と同一人ではあるまいか。若し果して然りとすれば、法巨の上に帛姓を加へてあるから、彼は多分龜茲國人か、さなくば龜茲國に關係のある人であらうと思はれる。之は單に憶說に過ぎないが、其の譯出經典の種類を見ると、龜茲國から將來せられたものとして、決して不都合はないやうである。彼が法立と共譯したものゝ中、大乘經典としては、方等部に屬する『大方等如來藏經』一卷があるばかりで、其の他の三部は皆小乘經典である。更に彼自ら譯出したものを查べて見ると、其の大部分は阿含部に屬する小乘經典であつて、大乘經典としては僅かに方等部に屬する『優塡王經』『前世三轉經』『阿闍世王受決經』『灌洗佛形像經』(各一卷)等の數部あるに過ぎない。之等の經典は先きに白延が龜茲國から賫したものと其の種類に於ては殆ど同一である。さすれば、法炬の譯出した經典は龜茲國に關係のあつたものと見て差支ない。唯彼の譯出したものゝ中に阿含部の經典の數が頗る多い

のは聊か怪しいやうに想はれるが、龜茲國に於ては古來大乘學が一方に行はれたと同時に、他方には小乘敎が勢力を占めてゐたのであるから、從つてこの國人が多數の小乘經典を譯出するのは當然のことである。夙に小乘學が龜茲國に於て流行してゐたことに就ては、後に論證する。尙同じく惠帝の時代に大乘方等部に屬する『菩薩逝經』一卷『菩薩修行經』一卷『嚴淨佛土經』二卷『大乘如來藏經』一卷『郁伽羅越問菩薩經』一卷『等集三昧經』一卷『惟逮菩薩經』一卷『如來興顯經』一卷等、及び秘密部に屬する『無量破魔陀羅尼經』一卷『檀特陀羅尼經』一卷、その他阿含部の經典を加へて、十六部十八卷の經典を譯出したと傳へられてをる白遠(字法祖)は河內(今の河南省懷慶府河內縣)の儒者萬氏の子であつたが、白姓を冒してをる所から觀ると、彼は確かに龜茲國人を師と仰いだのに違ひないから、彼の譯出に係る上揭の經典中には龜茲國に關係のあるものゝ存することは疑ひのない所である。併し今その中の何れが龜茲國と關係のあるものであるかを明かにすることの出來ないのは遺憾である。

先きに一言して置いた帛尸梨蜜多羅は、呪術に長じてゐて、其の靈驗が著しかつ

たといふことである。彼は建初等に於て、『大灌頂經』十三卷(九卷)『大孔雀王神呪經』一卷『孔雀王雜神呪經』一卷を譯出して、初めて支那人に密敎の經典を紹介し、呪法を傳授したのである。而して彼は龜茲國から來つた人であるから、西曆第四世紀の初期以前より既に龜茲國に於ては密敎が行はれてゐて、之を專修する高僧をさへ出すほど盛んであつたことは、蔽ふべからざる事實である。なほ、彼は梵唄に妙を得てゐたといふことであるから、當時龜茲國の佛敎は形式の上に於ても可なり發達してゐて、決して幼稚なものではなかつたことも推測するに難くない。

東晉建元二年(西紀三四四年)に龜茲國に於て生れた有名な鳩摩羅什究摩羅耆婆Kumārajīva童壽)の傳記並に翻譯事業に就ては『藝文』第一年第九卷に於ける拙稿『鳩摩羅什の研究』の中に詳說して置いた。彼は七歲の時出家して、九歲に及んで母に伴はれて罽賓(迦濕彌羅地方)に赴き、盤頭達多(Vandhudatta)に師事して雜藏中阿含長阿含等の小乘經典を授けられ、十二歲に至つて、又母に携へられて本國に還る途中、沙勒(疏勒)に於て阿毘曇六足諸論並に增一阿含を誦して備さに其の妙義に達し、尙此の時大乘學者たる須利耶蘇摩(Sūryasoma)に從ふて『阿耨達經』を說き聞かされて、

初めて陰界諸入皆是れ眞空無相なるを悟り、更に廣く大乘の要義を索めて、『中論』『百論』『十二門論』等を受誦し、十二年間外國に在つて學修して、本國へ還つたのであるから、彼が支那に來つて、弘始四年(西紀四〇二年)から同十五年まで、卽ち十二年間に譯出した三百餘卷の經律論は、悉く龜茲國に於て行はれてゐたものと斷言することは出來ない。併し、彼が龜茲國に還つて王新寺に住してゐた時、寺側の故宮中に於て『放光般若經』を得て、初めて之を披讀し、二年間廣く大乘諸經論を誦して、其の秘奧を洞觀することを得たと傳へられて居るから、當時龜茲國に於ても矢張般若部の經論が多少存在してゐたのであつて、羅什の譯出した大品小品の『般若經』『金剛般若經』『仁王般若經』『大智度論』などの中には彼が其の本國に於て索め得たものもあるに違ひない。羅什の翻譯經典の中最も多くの部數を占めてゐるものは、大乘方等部に屬する經典であつて、『菩薩藏經』『善臂菩薩經』『須摩提菩薩經』『自在王菩薩經』『莊嚴菩提心經』『維摩詰經』『大樹緊那羅經』『思益經』『持世經』『諸法無行經』『文殊師利問菩提經』『首楞嚴經』『不可思議光菩薩所問經』『華手經』『千佛因緣經』『大善權經』『大方等大集經』(三十卷或は二十四卷)『阿彌陀經』『彌勒成佛經』『彌

勒下生經』等殆んど三十部に達せむとしてをるが、方等部の經典は早くから龜茲國に傳はつてゐたやうであるから、之等の經典の大部分は龜茲國に於て行はれてゐたものであらう。此の中に彌勒菩薩並に阿彌陀佛に關する經典があり、尙又羅什が『十住婆娑論』をも譯出して居る所から察すると、當時龜茲國に於ては幾分淨土思想が流布してゐたらしく想はれる。又これより以前から龜茲國に於ては密敎が可なり發展してゐたことは尸梨蜜多羅の條に述べて置いたが、羅什も亦『摩訶般若波羅蜜大明呪經』『雀孔王呪經』『善信摩訶神呪經』の三部の秘密部經典を譯出して居るから、龜茲國に於ては當時に至るまで密敎が行はれてゐたやうである。其の後引き續いて此の國に密敎が行はれてゐたか何うかは疑問であるが、唐代に至つて復此の國から二部の密敎經典が將來せられた。それは卽ち龜茲國城の西門外に在る蓮華寺に居つた勿提提羼魚蓮華精進)の譯出した『十力經』『宋高僧傳』卷三)と、龜茲國沙門若那が崇福寺の僧普能に授けた『佛頂尊勝陀羅尼別法』『續藏』第一輯第三套第四冊)とである。之に由つて觀ると、唐時代には龜茲國の佛敎界も他の西域諸國のそれの如く、印度に於て勃興した密敎の影響を蒙つて、呪法が旺ん

になつたのであるらしい。更に羅什の翻譯經典中、最も部數の少いものを探ると、華嚴部及び涅槃部に屬する大乘經典であつて各一部しか存してゐない。前者に屬するものは『十住經』であり、後者に屬するものは『集一切福德三昧經』である。固より彼の譯出した『佛垂般涅槃略說敎誡經』『遺敎經』は、法身常住の思想を漏してゐる大乘涅槃說に接近してゐるが、普通に之は小乘部に編入せられてゐるから、今之を加へぬこととした。而して、此の兩部の經典は羅什に至つて初めて傳譯せられたのであつて、彼以前には龜茲國から一部も傳來せなかつた。從つて此の二部の經典も龜茲國に行はれてゐたものではなくて、羅什が遊學の際、他國に於て得たものであらう。法華部の經典も亦羅什は『妙法蓮華經』一部しか譯出してゐないが、此の部に屬する經典は龜茲國に於て早くから多少存在してゐたやうである。何となれば、前述したやうに、西曆第三世紀の末龜茲國の副使羌子侯が法護に與へた『阿維越致遮經』は法華部に屬するものであり、且又法護が『正法華經』を譯出した際、參校の任に當つた元信は龜茲國の居士であつて、參校の任に當るくらゐであるから、彼も亦『法華經』に就ては門外漢でなかつたらしいからである。之を要す

るに、龜茲國に於て行はれた大乘經典は主として方等部に屬するものであつて、就中寶積部のものが最も多く、秘密部や法華部に屬するものも之に次で流行してゐたやうである。

以上の外、羅什は『坐禪三昧經』を始めとして、『禪秘要經』『禪法要解』『思惟要略法』等の禪經を翻譯して居るが、最初のものは、彼が究摩羅羅陀(Kumāralabdha)婆須蜜(Vasumitra)僧迦羅叉(Saṅgharakṣa)等の數人の諸論師の禪要中から抄集して成つたものであり、其の他の禪經は彼が禪の隆盛であつた罽賓に留學中に學び得たものであるらしい。固より龜茲國に於ても、羅什以前に禪經が行はれてゐたかも知れないが、羅什までは龜茲國から禪に關する消息が些しも傳はつてゐないから、斯く推察せざるを得ない。境野哲氏は支那に於ける所謂達磨禪の一源泉を羅什譯出の『坐禪經三昧經』に求めて居られるが(『支那佛教史綱』第八章「禪の由來」參照)、龜茲國に於ても、羅什の學系から發展したものか、何うかは分らぬが、其の後達磨禪に似通ふた法を實行した人があつたやうである。梁の寶唱の撰した『名僧傳』第二十五には、次のやうな記錄が存する。

法惠。本姓李氏。高昌人。少好射獵。酣酒弦歌。其婦美艷。一國無雙。豪富子弟。爭與私通。惠他日出遊。爲豪富所打。友人報語。惠自思惟。已有大力。必當見殺。避往龜茲。乃願出家。貧無法服。外國人死。衣以好衣。送尸陀林。辭訣而反。惠隨他葬。家人去(後?)。彼剝死人衣。遇尸鬼起。相戢臾更爲上下。凡經七反。惠率獲勝。剝取衣裳。貨得三十。以爲法服。仍得出家。修學禪律。苦行絕群。蔬食善誘。心無是非。後還高昌。住仙窟寺。德索既高。尼衆依止。稟其誡訓。唯都郎中寺馮尼每謂惠曰。阿闍梨未好。可往龜茲國金華寺帳下直月間。當得勝法。惠信尼語。往至龜茲。到見直月。直月歡喜。呼進房內。以蒲陶酒一斗五升。服令其飲。惠大驚愕。我清淨久。本來覺法。翻飲非法之藥。苦執不肯。直月急推令去。惠卽退思。遂不敢違。剩便頓飲盡。醉悶而臥。直月鎖房。乃更餘行。及惠酒醒。追自拔惱。我忽犯戒。悔過自責。槌打身體。欲自害命。於此少時。得第三果。直月還問曰。得果。後還高昌。大弘經律。道俗歸敬。頂動鄉邑。齊永元年無疾坐亡。手屈四指云。(弟子惠化所遣)

齊の永元といふ年號は西紀四九九年と其の翌年との二年間續いたものであるから、龜茲國の金華寺に居つた直月は西曆第五世紀の中頃の人であらう。彼が法惠をして悟道に入らしむるに常規を超越した奇拔な方法を採つた所は全く禪的

である。之が若し羅什の宣布した禪經に由來するものであつて、當時龜茲國に於て、此の種の禪風が行はれてゐたとすれば、支那に於ける達磨禪と對照して、頗る興味ある現象である。

最後に、龜茲國に於て行はれた律に就て一言しやう。羅什以前には龜茲國から何等の律も傳譯せられてゐないから、古來此の國には如何なる種類の律が行はれてゐたかを知ることは出來ぬ。羅什は『梵網經』を始めとして、『清淨毘尼方廣經』『薩戒本』『佛藏經』『舍利弗悔過經』『文殊悔過經』等の大乘律を譯出してをるが、果して之等の律が實際龜茲國に於て用ゐられてゐたか、何うかは疑はしい。が併し羅什は諸國に遊學して本國へ還つた以後、秦將呂光に伴はれて姑臧に來るまで、二十餘年間は、國王白純の優遇を受けて、本國に於て專ら大乘諸經論を講說してゐたのであるから、彼が長安に於て譯出した三藏はすでに其の本國に於て宣布し終つたものであらう。從つて彼の譯出に係る佛典の中には、彼によつて初めて龜茲國へ傳へられたものも少くないだらうが、之等とても、彼の講說に依つて、龜茲國人の間に弘められたことであらうから、彼の譯出佛典は皆當時龜茲國に於て行はれてゐ

たものと見て可なりであらう。さすれば、之等大乘律も亦此の國人の一部の間には採用せられてゐたに違ひない。而して龜茲國には之等大乘律の外に薩婆多部(一切有部 Sarvāstivādas)の小乘律が行はれたのである。僧祐の經錄などには羅什が『十誦律』五十八卷を譯出したと記されてをるが、此の梵本は龜茲國から將來せられたのではなくて、最初罽賓の沙門弗若多羅(Puṇyatāra)が長安の中寺に於て、此の梵本を誦出したのを羅什が晉文に譯したのであるが、未だ三分の二ほどしか進捗せない中に、突然弗若多羅が死んだものであるから、其の後廬山の慧遠の配慮によつて、曇摩流支(Dharmaruci)が其の殘部を羅什と共に譯し、其の後更に卑摩羅叉(Vimalāksha)が之に三卷を附加して、六十一卷本と改めたのである。しかしながら、嘗て卑摩羅叉は罽賓國から龜茲國に來つて、專ら『十誦律』を弘めたのであつて、羅什の如きも、彼がなほ本國に留つてゐた時、卑摩羅叉に從ふて、『十誦律』を學修したのであるから、當時龜茲國には『十誦律』が弘まつてゐたに違ひない。故に羅什は彼自ら『十誦比丘戒本』一卷を傳譯してをる。龜茲國の戒律に就て吾人の特に注意を拂ふべきことは、此の國から初めて支那へ完全な比丘尼の戒本が齎されたことであ

る。『出三藏記集』卷十一に收めてある『關中近出尼二種壇文夏坐雜十二事並雜事共卷前中後三記』の中に次のやうな記事がある。

卷初記云。太歲己卯鶉尾三歲(東晉孝武太元四年西紀三七九年)十一月十一日。在長安出此比丘尼大戒。其月二十六日訖。僧純於龜茲國佛陀舌彌許得(?)戒本。曇摩侍傳。佛念執梵。慧常筆受。

卷中間尼受大戒法後記云。此土無大比丘尼戒文。斯一部僧法久矣。吳土雖有五百戒比丘尼。而戒是覺歷所出。尋之殊不似聖人所制。法汰道林聲皷而正之。可謂匡法之棟梁也。法汰去年來令外國人出。少許復不足。慧常凉州得五百戒一卷。直戒戒復之似人之所作。其義淺近。末乃僧純曇充拘夷國來。從雲慕藍寺於高德沙門佛圖舌彌許得此比丘尼大戒及授戒法。受坐已下至劍慕法。遂令佛圖卑爲譯。曇摩侍傳之。乃知眞是如來所制也。

僧純が龜茲國に於て獲た所の『比丘尼戒本』も亦薩婆多部に屬するものであることは、『歷代三寶記』卷八『開元釋敎錄』卷四に記載せる竺佛念釋出の佛典中に『僧純於拘夷國得梵本。佛念爲譯。文繁。後竺法汰改正之』といふ注を加へたる『十誦比丘

尼戒所出本末』一卷が存することに依つて明白である。僧純及び曇充に此の十誦比丘尼戒本を授けた高德沙門佛圖舌彌が龜茲國の敎界の於て占めてゐた地位と勢力とが明かになれば、當時卽ち西曆第四世紀の中頃には龜茲國に於て如何に薩婆多部の律が盛んに行はれたかゝ分る。佛圖舌彌の事に就ては後に詳說する。

第二節　羅什時代の龜茲國佛教狀勢

支那に於て、龜茲の國名を表はすに種々の文字を用ゐたことに就ては、本章の劈頭に於て一言して置いた。之に就て吾人の注意すべきことは、支那に於ては前に掲げた數種の異形の外、拘夷といふ文字を以て龜茲に相當せしめる場合のあることである。拘は普通Kouといふ音を有する文字であるが、屢々Kuといふ音を表はす場合に用ゐられることがあつて、其の一例を擧ぐれば、Kushinagaraといふ地名を寫すに拘尸那掲羅或は拘夷那竭等の文字を以てして居る。だから、拘の音は玄奘の所謂屈支の屈や現今所謂庫車の庫に相當し、又Kuei の音を出す龜や歸にも相通ずる。次に夷は卽ち i といふ音を有してゐて、多くの場合に用ゐられる茲や慈や茨などの發するtzŭの音には甚だ相當らないが『開元釋敎錄』卷四の頭注に依ると拘夷の夷が他の三本にはChiaの音を有する夾となつて居るといふことであり、又前條のKushinagaraを音譯するのに、夷といふ文字を以てsiの音を寫して居るから、夾にしても、夷にしても、玄奘の所謂屈支の支が有するChihといふ音と相通じ、尙又

吉藏の『中論疏』卷一に於ては羅什の本國を示すに拘止(那)といふ文字を以てしてをる上に、前に引用した『尼二種擅文』の前記及び中記に依れば、同一事情を錄せる所に龜茲と拘夷との二種の國名が出て居るから、拘夷國とは明かに龜茲國のことである。拘夷國が確かに龜茲國に相當する者であることが決定すれば、茲に鳩摩羅什が未だ姑臧に赴かずして、本國の王新寺に止住してゐた時代の龜茲國に於ける佛敎界の狀勢を、最も明瞭に知ることを得る資料がある。それは『出三藏記集』卷十一に收められてあるところの『比丘尼戒本所出本末序』に於ける記事であるが、之は本研究に取つて極めて重要な資料であるから、先づ左に其本文を掲げやう。

拘夷國寺甚多。修飾至麗。王宮彫鏤立佛形像與寺無異。有寺名達慕藍百七十僧北山寺名致隷藍劒六十僧劒慕王新藍五十僧溫宿王藍七十僧

右四寺佛圖舌彌所統。寺僧皆三月一易屋床坐。或易藍者。未滿五臘。一宿不得無依止。王新僧伽藍九十僧、有年少沙門字鳩摩羅、才大高明、大乘學、與舌彌是師徒、而舌彌阿含學者也、阿麗藍百八十比丘尼輪若干藍五十比丘尼阿麗跋藍三十尼道右三寺比丘尼統。依舌彌受法戒。比丘尼外國法不得獨立也。此三寺尼。多是葱嶺以東王侯(族?)婦女。爲道遠集斯寺。用法自整。大有檢制。亦三月一易房。或

易寺。出行非大尼三人不行。多持五百戒。亦無師一宿者。輙彈之。今所出比丘尼戒本。

此等所常用也。云々。

此の記事中最も興味ある所は、王新僧伽藍の注として『有年少沙門字鳩摩羅、才大高明。大乘學』と記してある點であつて、頭注に依ると、羅の下に三本倶に何か文字があるといふことであるが、惟ふに此の缺けてゐる文字は、必ず什か耆婆か孰れかであつて、要するに鳩摩羅は羅什三藏のことに相違ない。何となれば、羅什は彼が二十歳の時、卽ち西紀三六三年龜茲國に還つてから、支那に赴いた時、卽ち西紀三八五年頃までは王新寺に住して、國王保護の下に、盛んに大乘諸經論を講說して、其の英才を發揮してゐたのである。而して僧純及び曇充が龜茲國に在つたのは、秦建元十五年(西紀三七九年)以前のことであるから、丁度羅什が王新僧伽藍に停住してゐた時であつて、彼がなほ三十五歳に達せない前のことに屬する。是れ羅什を指して年少沙門といつた所以である。さすれば、前揭の記錄は眞に羅什時代の龜茲國佛教界の狀態を傳へたものであることは疑ひない所である。

阿含學者たる佛圖舌彌と鳩摩羅什とは師弟の關係があつたといふのであるか

ら、羅什が七歳の時出家を遂げて、九歳の時罽賓に赴くまでは、此の佛圖舌彌を師と仰いだのであらう。彼は實に當時龜茲國に於ける名德沙門であつて、斯くの如く多くの大伽藍を統轄するほどの大勢力を有してゐたとすれば、龜茲國に於ては前述したやうに古へから方等部秘密部若しくは法華部に屬する大乘經典が行はれて居り、又羅什の出づるに及んでは所有大乘諸部の經論が世に紹介せられ、殊に般若部の大乘思想が旺んに宣布せられたにも拘らず、他方に於ては小乘敎の勢力が餘程盛んであつたに相違ない。西晉惠帝の代、法炬が多くの阿含部の經典を傳譯したのは確かに龜茲國に於ける敎界の一面の潮勢を示すものである。羅什時代に龜茲國には佛圖舌彌の外に、三藏に精通してゐた偉い小乘學者が居たと見ゐて、『法華經傳記』卷六には、外國記から引用して、次のやうなことが載せてある。

達磨跋陀。唐云法賢。龜茲國人也。天性聰明。具通三藏。粗識外國言詞。謂小爲極。自生貢高。陵辱摩訶衍衆。時有巡禮沙門。名曰須梨耶。誦達法華六千偈。無脫法。對法賢論所誦幽致。實識三藏單淺。歸心大乘。從須梨耶。誦達法華。每日五遍爲業。云々。

茲に所謂須梨耶といふ巡禮沙門は、羅什の大乘敎師たる須梨耶蘇摩(Suryasoma)のこ